

川柳塔



No. 902

七月号

創刊大正十三年
通卷九〇二号

白川協加盟

予告

第八回 川柳塔まつり

とき 10月6日(日)

ところ アウィーナ大阪

◎詳細は8月号でお知らせいたします。恒例によって同人総会・各賞発表・記念句会・懇親会を開催しますのでふるってご参加下さい。

選者交代のお知らせ

九月号(七月投句締切分)から来年八月号までの選者を次の通り交代します。

水煙抄 奥田みつ子

茴香の花 政岡日枝子

川柳塔社

路郎賞・川柳塔賞の応募は

八月号の刷込み用紙で――

①川柳塔欄・水煙抄欄に6か月以上、出句した人に応募資格を認める。

②平成13年9月号から平成14年8月号までの入選句(自分の句を出句する)

③8月号刷込み用紙に8句を楷書で書き8月10日必着のこと。

④締切日が早くなりましたので注意して下さい。

昨年九月から今年八月の間に

誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を選挙して応募して下さい。

ただし、「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳塔賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、間違いないようにお願いします。

第二十六回

全日本川柳沖繩大会

河内天笑

今からちょうど十年前の平成四年六月、それまでの「日本川柳協会」が「社団法人・全日本川柳協会」と大きく生まれかわりました。沖繩祖国復帰三十周年に当たる今年、第二十六回全日本川柳沖繩大会が六月九日、糸満市摩文仁の平和祈念堂で開催されました事は意義深く、沖繩柳壇が四十七都道府県の仲間として、名実共に自立に向けて歩み出すための大きな礎になりました。また、今大会は当初予想を遙かに上回る五五四名の参加者を得た大盛會となり、その勢いは私達にも大いなる感動と夢を与えてくれました。沖繩柳壇の今後の益々の発展が注目されます。

平成四年に法人格を取得して社団法人・全日本川柳協会となった時点で、仲

川たけし会長の構想に「祖国復帰三十年に沖繩大会を」という夢を育まれ、種を蒔かれ、着実に実行への努力を惜しまれなかった功績は大きく評価されています。

なお、この沖繩大会を機に任期を一年残して会長引退の決意を、大会前日午前の理事会及び午後の常任幹事会に於て発表され、惜しみない拍手が送られました。また、大会当日の総会では名誉会長に仲川たけし氏、新会長に吉岡龍城氏、理事長に今川乱魚氏、副理事長に塩見草映氏が承認され新三役が誕生致しました事をご報告致します。

私ごとですが、平成四年十月末から十一月二日にかけて義母達と、妻の祖父の五十年祭で沖繩北部にある出生の地本部へお墓参りに行った時の事です。古座市（現沖繩市）ほかから親戚が集まり、那覇市を四台の車に分乗して出発（私はレンタカー）。途中広大な嘉手納基地を左に見て約二時間で本部に着きました。

さとうきび島がつづく道の少し高い所

に一団のお墓の群れ。五十年祭ということとで、お坊さんが居るかと思いきや親戚の人ばかり。家の形をした石碑の前に八畳くらいの広さの土間（セメント）があり、銘々に持参したごちそうが闇市の売店のようにたくさん並べられました。石碑の前では、長老が黄色い紙を次から次へと焚きはじめました。あとで説明を聞きましたら、死者があのお世でお金に困らないように送っていたのだそうです。

その時は、二日間レンタカーであちこち観光させて貰いましたが、首里城はオープン前日だったので周りを見るにとどまりました。今回はゆっくり首里城や識名園を観光しましたが、琉球王国は平和な国だったことが偲ばれました。同じ年の六月にハワイアン音楽の仲間とハワイに遊びましたが、ワイキキの浜辺は歌詞ほどになく、波間には油性の泡が浮いて期待外れでした。その点沖繩の海はどこもきれいで最高。残波岬の夕陽に旅情をそられました。



座右の句

おれに似よ俺に似るなと子を思ひ

(路郎)

私の句

誇らしい履歴邪魔するボランテア

井伊東吉

川柳塔 七月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言

第二十六回 全日本川柳沖縄大会……

河内天笑……(1)

誤用・慣用

恒松町紅……(2)

川柳塔(同人吟)

河内天笑選……(4)

自選集

板尾岳人選……(57)

水煙抄

東野大八……(82)

麻生路郎物語(7)

波多野五楽庵選……(85)

愛染帖

古藤愛子……(88)

■エッセー 父が遺していつてくれたもの

特集 私の健康法……(90)

園山多賀子・恒松町紅・田中正坊・中後清史

酒井一壺・寺井東雲・福井桂香

俳風柳多留二四篇研究 43

宮西弥生選……(96)

茴香の花

宮西弥生選……(94)

誤用・慣用

恒松町紅

町内の氏神さん(旧市内五神社の一社の社務所改築で寄付金を募ることにになり、そのお願いに町内を回った。

ある家で改築の説明も終わり、寄付金の話で「また建て替えられるのですか」という問いに、うっかり「立て替え」と勘違いして、「お金は立て替えません」とおかしい返事をしてしまい笑い話になった。

ある投句に「独り居の寡黙を癒す○○」という川柳があったが、これは「独り居の無聊を」ではないだろうか。

講談社発行の『日本語誤用・慣用小辞典』という本が面白い。その中のほんの一部を紹介する。(文面はスペースの都合で簡略)

「一姫二太郎」というのに、ある奥さんがご主人の上司の子供さんあてに、クリスマスプレゼントを送ることになった。

ご主人は常々「部長のところは一姫二太郎だ」と言っていたので、奥さんは三人分のプレゼントを送った。

ところがご主人から「部長のところは子供

「池」	高島啓子選	(98)
一路集「スクリーン」	傍島克治選	(98)
「ちよつと」	さえきやえ選	(99)
初歩教室「テーブル」	吐田公一	(100)
秀句鑑賞「同人吟」	清水潮華	(102)
水煙抄	川崎ひかり	(104)
■エッセー	吐田公一	(105)
添削のむずかしさ	出口セツ子	(106)
旅行失敗記	穴吹尚士	(107)
小林周信さんを偲ぶ		(108)
六月本社句会		(112)
各地柳壇（佳句地十選／浅野房子）		(127)
柳界展望		(167)
全日本川柳誌上大会・二〇〇二年沖縄大会		(168)
七月各地句会案内		(170)
■編集後記	楓葉・希久子	(170)

座右の句

平成の荒ぶる年の長刀鉾

私の句

体重計心配事で針動く

（薫風）

岸田 知香子

は二人なのに、なんで三人分送った」と叱られたという。

「一姫二太郎」というのは、子供の生まれる順序の理想を言っていることで、最初は女の子で、二番目が男の子の順序をいう。

それは女の子の方が育てやすいからという理由である。これを奥さんは女の子が一人、男の子が二人と勘違いしたという話である。

また「お土産（おみやげ）」という項目ではNHKラジオでアシスタント嬢が、「はいオドサン」と言つて息子に小さな袋をくれました。てつくり「おとうさん」が訛つて「オドサン」だと思つたら、あとで男性のアナウンサーが「先ほど『オドサン』と申し上げましたが、『オミヤゲ』の間違ひでした」と謝つたのです。

これと似た話で、あるとき百貨店にたびを買に行つて若い女店員に「たびを見せて下さい」と言つたところ「たびはありません」という答え。

目の前に並べてあるので「ここにがあるじゃありませんか」と言うといえ、それはアシブクロです」と答えたという。「足袋」が読めなくなっている。

その他にも「絵に描いた」と「絵に描いたよつな」「おぎなり」「なおざり」等々、それぞれ使い方が詳しく書いてある。

日本語は難しい。

川柳塔

河内天笑選

弘前市 今 愁 女

梅雨空にペンキ塗りたて青蛙

野の草にまもられ遊ぶ青蛙

身じろがず石の如くに墓

首まげた方に歩いた墓

ででむしのひまごかやしやご葉の先に

なめくじが引きずってゆく住所録

鳥取市 倉 益 一 瑠

春の鈴振って感性揺り起こす

天井を睨んで明日を組立てる

半眼で老母は裏までお見通し

譲るものないが漬物伝授する

客で来た娘へ愛のありったけ

善と悪ブレンドさせて人は生き

富田林市 藤 田 泰 子

体型も思想も崩れ丸くなる

禁断の恋もお酒も飾り棚

一病という親友を持っている

義母逝去長いドラマが今終る

頂点で果てる生涯登り坂

敵に塩贈る快感だつてある

高石市 浅 野 房 子

傷付いた脳細胞がゆるむ夏

身辺整理いつになったら終るやら

喉元を過ぎたか態度デカくなる

公園の犬猫鳩にある憩い

故郷のさまがわりああエトランゼ

沢山の疑問符抱え季は移る

鳥取県 林 露 杖

藤の花長く萎れて雨模様

裏戸開くどずんと筒置いとくよ

救急車乗った経緯茶を吸る

脳梗塞是れとて老いの辿る道

蕁麻疹ごときに日課狂わされ

療養の身に鶯の声うまし

広島市 森田 文

咲いたさいた声をかければ散る牡丹

少しうかれて出任せにふくハーモニカ

正確と時計の下に貼つてある

愛よ愛思い違いか春嵐

母の忌へ坊さま少し歳を取り

風も変り路地も無口になつてゐる

弘前市 蒔苗 果林

草たちの言葉が判る耳欲しい

草の花そよぎ楽しい恋してる

咲き初めの花に囁くおめでとう

褒められたお札が草の芳しさ

草の花一つ散歩のよい土産

草ともども陽炎にふととろけそう

黒石市 相馬 一花

外国へ行くとあなたも外国人

恋愛の賞味期限も長くなり

妖艶な金魚も真似るフラダンス

強引にキスして欲しい腹の中

寝た切りになつて夢見る梯子酒

ファッションショー 鎖骨で勝負するモデル

弘前市 高瀬 霜石

夜汽車に乗つて九〇〇号の大会へ

大阪に着いたらまずはどうどんやろ

選者室ご飯が喉を通らない

国訛り名刺がわりにスツと出す

何万の墓を見に行く高野山

一〇〇〇号の大会僕は出れるかな

横浜市 清水 潮華

駢足はよそうゴールへ早く着く

後ろからグサリぎっくり腰になる

太陽も包み洗濯物たたむ

束の間の花の命へ水を替え

そっくりな帽子面影引き戻す

受け入れて気楽になつた負の部分

横浜市 保田 絹子

入院を前に満喫大自然（ニュージーランドの旅から）

ようこそとマウントクック雲間から

ストップの道は羊が渡るまで

茫洋のニュージーランド急がない

フィヨルドの山に歓声虹の橋

満天に見つけた南十字星

大阪市 西出 楓楽

本当に呆けたら呆けたとは言わん

バーゲンに燃えなくなつた寂しさよ

正論はいつも小声で語られる

トラブルを纏うおんなの美しさ

七月で亡夫と同一年になる

遊べ遊べ五体が軋まないうちに

大阪市 小糸昭子

むなしさは何時まで続く自爆テロ

自惚れて棘で傷つく薔薇の花

絵に書いた餅になつて欲の皮

一枚の毛布がシヨック和らげる

夢誘う夜はワインの赤が良い

花吹雪黄砂を連れて四月バカ

大阪市 杉澤汀

空襲の話になると起き上がる

食べることだけ考えた焼野原

思い出に捨ててそのうた粗大ゴミ

丁重な挨拶うけた知らん人

利息ゼロ預り料をとるらしい

ごんたしてかないまへんと犬のこと

大阪市 神夏磯典子

紫陽花が誘惑をする梅雨最中

雷が一蹴をした軽いウツ

だんだんと男女の区別分らぬ世

再婚が幸せ過ぎるのもシヨック

新薬の毒下ろすよう青い汁

音もなく旨い話が寄ってくる

大阪市 榎本日の出

日月火 水木金土 みな休み

生きがいはアハハと笑うことさがし

生ゴミと一緒に子供送り出す

水着きて歩くだけなのスイミング

戒名が睨んでいます元氣出せ

満月が夜行列車を追いかける

堺市 和田つづや

頬杖で時を旅する癖がある

四月の客は筍飯を出す

天の邪鬼なりの譲歩が通じない

饒舌な父の傍には徳利あり

感謝する氣持紡いでボランティア

何処となく妻の恐さも愛だろか

堺市 村上玄也

につこりと笑ってきつい事を言う

法改正センセイ方がザルにする

招待へ一度だけ着る服を買う

香典も松竹梅の三ランク

期待しているが不安な虎ファン

氷山の一角でしかない疑惑

西宮市 奥田みつ子

やさしさの伝わる受話器ぬくくなる

目を閉じる風の流れを読むために

自分との戦い今日は負けられぬ

うぬぼれが半分あつて謝れぬ

うっかりと受けた流れ矢投げ返す

CDが友今宵はタンゴ ヴァイオリン

西宮市 西口 いわゑ

人間と人間だから喧嘩する
大風呂敷広げたあとの寒さなり
流れ星母を送った日と同じ
初対面すごいオーラに打たれてる
ひと言が呪文のようにのしかかる
カーネーションしかと私に子が二人

西宮市 菊池 トミエ

迷わないタンポポの繁^{わた}奔放に
写真集^{わた}拵^{わた}げて想う里の山
散歩道範圍拵^{わた}げて頑張ろう
花曇りよもぎ団子を食べに寄る
大声の方へ集まる潮干狩
カラフルな都をどりはヨオイヤサー

尼崎市 田辺 鹿太

裏方に徹する妻のありがたみ
児の嘘に騙されてやる四月馬鹿
口裏に本音が透けるおぼろ月
憎らしいほど実直な葱坊主
脂くさい父の形見のハーモニカ
虎の威を借りて儲ける百貨店

宝塚市 嵯峨根 保子

青春へ夕日に赤い帆でかえる
束の間のダニーボーイは腕の中
人の世や近所の犬は手懐けた

おっとつとここで転べば木阿弥だ
デパートを二つ抜けたら帰る駅
昼すぎに機嫌なおした妻と出る

三田市 久保田 千代

連休は心の襷が晴れている
春風が噂話をコピーする
五七五詠んで心の糧を得る
やつと得たチャンスへバツト意地を見せ
予定表破いて翼軽くする
負けて勝つつもり反論せずにいる

香芝市 大内 朝子

わいわいと命を燃やす若葉達
思うまま言うて頭を小突かれる
煩惱の渦に悶えている蟻で
優しさについはだされてゆく迷い
底抜けに明るい時の空元氣
玄関を出るとしゃきつとする魔法

和歌山市 福本 英子

杉檜まだ続きあるアレルギー
走り梅雨少しせつちか過ぎないか
メールからメール母の日ほつとかれ
母の日に届いた花は他人から
続編は亡夫を捜しに独り旅
喪の席で紹介される甥の嫁

和歌山市 田 中 み ね

玉になり笑い転げて旅靴(柳友と旅行 2句)

左右からの軒に耐える旅枕

六時起床妻のパワーで夜が明ける

長男の嫁とはこんなものでしょう

抜き打ちにやって来たのは孫嵐

目ン玉に休みあげたいテレビ好き

和歌山市 川 上 大 輪

賽銭箱に銭を捨ててはいけません

いい天気ですねと喋ることがない

ストライクゾーンに落とし穴がある

一生懸命生きているのによく転ぶ

煙草が切れただけでなんだか落ち着かぬ

長い物に巻かれて酸素不足なり

海南市 三 宅 保 州

振り向きはしない決心揺らぐから

ジャンケンで決めれば世話のないものを

プランコに乘ろうだあれも居ないから

病名を知りたくて取る診断書

その中でしか泳げない七光り

ほんとうは地球すべてが禁猟区

和歌山市 細 川 稚 代

先代のおかみ偲ばす宿の軸

柏餅私只今ダイエツト

あのこともこのこともあり疎縁なり

感情のおもむくままの血の絆
切れ味の悪いハサミとうまがあい
独裁者囲むとさむい風が吹く

箕面市 岩 津 ようじ

仏より先に粽を生き仏

土地も夢株もバブルの夢の跡

子のケータイもろて持て余してる友

おしっこが恐い前立腺肥大

にぎやかに暗い話を患者同士

減塩という梅干のまがいもの

池田市 栗 田 久 子

中元にかがと届くダイレクト

生命線きょうはきれいに延びている

一匹が鳴けばここぞと蟬時雨

湯上がりのうちわですくいたい螢

朝顔のつぼみがやおらゆるみ出す

紫陽花があしたの雨を待っている

高槻市 西 谷 治三郎

しんどいと言わぬ妻の背丸味帯び

リハビリに役立っている歩道橋

ケイタイを電話ボックスでかけている

振ってみて少し手応え一合瓶

へそくりをしていた頃が華だった

院長も社長も詫びが堂に入り

豊中市 安藤 寿美子

花盛りの国へふんわりランデイング
水郷で鴨に見物されている
見た事もない花が咲くフロリアード
カタカナの花の名前はすぐ忘れ
跳ね橋をのんびり見ているドライバー
美しい運河にこころ癒される

吹田市 早川 棲世

救世の首相はワイドショー仕立て
ニユースキャスター自分の国がほめられず
梟雄は邪神と亡ぶ日本書紀
DNAわが祖の猿も拗ね者か
神国であつた時代は娘売り
墓標累々幾人哭きて銃執りし

守口市 結城 君子

桐の花見上げてこんな遠回り
体力をためしに雨期がやってくる
アールヌーヴォーのモデルになった鳥の幸
間歇泉自然の偉力見せつける
泰山木に小さな悩みとさげすまれ
哲学者のプロフィールなり羊の目

四条畷市 吉岡 修

変わり身の技をそろそろお見せしよう
罪の無いお話なんておもらない
ランドセル降した背が甘えだす

OKを医者は一合妻五勺

美人との議論はとんとファイト出ぬ
サラリーマン一本道であるものか

寝屋川市 岸野 あやめ

生きるもの抱き山高く海深し
話題移ってレディーはブイと席外す
午後のお茶人の噂は面白い
歯車の一つ狂えばみな狂い
浪人へ陣中見舞いなど致す
保証印押すな仏間の灯が揺れる

寝屋川市 平松 かすみ

呼名賞もらつたそうな若い頃
親指の消える手品を見せてくれ
先生の十八番 小さな喫茶店
(里小路師を偲び)

達筆のハガキ読むのに虫眼鏡
胃切つてご飯代わりのワンカップ
達筆のハガキ短冊みな宝

枚方市 海老池 洋

新入りの美女が部内を春にする
説得力ない法案の多数決
魔法使いの一味か森の黒揚羽
満腹で飛べない薮蚊笑えない
人臭さ好きでミナミへ足の向く
振り向けば故郷へ続く橋の数

東大阪市 北村賢子

そそれるものがあるから生きられる
毎日が休みになってからのうつ

不器用に真っ直ぐ生きて悔いは無し

エールを贈るたつた一枚残った葉

やりくりはしても笑顔は絶やさない

ブルータスばかりが居る永田町

八尾市 生嶋ますみ

ビールの地位おびやかしてる発泡酒

青畳馴染んでくれぬ長い脚

介護する爪の先まで疲れきり

もう雨は上がりましてと言う雀

おばあさんと呼ばれて知らん振りをする

身の内に少しの悪を飼っている

八尾市 井尻民

納まりがつかなくなった約束日

メッキ剥げ別れてくれといわれそう

いつだってあんた味方と言うたでしょ

旨い話になさけ容赦のない浮世

しみりと炎の先にある未練

振り向きもせず右手あげグッドバイ

藤井寺市 高田美代子

履歴書を一度も書いたことがない

背の高い靴を履いてる狂言師

マヨネーズもビールも何時も冷えている

ひとり旅どこで寝ようと食べようと

水パラー掛けたらわたししやんとする

一枚のカルテが怖いことを言う

藤井寺市 太田扶美代

多忙だった頃のあなたを懐に

ある時は真っ正面から押して出る

私を騙しましたネ総理どの

ある時は女の顔で花を買う

終章へ歌ってみたいラブソング

私を好かない人を嘆ぎ分ける

藤井寺市 鴨谷瑠美子

宇野千代の風呂敷趣味の見せ処

謎の花届いて揺れてくるころ

午後三時余分なものを食べ過ぎる

芸達者新人呼ばわりは出来ぬ

忘れ物置場で三日寝た日傘

寄り添うている紫陽花に午後の雨

羽曳野市 吉川寿美

今朝も夫に目覚めがあったありがとう

こま切れのドラマをつなぎやがて喜寿

あぶり出しの中に隠していた微罪

藁にすがって見上げる空に流れ星

愛し愛され傷つけ合うて輪廻とは

とほとほと影道連れに來た月日

羽曳野市 徳山 みつこ

週休二日大丈夫かな時間制

総理ソリーまでは効かせていたパンチ

新緑を浴びた私はサラサラだ

イエスマンになって淋しい天の邪鬼

考えてみればあなたのいう通り

夏へ夏へと十葉の濃い緑

大阪狭山市 矢野 梓

占いに髪を切ったり伸ばしたり

占いを信じてからの不眠症

痛いところ突かれて声が高くなり

紫が引き締めている菖蒲園

慇懃なことばにきつい棘がある

訥弁の兄で説得力がある

富田林市 片岡 智恵子

自惚れもわたしの生きるテクニク

いちぬけて昨日と違う水の音

木洩れ日のあかりは母の道しるべ

亡命を希望されない日本国

暫くは記憶戻らぬ月曜日

胃にささる言葉もらった日の疲れ

鳥取県 鈴木 公弘

掌におごる平家と書いて生き

忘れたと言えぬ返事のぶらぶら

紫陽花にやる気をもらう雨上がり

生き残りたくて体温計を買う

我慢して気持に富を蓄える

サヨウナラそして思い出ありがとう

鳥取県 土橋 はるお

番犬も猫も私も花が好き

その中にワハハと笑えそうな句碑

句碑の背に水車があればなと思う

生き残るために変身でもするか

新しい丸太の橋はバネがある

草叢に尻餅ついた跡がある

鳥取県 さえき やえ

ごんたくん久しぶりで寿司を巻く

変わるのがこわくて元の眉を引く

いい苗が野菜作らぬ気をかえる

人柄がいちばん方角なんか気にしない

手作りの花で供養の灯をともし

底光りする人のそば離れまい

鳥取県 岩崎 みさ江

鯉のぼり叶わぬ夢を娘が果たす

お隣の領空泳ぐ鯉のぼり

通oryゃんせ扉の奥の謀

時をかけ揺すると浮いてくる本音

真実を映す鏡は伏せてある

軽く見た過去から恐い請求書

鳥取県 新家 完司

新緑の匂いに負けてずる休み
人に吠え天に向かつて鳴く犬よ
麻雀をすると言葉が悪くなる

許されよ大きな顔は生まれつき

法螺を吹く種もだんだん減ってきた
飛び跳ねてみても生け簀の中である

鳥取県 谷口 次男

大山がキリツと締まる山開き

富士山に負けぬ美形の伯耆富士

人見せず麦わら帽に立つトンボ
温もりのひと言かけてグッドバイ

改めて原爆思う街めぐり

一步引きひと言ずつを吟味する

米子市 中井 ゆき

おしよせる新芽の声に起こされる
はるばるとお越しの黄砂に泣けて来る

雑草の根つこの強さシャツポぬぐ

花あふれ五月生れに感謝する

老犬と無言の花に癒される

背伸びして生きて来たから背がゆるむ

米子市 光井 玲子

丸かじりリング冥利につきるだろう

仏さま静かな日々をありがたう

反抗期の孫の転換待つ祈り

開発の波で荒野は生き返る

都市砂漠に孫たちきつと根を下ろす

いつの日も父は静かに風をよむ

米子市 林 瑞枝

石見銀山 歴史と今が交差する

愛は泡沫木洩れ日の湯に浸り

埋没林尋ね太古をインタビュ

いきいきライフ神のまなざし信じよう

迷い蝶友の助言に彷徨えり

百度石ふたりの仲を知りつくす

鳥取県 夏目

赤いシャツ着ると言いたいことが言え

引きずった靴音残しゆく戦士

火遊びの跡にアロエの汁つける

言い訳もできず女々しく引き下がる

人間が退化をすれば猿になる

川底の月を引き揚げ酒肴とす

鳥取県 近藤 佳子

ときどきは神と電話をしています

神さまの答はいつも手きびしい

玉の輿のつたつもりがすごいケチ

児らの大声を吸いこむ鯉のぼり

ままことの友も私もまだ達者

みなみ風夢を膨らませてくれる

一い
粹すい
(健一改め)

松江市 銭山昌枝

医者嫌い返上素敵な担当医

手術後の目で真つ直ぐに人を見る

通院へ新調の服見せに行く

天敵がわたしの傍を離れない

子には子の家族があつて放つとかれ

勘違いしてから距離が近くなる

倉敷市 小野克枝

さらつとした人柄で敵が無い

裸足になると土の優しさが判る

揺れながら終宴までの手をつなぐ

張り合つて人生クイズ解くふたり

倒れない独楽だと妻は信じてる

斜め向くくせと闘う車椅子

倉敷市 井上富子

金の成る木が見事に生えた試験管

日焼け止めしつかり塗つてアウトドア

お客様を釘付けにした琴の爪

真剣な肩にフォローの風が吹く

泣き虫も男一匹独り立ち

アイメーク一皮むけた蝶になる

岡山市 大石 あすなろ

かくれんぼしたがる左脳刺戟する

丹念にめがねを拭けば見える明日

添え書きの温さに涙もろくなる

上昇気流大きく掴み子は巢立つ
胸のうち吐き出す広い海がある
ユーモアを軽く流して生き上手

竹原市 森井青居

吉日と思えばすべて有難し

ファミリィに一匹は要る鬼の貌

掘出し市それなりな値がついている

長老の意見侮ることなかれ

鼻息の荒さを信じ切ることに

争いを避けて戻つて来た勇氣

熊本市 永田俊子

満秋様を奪つて行つた渡り鳥

生と死の間をつなぐ白い雲

幸せは煮豆ぐつぐつふきこぼれ

お先にどうぞ少し利口になりました

お喋りを春まで押さえていた冬木

いつまで続くか私の綴り方

熊本県 高野宵草

普段着に替えて饒舌よみがえり

断裁機造幣局は楽しかる

あこがれて覗いた蕨詫びて摘む

辛辣な妻の叱言があたたかい

日曜大工道具に凝つただけでした

侵犯の筈断乎食の刑

砂川市 大橋政良

瞑想の顔で柩の中にいる

その線の内外にいる運不運

山門を出て下町の風にあう

遠回りしても答が出てこない

傷ついたことだけ今も忘れない

十和田市 阿部進

花のよに心を開き咲きたいの

前向きで本音で生きる古希夫婦

のんびりと充電してる屋台酒

普段着で生きる男がたのもし

何時までも貴男を愛し続けた

弘前市 岡本花匠

風車今日も子安の子守唄

薬害の瀬踏みしながらくすり飲む

相性も愛憎秘めて橋渡り

紫陽花の泪して聴く正信偈

金積めず閻魔にねがう白いみち

弘前市 相馬銀波

思い出は酒と仕事と亡父の咳

ブランドを埋めたい汗が乾かない

酒に吞まれて罵詈雑言は猿芝居

自信ない時発言に刺があり

さよならの泪で濁る電話口

弘前市 高橋岳水

花見酒酌んで馬齢を積み上げる

手鏡へ今が旬だと問いかける

鍵穴にけしかけられた好奇心

錠剤の色に揶揄されつつ生きる

雑兵の身ぐるみ剥がす不況風

弘前市 小寺花峯

愛半ば花絨毯の中にいる

頬杖をついてる午後は吹き荒れる

人生に歩き疲れた影法師

正論が風に退く日の迷い

バーゲンの値札がついている不思議

弘前市 宮崎ヒサ子

緑みどりもう枯れ色は見当らぬ

赤ワイン飲んだ夜の夢色付いて

冗談を鵜呑みした日の熱っぽさ

妹よ笑顔の写真一周忌

離れ住む子へ一行の強気書く

弘前市 須郷井蛙

献立が急に変った蜆売り

OB会はめられに行く新ドレス

連休が明けて肥った体重計

ワタクシの支持率落ちる二日酔

極楽のイメージをする歳になり

弘前市 櫻庭順風

さいたま市 八田 敏

説得にあしたの虹を描く絵の具

富士登山古希から休むこともなく

わくわくと野宿目論む富士登山

海峡の宿で綴った直木賞

校長も家系も継いだ九代目

弘前市 一戸ツネ

りんご咲く津軽は五月マメコ蜂

一汁一菜今日を養う今日の貌

年金をケチに暮して死に金に

津軽路や友禪模様花吹雪

水鳥の恋のかけ橋花筏

弘前市 中山雅城

九百号歴史に眠る人恋し

温度差に耐えた真夏のビルの窓

藍染めに鮎泳がせる夏暖簾

真夏日の空を見上げる終戦日

口笛で友を呼んだら叱るはは

弘前市 富士慕情

アハハハハ約束破る電話なり

逆転の知らせを聞いて飲みなおし

特価品思案のうちに売り切れる

強制はしないと寄付を取りに来る

お御籤の凶を貰ったことがない

体調によつて介護の辛い日々
同じだけ老いしよき友墓参道
年追うて鉢小さくなる菊作り
挿芽終え焼く菊株にさだめ見る
雑草の命歩道の目地に伸び

富山市 舟渡杏花

うどん屋の隅でときめきくれたひと

再燃の兆しが怖いおぼろ月

立ち上がるに金ある強さ無い強さ

体調の好すぎる老いも困り者

消印に透ける男の憎い顔

富山市 島 ひかる

よその子を叱る勇氣につい負ける

夜の更けた街へ牛丼屋の明り

中高年自覚ストック二本買う

唾つけて貼った切手だとも知らず

満月も欠ける定めを知っていた

富山市 酒井 輝

日めくりを剥ぐ一枚が重い歳

忘れない事が時どき寝かせない

大正の手に吊り皮が高過ぎる

ポストまで遠い別れる気の便り

東大を落ち幸せと住む家族

静岡市 安本 晃 授

思い出がもつれて回る失意の夜

中流と言う味しらず年金者

残り火を燃やす詩のある日日樂し

老いてゆく空しさ埋めるベンの友

妻好む幸せ彩を溶く絵皿

横浜市 田中 笑子

孫の守りじいちゃん流の知恵袋

誕生の届け出済んだ子の命

縄暖簾くぐって街のイロハ訊く

パソコンが出来ぬ私は今もペン

咲きはこる花の素顔に嘘はない

横浜市 菊地 政勝

難解な文字が嬉しい集印帳

誉められて稽古休めぬ日が続き

寝たきりの祖母に訊き出す塩加減

変貌の街へ迷子となるつばめ

ストレスを抱えたままの休肝日

横浜市 小野 句多留

銃口を持つ少年の遠い道

さくらんぼ理路整然と届けられ

如才なく振るまう嫁と馬が合う

感動をすぐ口に出し慕われる

闘病に引き算ばかり考える

川崎市 和泉 あかり

早起きをした日は早く腹も減り

わたくしに根付いてしまふドッコイシヨ

一病の部品となつている薬

ロボットと家族ごつこの夢がある

美辞麗句壊れるときは音たてて

東京都 播本 充子

百歩譲って亡母さんの家に棲む

占いを信じ運氣に乗っている

バックコーラスも顔中口にする

やる事があつて美味しい朝ご飯

会費不要を売りにする趣味の会

富士宮市 渥美 弧秀

ひびきの良き溢れて楽し日本語

ベッドから変わる浮雲見て飽かず

点滴の窓には茜富士が映え

マイペースで行くしかないかぬれ落葉

晩年を妻と生き抜く富士の郷

静岡県 蘭田 獏 杏

大の字になつて五月の風を浴び

清流の五月銀鱗はねている

春らしくないどしゃ降りに予定変え

五人目の曾孫を見るもガラス越し

経済の自由に森が荒らされる

可児市 板山 まみ子

亀岡市 井上 森生

テレビからもらった知恵のおすそ分け

花むこの母で留袖強いられる

携帯をお守りにする通学路

食欲の鍵あけられた大笑い

三世代集まる日だけ出るカレー

愛知県 早川 盛夫

働けるだけで倅せだと思ふ

失敗を美女は笑って済まされる

なめくじの全速力を笑えない

おい俺だめしは要らぬという電話

夫婦なり今日も黙ってめしを食う

京都府 稲葉 冬葉

政治家さんに疑心暗鬼になっている

無理出来ぬ身の上されど誕生日

したたかに生きる外ないアリ地獄

二枚目の舌で言訳してござる

霞を食って一〇〇〇号に生き残る

京都府 丹後屋 肇

新緑に癒されている古寺の塔

避難小屋雑居寝で明かす登山靴

口コミで仲間が増えるフラダンス

女子オープン腕立て伏せのリハーサル

胃カメラのモニターをみて息を呑む

茅葺きの屋根やわらかく里の春(京都美山町 5句)

山郷にどこからか水流る音

美山では天ぶらになる花つばき

鯉のぼりそこらに子らの笑う声

茅の屋根見守るように柿若葉

京都市 都倉 求芽

遺憾だと言えば大臣つとまるよ

右折しか知らぬ純一郎の新車

変化球敵も全盛期は過ぎた

広辞苑と脳の重さを考える

明日は晴れ雲がゆっくり山を去る

京都市 高島 啓子

盛り場の酒とは別に家で飲む

午後三時ここから時計倍進む

主婦の午後ひとりの時は大切な

四季咲きのバラたつぷりとある自信

階段の手摺りをいつのまにか持つ

大阪府 澤田 和重

星影のワルツで宴お開きに

ほめ殺す舌が兇器になつてゐる

きつとねの約束指に覚えさす

叱られた通りに叱るおままごと

どんぐりの背比べしてる内は花

大阪府 初山隆盛

一言が愛の齒車狂わせる

必殺のダウンを誘う軽いジャブ

パパの振るタクトで楽しバーベキュー

摩訶不思議ここにわたしという個体

お大師の功德の道へ遍路笠

大阪府 米澤 俣子

年金の額にシナリオ書きかえる

ひとことを根に持ち視野を狭くする

ユーモアが通じぬ人の悲しい目

おたやんでラッキー今も飽きられず

ふわふわと思考力ゼロ風邪三日

大阪市 前 たもつ

新人しかとれぬ新人賞の価値

歓迎の洗札受ける一気呑み

大阪城毎朝妻と手をつなぎ

三億円当った人を知っている

白アリもいっしょに生家二百年

大阪市 川 端 一 歩

ロボットよキミも休みを取りなさい

年金の身も腹時計確かなり

チューリップいやいやしてる通過駅

ライバルが故障悲しくもゆるむ顔

生命線長く金運ない手相

大阪市 鶴田 遠野

お互いに耐えて記念日また迎え

子の彼女腫れ物みたいに男親

片意地を落書帖で今日も詫び

球ひとつあまく投げさす男前

フリーパス持った女に焦らされる

大阪市 川 原 章 久

携帯はキライ紐付きなお嫌い

パチンコ屋がつぶれ隣にパチンコ屋

良い子孫揃い傘寿に日々安堵

ハイポーズ美人に撮れはそりや無理よ

万緑の今青汁のコマーシャル

大阪市 寺 井 東 雲

まだ死ぬぬ医者がなかなか殺さない

楷書より草書になつて遊びたい

プロペラにかき回された思い出よ

入学の札は賽銭札にする

まごころの介護でかえす母の恩

大阪市 榎 本 舞 夢

散り際も威風堂々舞う桜

タイガース強くて狂う予定表

お食事を誘つてくれる人が居る

調子良い人とは車間距離を置く

迷惑をかけないように竹を踏む

大阪市 中澤伽羅

大阪市 津守柳伸

阪神が夫のお守りしてくれる
邪魔だとは言えない孫のお手伝い
妻の出す合図はいつもNOばかり
駅の名を知る楽しみもローカル線
このあいだ行つた所が写つてゐる

大阪市 川久保睦子

大阪市 松尾柳右子

トラブルの裏で誰かのうす笑い
可愛いと言われうれしい熟女たち
三回忌今もタンスに夫の香が
里の風月と仲よく話し合う
母の日にバラ一輪と嘘ひとつ

大阪市 板東倫子

大阪市 小泉ひさ乃

母の日は亡母好物の豆ごはん
思いつきり亡母のと呼んで夢さめる
匿名の手紙は貴方への果し状
デパ地下でときめいてパリのワイン買う
噫無情 高齢者専用刑務所

大阪市 津守なぎさ

大阪市 清水絹子

満開のつつじ竹林抜ける風
人力車往き交う京の風物詩
足腰をきたえるための器具が増え
たまさかの紅いそいと鉄砲玉
診察券三枚持った身だしなみ

タイミングぴつたり合つた水芭蕉
絶景へロープウェイも二階建て
桃桜抜けて穂高の雪景色
竹藪を抜ける嵯峨野の人力車
寒がりと暑がり連れた旅カバン

大阪市 松尾柳右子

声あげてけり合っている子の寝相
カーナビにそむいて走る裏街道
夫婦して初合唱の古稀祝
水平線昇る朝日をもう一度
サボテンが三年振りに花をつけ

大阪市 小泉ひさ乃

握手から伝わる人のあたたかさ
雲行きへ老母は静かにお茶を出す
矢印がほしい人生まがり角
久久の銭湯むかし話する
そしてまたひとりが消えた永田町

大阪市 清水絹子

午後からの孫の添い寝に寝てしまひ
風みどり午後の窓辺で新刊書
六姉妹久し揃えばお葬式
商店街十指に足らぬ人通り
孫の二歩私の三歩手をつなぐ

大阪市 中村 叡子

母狩り老いても人に負けず食べ
狂う季に梅雨も早ばや来るらしい
気付かないゆるい坂道こたえます
走馬灯この老いの道父母も
あと少し定年なのに邪魔な慾

大阪市 浦田 綏子

一言で言えば静かに暮したい
家族とは枷か絆か風に問う
終りなき夫三百六十五連休
ジーンズに若さきかせているつもり
ソユーズが宇宙ホテルへドッキング

大阪市 奥村 五月

頑固でも祖父の意見は逆らえぬ
明日の汗補給しに行く縄のれん
お喋りと仲良く暮らす地獄耳
母さんは父を励ます嘘もつく
うるさいと思うが俺にすぎた妻

大阪市 安達 はじめ

円満な人と言われて主義がない
歌つてとせがむホステス聞いてない
仲直りしたくて出した招待状
重いビク足どり軽し大漁日
失敗の体験談にあるぬくみ

大阪市 中田 あい子

悟るよりあきらめるすべ身について
あとからの入院患者が先に出る
主義主張違う友だが酒はあう
貫禄は重役なみの平社員
再就職きまつて古い手帳焼く

大阪市 津村 志華子

衣替え流行おくれの服ばかり
五月晴れ風のワルツで泳ぐ鯉
くじ引きの運にそつばを向かれてる
どん底でいつかいつかと旗を振る
初鰹お国なまりとコップ酒

大阪市 町田 達子

絵本画家の個性に触れる原画展
じつくりと時間惜しまぬ小半日
野性味が覗く野ボタンの紫よ
花との対話少しやさしくなりました
昼下りの公園エレキ音ひびく

大阪市 鈴木 トヨ子

新緑の妖精山を踊らせる
長生きが出来そう若葉へ深呼吸
つばめさん無事に今年も来てくれた
鯉のぼり世相睨んで泳いでる
定年を待ってたように役が来る

大阪市 渡部 さと美

子どもニュースようく分かったそのとこ

盗られるものないが錠前取り換える

米を研ぐ言葉も消える無洗米

ビデオカメラそう向けでないで四人旅

日本庭園みごとな鯉の肥満体

大阪市 清水 利武

ビルの鯉雨に打たれて泣いている

神主の声高らかに海開き

日焼けした肌競いあう元気な子

遠赤の肌着無理して買っている

俄雨止んで向こうに虹の橋

箕面市 出口 セツ子

七十五日経たず薄れてくる記憶

顔色を読むから言葉出て来ない

何もないけれど愛だけある我が家

攻撃不能傷つく痛み知っている

傷ついているのに笑顔作っている

高槻市 左右田 泰雄

頂点を極めてからの風当り

独り者四角い部屋を丸く掃く

ストレスが眉間に皺を刻ませる

ほとぼりが冷めても揺れが止まらない

しきたりに倣って通夜の清め塩

高槻市 傍島 克治

壬生狂言炮烙割れて初夏の風

ワークシェアリングわが家も家事を分けましょう

万年最下位祈願の神社変えはった

早咲きに次々予定こわされる

ブライドを捨ててよかボロい話あり

高槻市 井上 照子

性格か役所の女性口開かず

喜寿だよと人に言われて胸ドキ

自治会の役受け薬ひとつ増え

パソコンに挑む指先逃げたがり

風呂上がり鏡がこわいドラム缶

豊中市 田中正坊

オランダは好い国 花とミュージアム

大小の風車が並び立つ運河(ザインセスカンス)

観光のポイント広場のチーズ市(アルクマール)

百花繚乱その語に尽きる花の園(キューケンオフ)

ランチクルーズ メルヘンの街巡る(アムステルダム)

豊中市 岸田 知香子

白内障明るさ期待手術待つ

鶯に青葉大和路五月晴れ

出払った街ひとつそりと連休日

スカタンに聞いて二度言うもどかしさ

ポケ封じ子に使われてつつがなし

豊中市 吉田 あずき

燕とび空にやすらぎひろがりぬ
塗り重ね初心の色を忘れ去り
お互いに歳だと許し合っている
ブランドのコピー重宝しています
カーネーション白赤揉めた日の遠し

豊中市 松岡 久留美

つくづくと来た道思う昨日今日
年ごろの心の迷いが案じられ
子供等の未来を信じ生きて居る
二番ホーム逢いたい人が立って居る
お早うと素直に言える家族の和

豊中市 江見 清

すかたんを言って言われて仲が良い
気付かないふりしてあげる二人連れ
売上げをメめてみんなで吐息つく
低金利預金はタダの貸金庫
あちこちで値段調べて元の店

豊中市 山門 幸夫

八〇〇号九〇〇号一瞬だった夢だった
カーネーション配るあの娘は花の顔
母の日におこわを作る母が居る
遠近の谷間を渡るホーホケキョ
目に青葉キョトンと据る雨蛙

豊中市 山門 タミ

春が来た老人だつて花に恋
思い出を飾り思い出たぐりよせ
居ねむりも老人憩いの一頁
亡母に詫び御礼言いたい逢いたいよ
大空に屋根と電線幾何模様

吹田市 瀬戸 まさよ

うまいねとわからぬままに書道展
懲りました孤独退屈山の宿
遠距離もめげず馴染みの医者通い
モノトーンスラックスにも不況風
長生きはうれしうとましこの矛盾

吹田市 穴吹 尚士

休んだら無くなりそうな僕の椅子
リストラの首を斬る役斬られる役
白黒をつけて上司に疎まれる
仲間入りしたい気もする青テント
ベテランも票読み切れぬ無党派層

吹田市 野下 之男

ペンギンはシルクハットを忘れてる
強かにこの年金で生きている
カラオケで寿命を少し延ばしてる
同じならチャイナドレスの土産買う(中国)
六十年まだ先生に覚えられ

吹田市 大谷 篤子

守口市 井上 桂作

楽しさを考えながら寝てしまふ
楽しさは充電気味の朝寝する
わが命これで終りか発作出る
運命の一部主治医に預けてる
すぐ涙流す人には勝てません

吹田市 山本 希久子

女が騒ぐと山だつて動きそう
コーヒーの苦さ新聞記事のせい
頼るべき介護保険の灯が小さい
昭和の歌しか知りません若い二人
私だけの浜へ寄る波かえす波

茨木市 藤井 正雄

新入りに見えぬ鬚髭一人いる
学割の気分が抜けぬ新入社
石段を孫と数えて暮参り
連勝が夜業の邪魔をして困る
入れ知恵かところどころで詰まる舌

茨木市 島元 ふみ

首一つ越す少年の長い脚
手塩にかけた娘も今は彼を追ひ
年下がばあちゃん諭すように言う
老いの手に負えぬ仕事が増えてくる
氣いつけてバイクの客を送り出す

改革と言つて辛抱してもらひ
賞味期限あつて無いのが雪印
豚ばかり命惜しくば御辛抱
公園は鳩の憩いの場所となり
また増えた先生方の安息日

交野市 山川 日出子

卓球を雨戸でしてゐる小僧さん
莓狩り竹の子掘りをサービスに
有線の茶つみの唄で村始動(徳島)
八十八ヶ所喜多郎鐘の音遍路(四国霊場録音)
五年ぶり幸運くるか燕の巣

交野市 森本 弘風

だまし絵に思わず触れる西梅田
税金は消費税だけ納めてる
あと一年歩めば六十路坂越える
旅プランなかなか妻が承知せぬ
憧れは俺がルールというわが家

大東市 児玉 蛙

生き方を変えれば道も見えてくる
頼られる幸せもいい胸を貸す
仮面脱ぎ肩のこらない風にのる
迂回しつつ現実に辿りつき
誤解とけはらはら花も散つていく

東大阪市 指宿 千枝子

得意回り高学歴のニューフェイス

うろちよろと女二人の北新地

ピアスしておっこちそうなズボンはき

盛り場の大道芸に拍手だけ

えびす橋指輪を買ってグッドバイ

東大阪市 安永 春

五月晴れおにぎりを背に生駒山

その穴場旅好きすぐにメモってる

朝掘りの竹の子買いに西山へ

四季たのし旬の味覚を生きがいに

未練など古着どつさり捨てましょう

東大阪市 谷口 義

銀行も郵便局も午後に行く

午後から来る人を朝から待っている

優しいだけでは女もつとまらず

セロリサクサク他人のままで終る人

早いもの勝ちやと葬式の帰り

寝屋川市 籠島 恵子

傷つけぬ程度に注意されている

終バスが遅くて家の子が遅い

片意地を張らずにすみました電話

百円シヨップいつかはきつと飽きられる

母の日だ自分のためにお赤飯

寝屋川市 富山 ルイ子

大それた望みはじけるシャボン玉

涙胸にあふれ大河になってくる

杖何時か体の一部となり久し

無理効かぬ体になってしまいう古稀

満ち足りた日々神仏に手を合わす

寝屋川市 高田 博泉

愛用の灰皿にして落ち着ける

マイカーの故障で通勤地獄知る

留守電を解くと決って妻の声

ブレイキのきかぬ夫と半世紀

コツコツと貯めてベイオフまだ無縁

寝屋川市 森 茜

ズームインした蟪蛄の目が濡れる

ワークシエアリングあと片づけは引き受ける

愛されていることを知るハムスター

離陸して運命共同体となる

溜息が集まるビーマンのすきま

寝屋川市 太田 とし子

お遍路の宿にドラマの影ほうし

独居老人息子は三軒先の路地

縁日に子供になった歳のかず

生きてるか仲よし電話の御挨拶

一〇〇〇号の祝賀の会は天国で

寝屋川市 坂上 高栄

八尾市 宮崎 シマ子

学問の深さを計る尺がない

息子を亡くすこんな大きな曲り角

台所みんなの元氣羅針盤

落ち椿形崩さぬ尊厳死

注ぎこぼす やつぱり解けぬわだかまり

寝屋川市 酒井 勇太朗

無駄使いティッシュをただでもろてから

初舞台衣裳が演技食っている

中国になめられ切つてから騒ぎ

老いの恋呼吸整え手を握る

親の店手伝う気なくフリーター

寝屋川市 江口 度

縄とびに軽さの匂う女の子

この辺できつと逢えると歩をゆるめ

引つ越しの荷を取り囲む噂の輪

セーターの乳房五月へはずみだす

バスを待つ味方ばかりの顔をして

寝屋川市 堀江 光子

楽しさは欲減つて知る日日の味

楽しさはいつか読む日の本を積み

楽しさは灯下に見入る名画集

色彩の溢れる街に色が無い

一つ橋渡り終つた風に立つ

見舞客を心待ちしているベッド

眉の濃い男で顔にある力

無料見学どこでも覗く好奇心

脱サラにふるさとがあり麦を踏む

スイトピーコップに挿すと様になる

八尾市 高橋 夕花

赤ワインに負けてしまった女の性

姉上の威厳がとけた健忘性

冬の絵にかくれています愛ひとつ

意地悪な女が爪を切っている

草もえて私も炎える春煩惱

八尾市 高杉 千歩

あれもこれも思いやりだと掌を合わす

十指みな使うパソコンに馴れる

ピントはずれの季語よ地球温暖化

補聴器も眼鏡も予備がいる余生

退職金公開たんともろてはる

八尾市 宮西 弥生

鯉のぼりと干し物高い方がよい

不器用がけんめいしゃべるほんまもん

なりゆきにまかすなるよになつてくる

腕ききをたたき起しに來た復帰

あきらめたらあかんこの世は風と舞う

八尾市 神原 まさと

のろいので休まず歩く癖がつき
人間に囲まれ牡丹疲れだす
妥協ぐせついで若さが消えてゆく
安楽死見て見ぬ振りをする閻魔
種明かしされても真似の出来ぬ指

八尾市 吉村 一風

迷いいろいろガラスびかびか光らせる
嫁と孫歌はずんでる風呂の月
言い訳はするなよ男軽うなる
豊かさに溺れてるひよつとして僕
話ぐだけて楽しい酒のまだ続き

八尾市 長谷川 春蘭

からつばの脳裡を叩く春疾風
草萌えて鼻よく動く散歩犬
鯉のぼり揚げ父として顔しまる
ほろにがき老いの好みの落の臺
倅せは身近にありて牡丹の芽

八尾市 村上 ミツ子

九〇〇号となりとうさんがいない
おみやげのしじみに六道湖がみえる
善人の願いはいつも後回し
気の利いた嘘に思わず拍手する
喪が明けて亡夫わたしのものになる

枚方市 寺川 弘一

もう写真など写したくない誕生日
お袋の涙見た日は肩が凝る
自分史まとめりや大きすぎるフロツピー
自ら司会やつておきたい生前葬
本当の内緒は墓の中にある

枚方市 森 本 節 子

リハビリの窓より見える六甲山系(転院)
歩くこと唯一つの取柄だったのに
女医さんのピアノで童謡揃わない
タレントになれそな保夫に看護され
八十路越え思わぬ坂が待っていた

枚方市 安達 忠 央

新人にちらり個性がみずみずし
麻酔から醒めて思わず手をあわせ
待たされて秒針の音ひびきすぎ
一言で十年の不和嫁姑
赤い薔薇緑の棘を隠し持つ

藤井寺市 中島 志 洋

汗かいて掴んだ運は離さない
毒舌家嘘のつけない人らしい
責任の重さ感じている無口
気の抜けたビールのようなお人柄
水中花 花になりたいこの暑さ

藤井寺市 楠 昭子

美人ですわたし長生きしています
足腰をきたえないかと誘われる
いたずらな天使で恋の邪魔をする
三枚目人を笑わす芸がある
八方美人敵も味方もたんとする

羽曳野市 三好 専平

草餅を拜んで食べるおばあちゃん
鯉のぼり川の向こうと手をつなぎ
愛なんてことばひとつで消えてゆき
だんだんと口を封じて首を締め
憲法を守らぬ人が威張り出し

羽曳野市 川口 信子

虫でさえ好みの花を嗅ぎ分ける
声掛けた方もおどろく人違い
歳隠す帽子も買った春よ来い
ゴミ出しの背広同士が目をそらす
言って悔い言わずに悔いる腹の虫

羽曳野市 安芸田 泰子

もう誰も振り向きもせず牡丹散る
万緑のところどころの遅桜
元気です十年日記八年目
姑は優しい声で釘をさす
真っ直ぐな道しか書かぬ若い地図

河内長野市 水谷 正子

有難や福祉弁当雨の日に
雲掴むような話を孫とする
ありがとう言わせてくれる茜雲
黄砂降る特大マスク街を行く
横綱がまたドタキャンをしやはった

河内長野市 加島 由一

コーヒーの氷頬張り出る喫茶
こんなときピアノが弾けたらと思う
庭に水やるとハーブが匂いたつ
突然の客にビールとウエハース
ロボットになら介護されてもいいよ

河内長野市 井上 喜醉

達者な足精一杯に生きている
もう先は花も嵐もありません
梅雨本番どんどん伸びる夏野菜
料理屋でトップレディーが冷やつこ
年金の出る日は床屋へ行くらしい

河内長野市 植村 喜代

花筏ゆらりゆらりと春が行く
もう写真はだめと言いつつ孫と撮る
田舎道近道すれば余所の門
待っていたドラマに一瞬の睡魔
五年目の不満ちらちら娘の電話

富田林市 大橋鐘造

淋しさを忘れるために夢を見る

諦めも期待もしない我が余生

ペイオフで困った振りをしています

ごめんねも言わず心を盗む人

回診の時だけ痛くなる患者

松原市 小池しげお

間違うて切った枝から出た新芽

千手観音わたしも欲しいものばかり

いつ来ても三 四分は待たす家

河内弁下手な商売やっている

ひよこにも背の高いのと低いのと

岸和田市 高須賀金太

寂しさはシャッター開かぬ商店街

開発へざわざわと鳴る竹林

裕次郎現れそうな港町

ブルースを歌いたくなる港町

砂吐いて諫早の貝ひとり言

岸和田市 井伊東吉

祖父祖母が相手にされぬ子供の日

渦を巻く土建国家の黒い金

逮捕する芋づる先は秘書ばかり

リストラの風は議員を避けて吹く

サッカーの人氣 負けるなタイガース

岸和田市 原 苑子

未来絵図書いても少し居るつもり

一滴も飲めず付き合う話ずき

お豆腐を二丁買つてく歯痛もち

ウォーキング追ひ越されてもマイペース

おかえりのやさしい声が慰める

岸和田市 岩佐ダン吉

ブライドを時に虫干ししてやろう

大臣がだんだん僕に近くなる

百万の背広肩こりないですか

きな臭い話熱弁する総理

雑踏を泳ぐ私の無表情

岸和田市 長谷川 呂 万

瀬戸内の船旅島を縫いながら

応援の勢いが押すホームラン

慰めはいらぬこの次頑張るぞ

付き合ってから知りました悪い癖

勢いに乗って挙げた手悔い残る

岸和田市 原 さよ子

付き合ひの見栄と背伸びに泣かされる

おべんちゃら言わぬ仲間とウマが合う

仕事帰り屋台覗けば同じ顔

大工さんほこりはたいて三時の茶

ばあちゃんはついていけない使い捨て

泉佐野市 山本 蛙城

おにぎりには回らぬすしは回るけど
食べる物ないわ表示を疑えば
どれがどれ花屋にカタカナ語が溢れ
濃い淡い味成程ね武家と公家
タッパ―が食器代わりという気楽

和泉市 岡井 やすお

お茶汲み卒そろそろ得意先回り
なかなか即席料理帰省の子
浪人に夏休みなし汗の日々
新記録出では破られゆくプール
メルヘンの世界を消してゆく科学

堺市 齋藤 さくら

手を合わすだけで休まる墓参り
紫陽花に蛙も昼寝しています
お隣の犬が朝刊知らせます
ささやかに生きる幸せ判りかけ
外務省またかと不信消え去らぬ

堺市 矢倉 五月

還暦でまた人生に恋をする
自家野菜見端のいいのは嫁に出し
土曜日は多目に冷やす缶ビール
主治医から酒の飲み方処方され
吊橋をさつさと渡り拗ねられる

堺市 神原 文

着くずれを少うし見せて初対面
世の矛盾こんなとこまで黄砂降る
悔恨は忘れなさいと青若葉
いのち燦燦ブラジャーひとつ買いに行く
パソコンにもてあそばれている夜更け

堺市 西村 りつえ

大連休ロボット錆びて人恋し
叱るのもおだても下手な父の背な
勿体ないそんな言葉を踏んでゆく
齒科嫌いやつと行く気の痛み止め
乗せられて梓はみ出した二日酔い

堺市 志田 千代

新人のころの話をしてくれる
見ず知らずの人になら声かけられる
もう一押しされたらハイと言ったのに
酒飲みでない茶飲み友達求む
新聞を全部読む人手をあげて

堺市 源田 八千代

目に青葉アロマセラピー深呼吸
リュックにはおもちゃいっぱい詰めて来る
子どもらの出すシグナルを見逃さず
目分量でも確かです母の味
ささやかな暮らしの頃の家族の和

堺市宮本かりん

漫画本に囲まれている受験生

わたしにもあった若さを妬んでいる

ルール違反のゴミが恥ずかしそうにいる

よこしまな思考どんどん膨れ出す

押し殺した声でなんでもない話

西宮市門谷たず子

夕映えや身のほどに盛る白いめし

不器用な夫婦が障子張っている

鳩尾が痛む夫の再検査

れんげ野に昔ばなしが落ちていた

フィクションの恋に溺れていた昨日

西宮市緒方美津子

春の雨庭をどんどん狭くする

旅疲れゆつくりほぐす豆御飯

親の夢盛った子だけは遠い国

父の日のお花屋さんは定休日

新任を手こずらせてる飼育室

西宮市秋元てる

七十年の刻遡り語り合う

付添えのない買物と嬉しがり

介護不要傘寿不遜の啖阿切る

執り成しは決してしない個人主義

コンビニのお握り母のは丸かった

西宮市坪井孝一

あの易者運命線は正解だ

嫁もらうおやじおかんもついて来る

知らなんだすつぴんの顔だまし討ち

肝臓からイエローカード来て困る

アレنجジのピアノぼくまでお喋りに

西宮市亀岡哲子

つまみ食いニコツと姑と打ちとける

巣立つ子へ里の香りの笹だんご

逆あがりまだスカートは気にせぬ子

沈む陽を見るところで手を合やす

携帯を持たねば崩れゆく絆

西宮市山本義子

よごれ役もこなし女は一丁前

茶を出して義理の保険を断りぬ

ときたまの正装ほんま身がもたず

夢かしら深夜ラジオで裕次郎

恋も欲も無けりや余生楽しめぬ

西宮市井上松煙

新人にしては敬語を知っている

鼻水にティッシュをそつと貰う仲

来客があるときれいになる我が家

手入れた私のために蘭は咲き

昔いた会社の記事は目にとまる

西宮市 牧 渕 富喜子

ほどほどが出来るかどうか雨の午後

図書館で塔誌を見たとき友の声

お静かにただ今雀お食事ちゅう

さり気なく役目を終えてかすみぐさ

一日の終りをごみと締めくくる

尼崎市 春 城 年 代

葬祭のセールス電話おことわり

リハビリの技師は気さくな大阪弁

ごみ分類夫のほうに精しくて

退院してお客のように畏まる

負けいくさ心の平和とり戻す

尼崎市 春 城 武庫坊

幅広く海を見たくて山へ行く

過疎の村星は綺麗にさんざめく

健康一番少し痩せても太っても

枕二つ我が家は今日も無事だった

母の日のバス カーネーションと乗り合やす

尼崎市 的 場 十四郎

改革も疑惑の風に阻まれる

正論は我が党なりと問うコラム

毒舌も笑いも入れて輪に入る

終章はキットお前の手をつかむ

月おぼろ月下美人に酔う美白

尼崎市 内 田 美也子

夫婦喧嘩ついつい嫁の肩をもち

生き方の不器用これも亡母譲り

大切な一日だから無理もする

無理すれば翌日答出す体

灯を消して今日一日を振り返り

尼崎市 長 浜 澄 子

分別が時折狂う風見鶏

性格が似てゐるのだらう火と油

財産の一つと言える友である

登り坂ひよんな所で蹴蹴く

芍薬が善女のような顔で咲く

三田市 北 野 哲 男

おいお茶どうぞと出て来たのは小銭

連休は夢芝居にとごろ寝する

派手を着て中身の変る訳でなし

大事より小事故になる苦労性

ブロンドにならず茶髪という程度

川西市 松 本 ただし

法律に抜け道のある但し書き

巻き添えに入らぬ補聴器OFFにする

八十の坂は益々斜めなり

しゃっくりが止まり突つ掛け履いて出る

連休に少し花やぐ峠茶屋

川西市 米原雪子

ウォーキングおしやれ楽しむ人もいる

花咲けば管理ひとしお身が入り

ショッピングずばりストレス切つて来る

ちくはぐで会えない友にやつと会え

魔法瓶ペットボトルに負けあくび

伊丹市 小熊江美

草花が自由に伸びる春の風

若者の気分で歩く繁華街

バスの中ふと気にかかるガスの栓

反抗期扉の奥がのぞけない

初曾孫元気で育て鯉のぼり

伊丹市 山崎君子

花も相性今年も咲かぬマリゴールド

小雨降るケキヨケキヨしきり彼を呼ぶ

あじさい忌忘れられない彩がある

終ったよ視線あつまる優しさよ(白内障手術)

母の日は片目で受けるプレゼント

芦屋市 黒田能子

それぞれの持ち場で力発揮する

真っ白な体操服の一年生

ゆっくりと動く歩道を歩いてる

向う岸見えないままの橋渡る

新人の失敗にあの日のわたし

神戸市 池田善守

ルビー婚懐悔ざんげの日々つづく

人生トホホ笑えば開く明るいました

万歩計今日はどこどこ行つたやら

謄本を取るたび出合う亡父の文字

指名手配みんな普通の顔してる

相生市 中塚礎石

誕生日忘れないでと大家族

一歩ずつ老化が進む病み知らず

野仏が花一輪に目を開ける

病人になりきり夫あまえてる

責任を押しつけられて寿命燃え

姫路市 古川奮水

たたかれて山椒季節の味立てる

山菜をたつぷり盛った旅の宿

マーカー散歩がわりの老夫婦

片減りの草履左右を替えてみる

水虫にパンチやりたい靴の底

奈良市 米田恭昌

フルムーンの真似ごとのよう小さい旅(旅4句)

内子町昔を偲ぶ町模様

スニーカー履いて遍路のバスツアー

桂浜竜馬が睨む永田町

旧姓を呼ばれてまわる走馬灯

奈良市 天 正 千 梢

奈良太郎夜のとばりに語りかけ (東大寺の釣鐘)

札の束この指たかれと書いてあり

強い風摩周湖の霧もてあそぶ

人生の問答しつつ一人旅

のみすぎをとめてくれない寂しさよ

奈良県 渡 辺 富 子

大木へ藤の紫よじ登り

海鳴りへ別れの予感するふたり

しのび逢い火の粉を浴びる古都の旅

しなやかに恋の掟を破ります

丸腰でけじめをつけにいく男

橿原市 居 谷 真理子

イカナゴも炊けなくなったのね母さん

素颜より素直になれる薄化粧

じわじわと体温上げる褒め言葉

一日の恥を忘れるため眠る

万緑がビールを飲めと騒ぐから

大和郡山市 坊 農 柳 弘

古の美観キトラの朱雀絵図

星まつりペンフレンドの誘いくる

鴨川の流れに映える床遊び

梅雨入りに梅酒の仕込み急ぐ母

ダブルベッド夫婦で別の夢を見る

和歌山市 木 本 朱 夏

野茨で庇うわたしのテリトリー

菌刷子が一本欠けて梅雨の冷え

足して引いてわたしの梓は譲らない

紫陽花のその日その日の主義主張

まだともうプラス志向の風を読む

和歌山市 古 久 保 和 子

魚拓の目人間なんと恐ろしい

一家言があるうどん屋の勝手口

見習いのカミソリ顔の真上から

若者の活気で電車よく揺れる

少年のするりと魚に似たこなし

和歌山市 楠 見 章 子

アベックがびたり絵になる港町

ガラス張り部屋も私も真つ赤つか

こだわりの庭で戴くハーブティー

ご飯粒きれいに食べている美人

お仏飯冷めて茶漬けに丁度いい

和歌山市 福 井 桂 香

朝顔を間引く白い根の痛み

ダイエット一膳めしと言うなかれ

コンビニは僕の母さんかもしれぬ

揺さぶりをかけると浮いてくる悪事

けなげにも父を論している瞳

和歌山市 榎原 公子

豆を剥く梅雨のはしりという予報
五月晴れ畑の野菜はトレンディー
ソロバンを捨てた夫婦の農作業
晴れる日も降りも味方にして農婦
白い壁内緒話を撥ね返す

和歌山市 山口 三千子

米糠に竹の子灰汁を抜き取られ
散歩する時を知らせる犬時計
家のリフォーム勝手に決めて業者来る
価値観の違い亀裂を深くする
憎しみに変らぬ内に絆断つ

和歌山市 桜井 千秀

吉本のコントに生きている私
喋りたい噂が溜り偏頭痛
針千本やつと時効になりました
エリート of 脆さよ靴の光りすぎ
花好きに管理されてるうちの庭

和歌山市 吉村 さち子

真田庵へ集う善女の趣味仲間
庵主さまの法話で溶けて来た凝り
形見着た息子夫に生き写し
食い意地があるうち元氣保つてる
在宅介護連休なんて夢のゆめ

和歌山市 山根 めぐみ

老いてまだときに縛れる紅の糸
娘が二人従いて姑の吹くラッパ
胃袋に一寸年輪聞いてみる
言うことを聞かぬ手足の反抗期
里帰り脳の酸素を入れかえに

和歌山市 牛尾 緑良

小指から秘密が漏れていたらしい
朽ちること知った命が重くなる
ビー玉やメンコ教える孫は未だ
狂うから時間 狂わないから明日
生活の音を絶やさぬ老母の部屋

和歌山市 松原 寿子

足音が胸の階段駆けてくる
緑風が障子の破れ抜けてくる
抱き寄せた静止画像を解き放つ
行間へ想い降らせて包み込む
休日の充電だろう長電話

和歌山市 西山 幸

せせこましいことは嫌いな鯉のぼり
ところてん序列ばかりを競い合う
広告を見ているだけの貧しい日
仮面いろいろ休日の人波
パズルみな解けて月下美人咲く

和歌山市 青枝鉄治

鳥取市 徳田ひろこ

無住寺に遠い童話の庭がある

古寺からもジャズが流れる世の移り

切り札があるから吹かすタバコの輪

一ランク下げよと神も思う絵馬

風を読むことに長けてる回り椅子

和歌山県 中後清史

スクラムを組んで友情確かめる

杭を打ち込んで流れを変えてみる

一通の手紙が変えた羅針盤

八起き目に十の力を振り絞る

阿波踊り覚えてからの処世術

海南省 谷口義男

余りにも的射たジョーク不快感

背を向けた相手深追いなど出来ぬ

孫達の何故に答える事出来ぬ

年金を小出しに生きる老いの日々

好き嫌い知ってくれてる愛の膳

鳥取市 武田帆雀

草の種ポロポロ落ちる畠打ち

敵になり客になりして同業者

晴天は遊ぶ雨なら筆を持つ

嘘つきが憎めぬ白い肌の女

一列に竹の子伸びる他人の地

ピカピカの愛車で風雨斬ってゆく

日に追われ死ぬこと想うこともなし

海開き人魚に戻る日が巡り

ズバズバ言えるほんとうに偉い人

人間ドックあちこちへドロ溜ってた

鳥取市 西村黙光

喧嘩する度に度胸がでかくなる

喧嘩して破れ太鼓を打ち鳴らす

貧しくも売られりや喧嘩買って出る

名が売れりや喧嘩も飯の種になる

喧嘩する相手だんだん減って来た

鳥取市 岩原喬水

弥陀の慈悲生死の境救われた

女々しいぞ他に女は万と居る

金見ると可愛い声の妻になる

天才の遺伝子俺の家にない

敗戦を闇のルートで生きて来た

鳥取市 福田登美

新緑の風が走らすランドセル

生きている幸せお茶をゆつくりと

きりん獅子 子等の怖がる金の口

お手玉を縫って子供に氣にいられ

老いながら心に花の種を蒔く

鳥取市 岸 本 宏 章

一〇〇〇号へ更なる意欲湧いてくる

あんぱんの丸は癒しの丸だろう

目くばせが届く範囲に夫を置く

煙幕を張るから余計きな臭い

神さまへ出す礼状が多くなる

鳥取市 岸 本 孝 子

見えずいた嘘でも許す太っ腹

丸い背身の上話したくなる

齒に衣着せぬ生き方それもよし

ひと休みすればいい知恵湧いてくる

一〇〇〇号を夢みて生きる欲が出た

鳥取市 山 本 益 子

欲望を持たぬ人生暗やみだ

四月馬鹿大きな夢を食べました

体重計軽いわたしにはっぴかけ

現世には油断あやつる鬼が棲む

退職で今日振り出しの道に立つ

鳥取市 植 田 一 京

祭り笛猫も浮き足立ってくる

軽い嘘入れて楽しい話する

古い歌うたって帰るいい月夜

黄昏れて夢は小さな方にする

幸不幸きつと五分五分なんだろう

鳥取市 美 田 旋 風

引き算をしながら上がる喜寿の坂

いい季節ミニの茶髪が風を切る

丸い石だけでは流れ変えられぬ

二次会も割り勘下戸を連れて行く

古時計に一本とられ遅刻する

鳥取市 富 山 檳榔樹

森の精乙女心をノックする

感動のリズムが冴えるピアノソロ

座禪草 玉露抱いて独り言

煩惱をなぜか捨てられぬ娑婆の風

新緑が目染みる山抱いてみな

鳥取市 春 木 圭 一郎

毎日が日曜今が最高だ

毎日の張りへ目標高く持つ

毎日を歩く自分のためだけに

毎日は自分を探す旅なのか

毎日の終わり日記に嘘を書く

鳥取市 中 村 金 祥

初孫へ庭いっぱいの鯉揚げ

散り際にせめて実のなる樹を植える

調教がいいとダメ虎でも吠える

変身しても心は空っぽだ

穴はここに落ちて生き方考える

鳥取市 杉 本 孝 男

鳥取県 西 川 和 子

スベアキー持つ二人にも隙間風
愛という柵めぐらせて恋実る
咲き急ぐ梅に粉雪来て諫め
荒海を泳いだ味のある白髪
ポケットに磨いて欲しい石がある

鳥取県 下 田 茂 登 子

ライバルに負けまいとして深い傷
川柳のおかげで息を吹き返す
財布には診察券がたとある
八十路きて夫婦の仲を裂く施設
女々しいが捨ててはならぬ夫という

鳥取県 西 原 艶 子

ない袖を振らそうとするコマール
誘いたいけれど恋人いるらしい
カラオケになると活躍したくなる
もめるたびだんだん強くなるころ
黒枠に納まる亡夫と語り合う

鳥取県 太 田 幸 枝

子育ては夢一杯の忙しさ
忙しいは口ばかりで昼寝する
取れかけたボタンを括り直す恋
多忙でも三度の飯はしっかりと
日本海で沐浴をした浜育ち

白無垢を着る沐浴を念入りに
三三九度紙いち枚に括られる
お昼寝も忙しい日の時間割
スケジュール通りに体動かない
顔見せるだけでよろこぶ母がいる

鳥取県 権 代 康 女

からやかに大工釘うつ音がする
澄み渡る山の空気をぞんぶんに
猫なでの仮面をつけて爪をとぐ
計算の後で気付いた原簿ミス
種まいてしとしと雨を待っている

鳥取県 山 本 正 光

納屋の戸を開けてつばめの愛をまつ
目の当たり彩百態の花回廊
初夏の風入れぬと床がきしみそう
ばあちゃんの匂いが沁みるお針箱
まつり酒吞まぬと神に逃げられる

鳥取県 小 谷 はるみ

半襟を変えて会いたい人がいる
地固めの酒が多くて崩れだす
変身したら子供に背かれる
スローだがこの温もりを信じよう
一枚の紙に未来を賭けてみる

鳥取県 原 みさを

パソコンの窓に明日の風がある
孫二十歳のちがりレーされてゆく
注射針コワイまんまの古稀である
海はもう凧いでいるのに有事故
アルカイダの話にカビが生えている

鳥取県 石谷 美恵子

中毒をしそうな男性^{ひと}にある魅力
元氣かと癌の友から労わられ
コーヒーをおごられ悩み聞かされる
あの人もこの人も好きまだ独り
出世魚 清流なんか棲めません

鳥取県 羽津川 公乃

雑草を引く足腰の悲鳴聞く
苗札も草に埋もれて梅雨最中
達筆な友は手紙の趣味らしい
中毒でしょうか五杯目のコーヒー
蟹スルメ葱も缺で用が足り

鳥取県 近藤 春恵

さわやかな初夏ですデートしたくなる
初夏の風吹いてみの虫目をさます
入社した背広が初夏の風を斬る
非行の子広い心で母が待つ
ときどきは呆けたふりして丸く住む

鳥取県 黒田 くに子

道徳もそのけ政治おそろしい
抜け道を通らぬ父は筋通す
しきたりを無視我が道をゆく若さ
保証印転落の道とも知らず
一行でも老母が喜ぶ便り出す

鳥取県 石尾 かつ乃

田や畠見舞う主治医の顔をして
髪染めた孫はほんとはいいい息子
さりげなく聞いた話が胃にたまる
待っている家族があつて買うみやげ
ピンはけの写真またよしありがとう

鳥取県 津村 八重子

神仏に今日も感謝の九十歳
遠い耳ばかりよりそう病むベッド
あたたかい言葉たやさぬナースさん
川柳塔よめば十歳若返る
まごつくもあたり前かと笑い合う

鳥取県 永井 美津子

欠点は美人に会うとはしゃぐ舌
麻酔覚め嬉し泣きする子等に詫び
どこでもない自分の胸に神は住む
夢乗せた船がどんどん遠くなる
ピピピッと私惚れさすひとを待つ

鳥取県 奥谷 彩子

新緑に心をあらう目を洗う

飾り言葉なにも盛らない夫婦茶碗

痛い鞭愛されている証かも

みにくい炎燃やし続けている野心

やんわりと辛口ジョーク吐くピエロ

鳥取県 乾 喜与志

腰おろし吟詠してる散歩道

紫雲英田よ汗だくだくに刈った日も

ふり返る米寿に杖は邪魔だった

兎にも角にも百歳になることか

百という数が年々好きになる

鳥取県 土橋 睦子

着地する丘は綺麗な花の上

歩道橋渡れば待っている火種

手枕でテレビ見ている楽隠居

使い捨てのカメラにきつと裁かれる

鯉織谷を渡して過疎泳ぐ

鳥取県 田村 きみ子

軽い飢えだろわかビール欲しくなる

愛される器でいたいこれから

茄子トマト育てています子のように

後頭部が痛いあのこと謝ろう

ない袖は振れぬが元氣差し上げる

鳥取県 小谷 孝美

大臣の器が秘書に壊される

変身を見届けているコンパクト

色っぽい寡婦忍の字をしょっている

おっとりとし生きる百までまだ遠い

アクセルを踏むと血圧上がりだす

鳥取県 上田 俊路

若返るためにも車買ひ替える

老いて学ぶ熱意に負けたボランティア

最高齢九十七の川柳会

句を作る眼は歳よりも若々し

疑惑議員雨後の筍より凄

倉吉市 最上 和枝

たちの芽に負けぬ男の灰汁強さ

平和の世どこか疑問符立ちのぼる

終バスの居眠り殺意抱いている

六腑にしみ渡るお抹茶のほろ苦さ

さりげなく許して終わる終い風呂

倉吉市 淡路 ゆり子

母の日に電話もくれぬ娘を案じ

自由になれた夫の首輪が落ちている

賢いと言われて見たい死ぬまでに

三代の昔を語る武者職

毛筆にこころの奥を映し見る

倉吉市 山中康子

ハイカラな麦わら帽子夏に映え
階段で足の重さに笑いこけ

ひとり居の鍵が迷い子になつてゐる

薬草の根つ子は永久に残したい

据え膳に嫁の温もり盛つてある

倉吉市 牧野芳光

臆病な愛を小出しにして話す
修業のように釣り竿握つてゐる

ポツテリと牡丹に雨は容赦なく

斬られてもいいかも皐月鎌の月

星ひとつ落ちて寂しくなる夜空

倉吉市 野口節子

能書きを信じ女の泥バック

鏡かけ母の小袖が生きてゐる

散つて行く花の心よ有難う

冗談では済まぬ患者の取り違え

不謹慎月を跨いだ露天風呂

倉吉市 米田幸子

腕の立つ職人だった父も近く

茶の間から未来を担う樹が育つ

辞書一つ持つて浄土の旅仕度

ばあちゃんは鉄の心臓持つておる

心臓に毛生えぐすりを塗つておく

倉吉市 猪川由美子

まあいいかお洒落なまけて癖になり
年上女房子よりも夫育てです

愛よりも欲と打算で結ばれる

仏頂面で駄ジャレ言うから面白い

モーツアルト聴かせて新酒旨くする

米子市 神庭詩郎

あの女性総合職で課長補佐
漁火が蜃気楼に似た街に見え

辞表書くこれが最後の切り取り線

折込みが本紙を越えた量で来る

リストラで無く左遷地へ赴任する

米子市 野坂なみ

襲名へこつこつと彫る芸の面(三代目松緑)

仁王さんの喝が欲しくて逢いにゆく

葉桜にお札の手入れしています

空港はとことん鳥を嫌いぬく

箱に入ると人の心が透けて見え

米子市 門脇晶子

心に残しておこう古い地図

野に寝ころぶと天が私を抱きこんだ

雲海に目かくしされたお日さまだ

退職しても人事異動を気にしてる

外国産の果物少し喋りすぎ

米子市 木村 春枝

静けさが互いの距離を知っている

古里の墓はたよりを待ちわびる

幸せは旬の果物口にして

葬の日の果物籠が派手過ぎる

長男の自覚が家の束ねする

米子市 鷺見 正子

まだ白い卒塔婆に肩を叩かれる

他人さまの方がやさしい事を言う

赤ちゃんが笑うと苦虫も笑う

三つ目の角を曲るとホツとする

怪我をした場所には二度と近付かぬ

米子市 青戸 田鶴

変化球打ってみんなを驚かす

検査づけされて原因つきとめる

無罪放免先生にただ感謝のみ

万緑の中でほんやり物忘れ

ふるさとのやさしさ知った梨の花

米子市 本吉 宗光

元帥になるおつもりか首相さん

亡妻に似た姿しばらく街の角

亡妻よ待て十三回忌秋にする

夏日とや老躯の明日を早めるか

手相ではあと十年は持つ命

米子市 白根 ふみ

藤の花腰を落してみるがよい

藤のこと藤職人はひたむきに

来年の花をぐずぐずしておれぬ

冷蔵庫旬の香りを食べつくす

わらび狩り隣は苗を植えている

米子市 澤田 千春

今日のこと仏と話す宿がある

蝶になるそのプロセスは語らない

葉の裏にそつとかくれた謎一つ

今日生きる力を新緑にもらう

九死に一生それから数珠をはなさない

米子市 政岡 日枝子

アンテナが大きな顔で立っている

よく動く尻尾ジャングルジムの子等

塩で身を清め大きな答だす

笑わせてやろうと弟も誘う

立ち直ってくれそう歌を唄っている

米子市 木村 富美子

声だけで確かめ合っている遠さ

東京に六十五年ぶりに立つ

あなたへの話が溢れ手紙かく

仲間には肩のこらない手紙出す

一生をやっぱり神に裁かれる

出雲市 吉岡 きみえ

平熱でずうつと生きて来たわたし
ゆつくりと仮面を外す灯の下で
ときどきは仮面修正しています
灰汁ぬいた女ぐらぐらめまいする
一匹の虫にも仏ごろもつ

出雲市 竹治 ちかし

天才でなくて長生きしています
思うことあつて身辺整理する
波がしら海の匂いを撒き散らす
束の間の人生太陽系の星
アンテナを降ろして読書しています

出雲市 久谷 まこと

七坂に息を切らして挑んでる
残り火を絶やさぬように煽りたて
切り札は迂闊に出せぬ疎まれる
青田風家並み抜けると生ぬるい
湯加減に今日のストレス溶かしてる

出雲市 園山 多賀子

九〇〇号寿ぐ体調整える
充電し卒寿婆さん旅靴

前向きに忘れたい過去引き摺らぬ
葉桜のみどり私の鬱融ける

玉子とじ まとめ上手な嫁の味

出雲市 小白金 房子

紫陽花の素直さ心を丸くする
弁解をしても心に残る棘
お遍路の白衣吸いこむみどり風
捨てられず亡母の手鏡合わせ見る
自転車に頼る農婦の朝まいり

出雲市 伊藤 玲子

再加熱歳相応のやわらかさ
葉脈に蝶と遊んだ跡がある
傷ついた鳥を隠した夜の帷^{しほり}
悲しみの滴る服を干している
地球がまわる迷う私を乗せたまま

出雲市 岸 桂子

逆らわず私流で押し通す
あの事が根雪となつて解けぬまま
そこはかと自己主張する沈丁花
飽食の罪に気づいた爪楊枝
今日終る灯の下の紐を引く

出雲市 富田 蘭水

自費出版すがすがしい本のおい
ほどほどの欲を生かして膳祝う
私に来る幸せがみつからぬ
新緑に負けてなるかと赤を着る
美術館出ても余韻のぬくさもらい

出雲市 佐藤 治代

まだ恋に巡り会えそう橋渡る
憎いとは思わぬ蜘蛛の巣を払う
仕合せを押し頂いて生きている
折れたのが左で良かった字が書ける
介護してくれる夫に惚れ直す

出雲市 石倉 美佐子

風のまま吹かれていった糸蜻蛉
雨の日は真つ赤な薔薇の中に居る
紫陽花に想うことあり永い雨
約束をしたのに花はまだ咲かぬ
棕櫚の花人の心は計れない

出雲市 小玉 満江

百までを生きるつもりの針と糸
納戸から一度も出ない蛇の目傘
もつと良い呼び名はないか高齢者
欠席の人の話で盛り上る
鳥が来て食べてしまったさくらんぼ

出雲市 城 多喜

三十年一人細いで来た月日
距離置いた大人のあなた好きになる
手紙から等身大の声がする
影法師ヤッパお前も意気地なし
スパイスの効いた小言を聞いている

出雲市 岡 あきら

出し惜しみ得意の曲を攫われる
一曲が口火昭和へ誘われる
まん中で男裸にさせられる
監督のミスを救ってくれた犠打
向き合えば目と目で話できる人

松江市 川 本 畔

さい果ての町で拾った荷が重い
大ヨシキリの巣があるらしい脳の裏
切り出せぬ残り時間の恐い顔
やり直す種が次第に赤くなる
逢いたくて覆いかぶさる緑かな

松江市 津川 紫晃

保護色に慣れて森から出られない
青虫に食われて伸びる菜の心
矢印の通りに生きた夫婦箸
凍魚の目生まれた海を離さない
切株が二つふたりの空がある

松江市 小川 注湖

堀川の隠れた石に聞く涙
見栄張って服一揃い同窓会
無人駅切符取る音耳の底
点滴の減るを見ている人生譜
故郷は松江城から説きはじめ

島根県 伊藤 寿美

葉ざくらや冬から春になった窓（入院五ヶ月）

退院してまた医学書を読んでいる

五月晴れ私の冬を干している

残してはおけない人と住んでいる

青汁の苦さは妻の愛だろう

島根県 榊原 秀子

新緑がまぶしく映える雨上り

娘の家は子のやり方があるくらし

捨てていいものが大事にある戸棚

鯉のぼり若葉を食べたそんな顔

口のうまい人にはいつも負けている

島根県 多々納 テル子

価値観が同じで話盛り上げる

ブランドもふだん着にする衣更え

余生なお光らぬ玉を磨いてる

欲張った皿にとまどうバイキング

おみくじの花が咲いてるご神木

島根県 森 茂美

春の波テトラボットになだめられ

無人駅汽車の窓にも降る桜

上流へ行けばきれいな川になる

妻は留守ちよっと侘しい部屋明り

見る人の心とします島牡丹

岡山市 井上 柳五郎

遺産などいらん娘に先越され

また惚けた愉しい春のど真ん中

ああいやだ待つてる春に花粉症

否定した不祥事なのにはや謝罪

本当のことを言われて腹を立て

岡山県 山本 玉恵

笑わねば泣かねばきれいな絵にならぬ

ウオーキング一寸ときめく人と逢う

精一杯咲いて散る日は風まかせ

無欲では生きては行けぬかたつむり

虚と実のはざま潜って来た命

岡山県 富坂 志重

ジャンケンでは私が先に逝く番だった

泣いて笑って大分欠けた私の命

人情の海を流れて来た手足

珍客の豊富な話題膳に盛り

くずかごがあふれる私の独り言

岡山県 矢内 寿恵子

咲いて散る花の美学を見るサクラ

アフガンの子の目悲しくする戦火

生きる身の哀楽膝をだきながら

亡き影を追って探して闇抜けず

百態のドラマ浮いたり沈んだり

岡山県 小林 妻子

残り火のように見せてるのも手練

牛乳とパン水加減などいらぬ

変装で妻を欺くのは無理だ、

記憶にはないほど悪事よく忘れ

鶯の求愛を聞き山の昼

竹原市 小島 蘭 幸

充実の書棚となりぬ師の二冊

結婚記念日なんにもなくていいのです

父としての威厳を見せておくことに

睡蓮を見ている眠くなってくる

五十四歳風の岬が好きになる

竹原市 古谷 節 夫

逆転のチャンスを狙う六十路かな

不器用な小指でウソがつけぬ僕

泣きごとは言わぬ山坂越えた知恵

五線紙をはみ出しそうな歌に酔い

口論も痴呆予防にして夫婦

竹原市 時 広 一 路

お互いの趣味尊重をして夫婦

今日は席譲られたよと鏡見る

ハーブの香脳の洗濯して貰う

鏡台に座ると妻は喋らない

石段を心配そうに膝が見る

竹原市 三宅 不朽

なんとかなるさ親子で飲める飲んでいる

まるすぎる人うたごうてみたくなる

元氣げんき首の細いは親ゆずり

強腰の嫁にたしかな職がある

すこやかでいるか白桃掌に包む

竹原市 石原 淑 子

キラキラと二人の門出祝う天

七夕のロマン夜空をときめかせ

朝露に光るトマトの小さな実

亡命のことなど重くはしり梅雨

届かない母の願いや自爆テロ

竹原市 岩 本 笑 子

流れ矢をかわし続けた太い足

女の戦に口紅必需品

コツリコツリと病棟のハイヒール

バラ活けて独りがこんなにも広い

信号は無いが稚魚達整然と

広島県 藤 解 静 風

川柳をつづける限りある悩み

分水嶺夫婦同体にはあらず

やることをやりとげたいま春爛漫

椿落つ再任はもう断わろう

逆境につよい女を妻と呼ぶ

宇部市 平田実男

尻尾振るところは妻に見せられぬ

休肝日守れないのは妻のほう

すぐ踊る男重要視は出来ぬ

平伏したことは忘れてそり返り

火の車なのに援助をする不思議

美祿市 安平次弘道

削除キー押せば私の負けになる

退くことを知らぬ男の太い眉

親離れの出来ぬ男に影がない

冬蛭胸の突起が疼き出す

ラストダンス女は既に燃え上がり

熊本県 岩切康子

満月も笑ってござるリハ通い

犬番で夫婦交互にする旅行

帽子挙げる迎えの合図すぐ捕え

鶯の声透き通る朝散歩

反省会次の旅行へ夢を積む

唐津市 樋口輝夫

大嘘で固めた弔辞につい笑い

ひと言がひっ掛かっている喉仏

公園のトイレで手紙読み直し

公園で花見たのしむホームレス

お年玉孫に渡せば嫁が取り

唐津市 宗水笑

ホームレス人目に触れる場所が好き

待っている球を投手は投げてこず

無神論と言ってる人の温かみ

温暖化日本の花が慌ててる

意見する方も持つてゐる脛の傷

唐津市 山口高明

一生に一度の願い聞く怖さ

身銭まで切って言う太っ腹

地響きを立てて威嚇のミキサー車

あの人の胸で娼婦になるわたし

寸借の詐欺にも一理生きるため

唐津市 仁部四郎

セメントがはげた予算が薄かった

セメントで三日覚悟を探す歯科

セメントに畦が変つて農休日

家計簿の一円後で効いてくる

家計簿が大きな音で閉じられた

唐津市 井上勝視

札所よりボックリ寺に念を入れ

御臨席を仰ぐ日本がまだあった

何故だろう握手の記憶ない息子

春の海冬の痴態は頬かむり

厨房も二人ではいる歳になる

唐津市 久保正剣

愛媛県 中居善信

ふるさとの屋根カラフルに他人増え
女教師の名字が変る春休み

会者定離ブラットホーム エアポート

ロボットに教えてならぬ有事法

割勘と知ってピッチをあげる下戸

唐津市 市丸晴翠

老舗にも容赦はしない不況風

議事堂を子に見せられぬ国となる

Eメールあなたの癖字忘れそう

妻の留守心の襷を陽にあてる

少年の神が命じる自爆テロ

松山市 丹下美津子

神の目に止まりそこねたこの秀句

やんちゃ坊主の頃なつかしい弟よ

治ったらの約束をして手を重ね

娘の家へ行っても母は独楽ネズミ

軽い男を演じてサンマ太っ腹

松山市 宮尾みのり

疑似餌かも私の前にくるなんて

デフォルメにされて本性出てしまい

力量の程は問わない使い捨て

シルバー手帳ダンスシューズを買い替える

美談の主にされて苦勞が始まった

切り株に腰をおろして見る茜

田に水を張れば蛙が活気づく

孟竹に破竹真竹と食い飽きぬ

無意識のようでも母は返事する

肝心な事を言葉にせぬ農夫

香川県 瀧井勝

手術跡俺も一癖持った貌

木の芽和え何と馥郁春薫る

上天気野良着に替える八十歳

身を責めるただ延命と言う苦行

跡継ぎがなくて名工錆びてゆく

香川県 池内かおり

九〇一号何と私の小さいこと

まる腰の母にはとてもかなわない

人を消す手つ取り早いゴシップだ

ゴッホにも負けないマゴのチューリップ

定刻に高校生とすれ違い

香川県 清川玲子

先達の苦勞を忍び九〇〇号

善人の杖で混んでる遍路宿

葉の陰で昆虫達のラブ見てる

あの日から妻が六法かじり出す

仏にも鬼にもなつて寡婦は生き

香川県 川崎 ひかり

もう二度と出番はこない老父の鍬
金持ちの寄付は期待をせぬように
ふる里に過去を赦さぬ風が吹く
人情のうすれた街で風邪をひく
盗聴器あつたら困る内輪もめ

香川県 神保 坊太郎

お歳だと言わればそうだとも思い
美人の湯で内緒ないしょの顔が会い
老骨にムチ打ち入院する羽目に
二千年の未来をしかと見た埴輪
酒肴買うて八十八夜かな

高知県 赤川 菊野

ご先祖が遊牧民か旅が好き
女ひとり男勝りと言われても
生きるとは結局一人夢芝居
息子が居ても幸せだとは限らない
春一番冷えた心がふっ飛んだ

高知県 小澤 幸泉

母の風呂敷開いたままになっている
老人クラブのぐちとなやみを溜めておく
定退の父を労わるひともなく
病む足に初春の香りがそっと触れ
年金で生きて未来を紡ぎ出す

滋賀県 中 宗明

達観を図太い奴と誤解され
ぎりぎりの譲歩で続く夫婦仲
耐えぬいて満願成就眼に涙
遊ぶこと知らないまままで古希迎え

池田市 岡本 吉太郎

広告は人の心を読んでいる
犬でさえ己の位置を知っている
お悔みを上手に言えるひと立派
わくわくと孫合格の知らせ待つ

高槻市 江原 秀夫

母の日の朝餉感謝の卵割る
黙々と句と遊び居て人恋し
人と鉢 心が結ぶ花の色
神と鬼 心の奥は弥次郎兵衛

高槻市 生田 義一

湯につかりしばし艶歌の友となる
病得て医者を梯子の日が続く
器量よしと言われてナース舌を出し
春日浴び老いも負けじと万歩計

豊中市 檜谷 郁子

改革か不況の風か花曇り
港には心を癒す風が吹く
楽しくてまた悲しくて港町
ゴム長の母ちゃん口も手も動き

吹田市 太田 昭

苦しくてもまだ生かされている医学
出前持ち尻で扉を開けて来る
遺書かいておくか借財無いことを
性格の不一致だから味がある

枚方市 鈴木 政子

造幣局に劣らぬ団地の通り抜け
アフガン地震貧者の一灯の仲間入り
本四橋島なみ海道閑古鳥
早馬から巡り巡ってケイタイに

枚方市 宮川 珠笑

篤農の名刺は太い指の腹
金借りる方が口髭生やして
リストラと違う勇退した誇り
四十年ぶりに恋文出土する

大阪市 本間 満津子

殺し合う宗教なんてなんだろう
呆けてないのに近頃判らんことばかり
食べ過ぎにフラダンスなどやってみる
花の小さな朝顔好きで種を播く

和泉市 西岡 洛醉

日曜のストレス文机嘲笑う
生真面目の靴先今日も光ってる
慰める孤独へ西は茜雲
バラ一輪赤の虚勢を庭の隅

羽曳野市 酒井 一壺

盛り場を覗かなければ眠れない
盛り場の裏で売れてるタコ焼屋
当てもなく行きつ戻りつ繁華街
半時間立ち読みですむ週刊誌

岸和田市 木村 正剛

容赦ない妻のリハビリ待っている
預けたら減るのがこわいATM
秘書給与とたんに歯切れ悪くなる
つぎは誰モグラたたきの議員秘書

岸和田市 藪野 けい子

旅の宿モーニングコールする自宅
日曜日妻より先に起床する
パンチ外されて自分の首をしめ
別腹と茶漬注文ごはん党

神戸市 山口 美穂

幼い日の記憶の糸を手繰る旅（六十年ぶりに吉野生村を訪う）
旧村の名のみ残して無人駅
ここで遊んだ昨日のような六十年
甘茶の味が思い出せずに寺に佇つ

神戸市 中村 ゆきを

長居球場いつの間にやら二人だけ
今はもう抹茶のような恋となり
昔ならボートに誘う池の彩
定期演奏会どきつとさせる紅を引き

尼崎市 松下比ろ志

長い影ふり返り見る窓の月
遮断機上る旅はまだこれからだ
わが歳を数えつ父母の墓洗う
星空の空いてる席を予約する

兵庫県 大谷幸次郎

几帳面少しルーズになれば良い
赤ん坊天下御免の声で泣く
夏の陽に野薊の刺ものものし
道端の名もない草に自負の花

川西市 西内朋月

好き放題叱ってくれる人いない
悪人にもなれず歳を重ねてる
年金のおかげ毎晩飲んでる
二日酔い五時になったらまた飲める

鳥取市 前田一枝

念入りに書いた手紙が返される
久し振りに出会った顔がわからない
薬より酒が良いよと腹の虫
粗大ゴミの捨て場行ったり戻ったり

鳥取市 加藤茶人

雨降りもいいな迎えの傘が来る
ボケて行くここは地獄の何丁目
解説者見て来たような嘘を言い
人間は恐い生き物ニュース聞く

鳥取県 橋本多哥由

困り果てあちこち回り婿もらう
くやしくて敵に情報もらしたる
春一番吹いて童話は絵になった
愛想の良すぎる女医にまかせない

鳥取県 吉田孔美子

学校へ霜踏む真つ更スニーカー
トラクターの学校前で飛び降りる
宿題もテストもないだろうメダカ
階段を猫がタンゴで降りて来る

鳥取県 国森武子

少しずつ心落ち着く五月です
父母は遠く私の胸にすみ
弟が姉より先に死ぬなんて
タンポポは白く軽げに風を待ち

鳥取県 塔寛子

うなじ見せしだれ桜も散るらしい
半分はその気になったドアの音
年輪にいつしか鱗まで重ね
バイパスを知らず山坂越えて来た

倉吉市 松本よしえ

まだ来ない返事はきつとノーだろう
排水口濁ったモラル流される
調査捕鯨などといじめに逢っている
偽りの表示 会社のためだった

松江市 安食友子

石畳わたしの光 楚楚と濡れ
亡母想う緋の紫が褪せてない
もう遅い花びら千切るのはやめる
自己流で浮き浮きしてる窓明かり

松江市 佐野木 みえ

真白い頭で次の言葉待つ
引き返す事も出来ない花曇り
子を叱る母の涙は光っている
紫の雨手の平に受けてみる

出雲市 板垣夢酔

提灯も舞っていいそうな盆踊り
すそからげ手足の白き阿波踊り
手繰られて鶴匠へ鮎を献上す
西瓜割り大上段が砂を打ち

出雲市 青山久子

ほっとしてかける医院の古い椅子
川柳は捨てられないと夜のペン
仏壇の花までゆれる深夜ベル
明日がある仄かに期待して眠る

岡山県 福原悦子

呑気です風と菩薩の掌の中で
青空をカンバスでつかい夢を描く
テストには無い特殊技能持っている
若葉萌ゆ歩き始めた万歩計

高知市 北川竹萌

九十を迎えて和む助けあい
よい旬に一族茶摘み計画す
春温い少し早目の茶摘みかも
雨がちに茶の芽は伸びてゆくばかり



(つづき)

今治市 中村好恵

マンションへ長いロインの幕が開く
半分ずつ分けて二人の昼がすむ
体重計を横目おはぎに手が伸びる

松山市 古手川 光

大物を一匹釣つてのめり込む
病院へ命預けている不安
棺おけに携帯電話入れとこう

日高市 根岸方子

垣根ごし満艦飾の花美人
山草も消して田畑も整備され
休耕田かえるの歌も変調に

自選集

橘 高 薫 風

芹摘んで芹摘んで女をうらむ
河鹿鳴くまわり蛙の大合唱
さあみんなしっかり育て青田風
大日本アル中帝国栄えあれ
この世の事は奈落にも底

越 智 一 水

汐干狩り大きな尻に行きあたり
春の唄うたえぬ蝶が雨にぬれ
雨しとど春を眠らすように降り
窓ひらき心をひらく青い空
人間は自分に酔ったときアウト

河 井 庸 佑

頂点で覚悟していた風に遭う
じつと目を見詰め本心見透かされ
失敗を重ねて餓る自己嫌悪
先入観人を見る目を狂わせる
幻想の世界へ誘う虹の橋

川 島 諷 云 児

にわか雨無人の駅の情け傘
八十がなんだまだまだこれからや
不器用やさかい真面目にやつてます
不景気へせめて明るい絵を描こう
どんな夢見たか枕が濡れている

木 村 あきら

逆境に佇つと闘志が湧いてくる
米寿でもバッグに手鏡詰めている
二次会で俺の素顔を覗かれる
サヌキ不二借景にして先ず一枚
この話ヒョツと泥舟かも知れぬ

工 藤 吟 笑

散る事を知らぬ造花の彩褪せる
変身の過去は語らぬ揚羽蝶
極楽を目指して今日も寺詣り
うまい事活けたが今日は誰も来ず
人物を買われ檻から出られない

黒川 紫香

胸の内明かしたいほど多弁な目
浜風にさらわれつつ聞く電話
笑いつつ話す誘いに乗りませぬ
妹の臨月でした菖蒲園
花からみどり京はひとりで来るところ

小西 雄々

顔二つ持つ大山に甘えない
好意抱く人が逝ってか止まぬ雨
地のぬくみ人の温みを知った風
拝借のドレスで今宵蝶になる
まだ熱い鼓動をほかすのも女

小林 由多香

早起きをして三文の得を貯め
酒の量ドームの升ではかられる
美しくなれる高級化粧品
酒も出ぬようだそろそろ帰ろうか
ありがたや年金があり暇もあり

斉藤 晶

有精卵コツンと割った今朝の罪
菜園に春の音符が踊り立つ
子を抱いた雲はばあさんかもしれぬ
新緑を風船に詰め持ち帰る
スローライフ見えないものが見えてくる

田口 虹汀

無粋な雨でお城の藤も見ず仕舞
目に青葉鯉の姿見ず仕舞
藤が済んだらつつじが後は受けている
自選集誰も褒めてはくれぬから
何もかも楓楽さんにお願ひし

竹内 紫鏑

攀る足の手当ても教え柔道場（学生時代回顧 5句）
補助線を引く奥の手を幾何教師
化学式 師は英・独の称え分け
手製電蓄 弟たちの耳肥やす
顕微鏡・暗室と良き友に従く

玉置 重人

その中の一人に僕も長寿国
かしこなる話に眠け誘われる
舶来の野菜気になる農薬度
心配の種はいっぱい持っている
ペイオフはみんな他人ごとケセラセラ

月原 宵明

陰へ袖ひいて続ける立ち話
初夏の風辞書を枕に寝てしまひ
年寄の重み返事にハイが無い
よい事があるスキップで急がねば
マスクもう要らない初夏の笑顔する

恒松町紅

元氣いい仏のお陰かも知れぬ
口だけは達者で酒の壘が空く
断りのきつかけ出来た血圧計
一代で終る覚悟は持っている
男まだ自我も頑固も老いすすむ

遠山可住

長生きをされて長女が死なれない
男の手だろう折目がゆがんでる
名前だけ書かせてもらう世帯主
共倒れの風へ月給値切られる
古希喜寿とめでたく過ぎる下降線

土橋螢

菊の芽を挿していのを確かめる
燕にも明日の予定があるらしい
音もなく散る花がある真つ昼間
武士道を知らぬ男に花が散る
指一本触れない恋を知っている

西田柳宏子

口許り達者で跳べぬ水溜り
手伝うてくれて手間暇余計かかり
おむすびは三角がよい母の味
カルテ見るドクターの笑みに安堵する
出張する度に寄り道老母見舞い

西村早苗

分け入って聞いて見ようか花の頃
初夏匂うそつと渡した白い花
郭公の初鳴き一筆添えかしこ
煎じ薬ひと口これも効くつもり
そよ風に会いたく初夏の扉開け

野村太茂津

暑氣払い喜怒哀楽が鈍くなり
コンピューターに見積もられてたわが命
競争心も薄らぎ顧みるばかり
せめて一日センチメンタル赦されよ
間が抜けたカーテンコールに惑わされ

野田素身郎

メーデー歌聞けば今でも血がおどる
最大の演技結婚披露宴
数値では糖尿病の手前です
ちさい恋生まれて消えた無人駅
元氣がない風がない日の鯉幟

波多野五楽庵

砂山の砂で念仏踊りなど
自らを裁く座禅の席につく
栄転も左遷も同じ花の下
小指きりきり雪の約束思い出す
この指止まれいつも迷子になるあなた

新緑の山こだまと遊ぶ家族づれ
歌を忘れたカナリヤのごと世相
政界の古い体質抜けきれず
笑いが消えた悪事がにくい世相
新緑の樂し京の旅おいでやす

藤井明朗

花を恋う蝶にも花の好き嫌い

学僧の月を讃える京言葉

幸せな彩に塗りたい子の未来

整理する私に捨てるものが無い

なごやかに日々が流れて老い忘れ

藤井メ女

地主には文句があつた葱坊主

傘忘れた頃から呆けが始まつた

風呂敷の大きさに合う話する

農業は婦唱夫隨で樂しそう

手刀を切つて年金受けている

舟木与根一

芳地狸村

湯の町を山から見張る妙見さん(有馬温泉)

金泉に湯肌つるつる風呂上がり

三日月に見られて入る露天風呂

次ぎ次ぎの料理におなか布袋ばら

ふとん敷く手が忙しいお手伝い

堀端三男

健在でしたかとても怪訝な顔される
焼香の列で遺徳を偲んでる
説得どころか疑心暗鬼を増しただけ
脈搏が自ずと遠くなる出会い
愛用の枕を提げて旅に出る

宮口笛生

休肝日作れと医者と言うけれど

毎日を酒にはまっている元氣

神棚の初水替える今日も生きて

週休二日土曜は塾が入つてる

しゃんとしてるつもり腰が曲つてる

森下愛論

炎え残るころに振ろう恋の鈴

戯れの愛を煮詰めて発酵す

決断の鈍さ自由を無視される

蟄居する老いのくらしに邪魔が来る

ちんまりと老いのブルスも乱れがち

八木千代

いろいろの耳に謎掛けして回る

説得の前に磁力を身につける

逆らいきれぬのは前の世の生れつき

説き足りぬので下りてくる流れ星

太陽も月も照らしてから沈む

八十田 洞 庵

来し方に積んだケルンは自分史だ
新しい杖だよ僕の広辞苑

初夏の風ミニがいきいき闊歩する
力では負けるが僕にペンがある
休止符のままで進まぬラプソング

両 川 洋 々

尾は振らぬ僕を太陽見て欲しい
枕木よ泣くな赤字は気にするな
あれ以来テロと言う字を嫌い抜く
いじめかな職場に僕の席がない
消去法で行くとのろまの僕が消え

阿 萬 萬 的

頑固もう疲れましたよ八十路坂
適当に答えたあとの気が重い
形状記憶古いものだけ覚えてた
頑なな自信が世間からずれる
絞ったら灰汁ばかり出る僕かしら

石 川 侃 流 洞

路傍の石だつて磨けば光り出す
どの部屋にも時計を置いてせよまじ
不平不満ぐじつて見たい時がある
そのうちに脳の取替え出来るだろ
酎をもう手放すもんか八十五

板 尾 岳 人

項垂れて五月の風の鯉のぼり（故小林周信氏）
酔うているらしい女性のみな美人
酔うて来た妻も美人に見えてくる
昼間から酔うているのか虎退治
板尾家も先祖代々酒豪なり

河 内 天 笑

お祈りのかたちでジェット機が離陸
ときめいてはじめて食べる豚の耳
唇を奪われらつきよの香が残り
日本中泳ぐ私は回遊魚
高速が混んで祈りが通じない

第20回記念 夜市川柳大会

と き 7月31日(水) 開場・午前10時
と ころ 堺総合福祉会館5F 大研修室
題と選者 各題2句 12時出句締切

「劇」	枚 方	寺 川	弘一	選
「妙」	堺	河内	月子	選
「息」	河内長野	樋口	冬虹	選
「岬」	西 宮	門谷	たず子	選
「顔」	河内長野	加島	由一	選
「海」	吹 田	山本	希久子	選
「雪」	和歌山	古久	保和子	選
「旅」	鳥 取	鈴木	公弘	選
「港」	出 雲	岸	桂子	選
「命」	海	三宅	保州	選

会 費 2000円（軽食・作品集呈）
主 催 堺 川 柳 会
〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河 内 天 笑 方

水煙砂

板尾 岳人 選

生命の驚異雑草との戦

松江市 三島 淞 丘

自分史に書けぬ一夜の出合い宿

妻の勤ますます冴えてくる恐怖

ややこしくなった三色ボールペン

休んだらライバルの背な遠くなり

愛媛県 花岡 順子

遠くから見つめて居たい人がいる

声かけてみたい話がしてみたい

どちらにも付かず気軽なヤジロベエ

肩書きが命守ってくれますか

もうママになったつもりのマタニティー

和歌山県 中村 君枝

愛と憎 夫婦狭間で揺れている

相槌を打って聞き役座を保つ

美しい笑顔素顔のつましさよ

騙されてあげよう嘘が下手だから

都合よく忘れましてで逃げる癖

保護色の中で踊っている余生

横浜市 荒井 広和

妻の書く円周率で踊らされ

未完成だから明日の夢を描く

その裏をかくライバルにシャッポ脱ぐ

ひと言が憎悪の堰を切るヒト科

奈良市 乾 春雄

がむしゃらに生きた男の四面楚歌

胸の奥消えない火傷抱いている

売り言葉買わずにじつと耐え忍ぶ

風化した記憶継ぎはぎして辿る

都市砂漠ふる里捨てた人の群れ

泉佐野市 稲葉 洋

政治劇湯水の如く使う税

支持率が期待疲れで肩を下げる

追跡がきついで死んだ振りをする

高いほど落ちたシヨックもきつからう

石積んで積んでは崩す娑婆の欲

札幌市 三浦 強一

どこまでも貧乏神がついてくる

母の日も母脇役で父を立て

博識のネタはわが家のおばあちゃん

機密費があり二次会は付き合おう

割り勘で壺中の天地楽しまん

河内長野市 大西 文次

なるようでならずならないようでなる

外堀を埋められそうになる余生

長生きがよいとばかりは言い難い

もうあかん言うてからでも二三年

朝は九時それでも昼は昼で寝る

横浜市 川島 良子

自立した女でないとダメですか

惜しまれて死ねる倅せだつてある

どこが好き女はすぐに聞きたがる

あの人が怒る余程のことらしい

赴任地で大輪咲かす恋の花

愛媛県 安野 案山子

母さんの顔見るだけの里帰り

泥沼を無心になつて泳ぎ切る

仏様に縋つて今日も日が暮れる

真つ白な紙に無心の墨を引く

頼りない乾杯になる紙コップ

愛媛県 宮本 末子

振り上げて祭り太鼓は声で打つ

渇水のダムを満たした男梅雨

騒がせた世間その割り軽い罪

口笛を吹いて呼び出す恋もある

花冷えの咳に取り出す置き薬

香川県 伊勢 八重子

辞書に無い事も教えてくれた母

ボンネットバスでレトロな島巡る

砂浜に元気をもらう足の裏

後悔は煽てと知らず乗った船

痴呆度のテスト気にせぬ軽い靴

府中市 馬場 利子

父の貨車苦楽の汗をたんと詰め

母の風音符でつなぐ糸電話

糸切れた風と飛びたいしゃぼん玉

絵の中の土の声聞く茄子の花

活けられて横むきがお好き百合の花

松江市 山根 邦代

ふるさとは緑の雨が降るような

あれからは朝の鏡がうれしそう

髪形を変えて緑の芽とあそぶ

食べる人いるから楽し鍋の蓋

エプロンを休ませて行くおよばれ会

横浜市 金森徳三

養毛剤叩いて古希の毛を守る
言い分をぐっと押さえるのど仏
十年後などと言われて気が滅入る
違和感のする年寄りの羽布団
決意して要らないものをやっ捨て

横浜市 鈴江純子

子に注ぐ愛豊穠のときを待つ
ウインクに不協和音が奏でられ
間延びした返事おくって膝まくら
睨まれて箸もためらう活けづくり
一病のお陰丁寧に生きている

横浜市 長島亜希子

二二三歳さば読みわたし女です
葉が丸い長い議論野草会(野草を見る会)
貯めたのか子までペイオフ気にしてる
間違っても得をするなら黙っとく
メガネ買うもう目のせいにできません

横浜市 芦田鈴美

曲がり角まで追ってくる母の声
女房の愚痴が返事を聞きたがり
婆ちゃんの知恵がとっさの熱を下げ
鍵穴に遊ばれている薄明かり
おふくろの味女房に歩み寄り

横浜市 秋元和可

先達の努力 柳塔聳え立つ
諍いへ呑んだ言葉を吐く日記
加速する時の流れは止められず
もう少し背筋伸ばして影法師
切札は明日のために取って置く

川崎市 小林久美子

土を掘る宝探しの考古学
農夫みな土の温もり知り励み
耳遠い母と両手で話す
振り出しへ引き戻された勇み足
お隣の窓から噂うごき出し

富山市 松見たえ

好きな人出来て揺れてるイヤリング
二代目の腕を励ます鬼瓦
振り上げた腕を女房に押えられ
人間を続けるために飲む薬
世論など気にせず闊歩する茶髪

静岡市 中西雅

演技から楽しい涙貰いうけ
押し花の古い本からこぼれ落ち
湯治場の同じ悩みの顔が浮く
鈴元の白が眼にしむ喪の女
おみくじの枝に結んで神まかせ

町田市 土田 今日子

ハリーポッターを読む童心を驚掴み
やくりりのコツに捨てない野菜屑
遺伝子の確かさ父も気が弱い
お互いに自分が我慢して夫婦
遅咲きのポピーはわたしかも知れぬ

和歌山市 土屋 起世子

夫から好きとは聞けず春過ぎる
肩の荷を下ろし両手で風掴む
子の便り名文だから案じてる
バブル時の衝動買いが役に立つ
一日の余白にコーヒ―淹れている

兵庫県 安達 厚

枯枝が気になる花見農夫です
元気でまだ病院へ通えます
ひたすらに素顔で生きて古希の春
有難や雨には雨の暮らしあり
父の歳越したが父は越えられず

綾部市 藤田 芳郎

故郷の匂いは母の煮転がし
バス停が病院前にある福祉
手を握り他になんにもしてやれぬ
土に問い土に聞かせて鋤を振る
曲がる骨みな曲げてする頼み事

鳥取県 平尾 菜美

これしきに愚痴らぬ足がしびれてる
合掌の丸くなる日が待ち遠い
つきあたる壁が固くて破れない
もえさかる炎に口ははさまれぬ
ふるさとの憶い眠りに溶けてゆく

鳥根県 武島 ちよえ

水枯れの花に詫びてる旅三日
喜寿すぎた今も火種は持つている
むずかしい言葉は要らぬありがとう
謙遜が誤解を招く破目になり
鬱憤の捌け口になる日記帳

鳥取県 鳥羽 直市

しがらみを断つ雷鳴を待つている
一筋に生きた昭和も遠くなる
入浴剤入れて出で湯の名に浸る
喜寿迎えこころ新たに生きてゆく
臆病で浅い川にも溺れそう

鳥取県 鳥羽 玲子

やさしさも持つて育った子の背中
若い日の希望もいつか路線替え
生きのよい魚ウイंकしてみせる
試着室あれこれポーズとって見る
美しく見える日もありよい鏡

鳥取県 福西 茶子

鳥取市 福永 ひかり

誘われて蝶もスミレもわたくしも
断らぬ覚悟した日の帯は赤
半音符ほどの距離なら許されよ
不器用な蝶であなたに止まれない
腹の虫起こさぬように茶をすする

鳥取県 西 冲 彰 雄

約束は出来ぬよ小指傷だらけ
相槌は打たぬが首も振らず聞き
真実が怖くて話切り出せぬ
歳なりの悟り悩みを抱いて生き
煙草の火消して言わしてもらいます

鳥取県 西 垣 美知子

運のない汗を夫婦で慰める
うしろ姿子等が見てますお父さん
ここからは子供のために踏み込まぬ
かあさんが笑うと家に灯がともる
ストレスにつぶされそうな長い夜

鳥取市 岡 田 信 恵

控え目な人柄こそが光る人
現実をそのまま映す内視鏡
長ばなし本音はやはり胸の中
雨風に蕾が夢を膨らませ
手ごたえが確かにあつた登り坂

赤ちゃんが愛想笑いに笑わない
この前も聞いたと言わず聞いている
憎しみの奥で求めている平和
朝に目が覚める保証はない明日
新しい風を求めて立ち上がる

鳥取市 田 村 邦 昭

半分は父の血まじりお人好し
説得の母の口には嘘がない
一度なら過失を許す愛がある
常識のルールに意地が邪魔をする
来客を口実にした嘘もある

八尾市 驚 見 章

母の日に母のない子の一人ぼち
空想の世界に遊ぶ病むベッド
夢重い動くマヒの手マヒの足
車椅子歩ける人に負けないぞ
涙する人の情のぬくもりに

八尾市 與 田 明

貫いた趣味は古希まで卒寿まで
糸屑を遊び相手に老いの指
決断の視野に子供の顔がある
目標をめざし孤独に耐えている
相槌を打つ背に敵が見えかくれ

藤井寺市 若松雅枝

背伸びしてライバルと会う五月晴れ

皺の手に苦勞のあとを褒めてやる

誘われてうっかり乗った泥の舟

戦中派真赤な服が夢だった

五十年剥げたメツキを塗り直す

寝屋川市 岡本 勲

ばりばりと働き梯子はずされる

回り道しすぎて運をとり逃がす

テレビでは旨そうだったこの料理

片手間にと始めた趣味に四苦八苦

不況風曲り切れるか曲り角

高槻市 執行 稲子

五月晴れわくわく踊り出す絵筆

テキを食うタイガー弁当カツも添え

しらぬ間に生えて抜けてた親知らず

ライバルの米寿に卒寿負けられぬ

指切りのプラン澄まして漏らす友

堺市 荻野 象山

新聞を読む父の箸皿さがす

老母だけがパンを固守する朝ご飯

階段は手摺が味方してくれる

ハローワーク探す六十路の利用価値

遺伝とはこうだとばかり泣き黒子

東大阪市 田中 美弥子

庇い合う夫婦の丸い影法師

七曲り越えて夫婦の味が増す

恋に泣く女の耳は嘘に慣れ

裏切られ疑い深くなった耳

裏切りをつぐなうことも愛である

箕面市 北川 ヤギエ

金婚の花をめぐりて旬の旅

掃除機の音で吸い込む過去の傷

春ざれに蓮華畑の首飾り

独り言呟く母の日向ぼこ

縄張りに敗れた鳩の目の主張

吹田市 木下 敏子

茶柱にうれしいことのありそうな

平凡に生きることにもむつかしい

長いものに巻かれて丸木橋渡る

さやら路をここと母の味で煮る

青虫が蝶になる日を待つ日影

野田市 那賀島 雅子

北風に押されてやっと思案きめ

若き日の度胸を語る老いの皺

予期してた老後のことは夢として

嘘でない汗びっしよりの握手だよ

不意に来て涙をくれる古い友

アルゼンチン 松井 美稚子

子に継がせ行進曲に離れゆく
プリズムの五色も映えぬ不況国
セクハラと言われるほどに愛馬撫で
鯛よりも高値の貝に問うてみる

青森県 福士 トキ

五月晴今日のお空はまるで医者
亡母の労靴下の穴語り出す
冬眠のうぐいす待たず梅が散る
仏壇とお話出来る今朝の幸

秋田県 湊 修水

窓ぎわの花に聞かせる独り言
生きている俸せ今日も日がのぼる
底辺で生きると怖いものはない
休耕田いつまで神をなげかせる

秋田県 秋野 宏

この本に眠り薬が沁みている
カボチャにも主食つとめた過去がある
一円の違いで迷う生タマゴ
少年の志は過疎を捨てたがり

日立市 加藤 権悟

父さんの馬鹿正直を笑えない
表情は豊か故郷夕焼ける
てのひらに大器晩成まだ信じ
お通じがあつたと妻のいい笑顔

川崎市 浦野 昭志

ありがとう言われて続くボランティア
爺の背もまだ温いのだよく眠る
寝転んでゆつくり昇る月を観る
キッチン皿一枚を見抜く妻

川崎市 中村 泰竜

格安の旅でクレームつましく
じらされて子音の目立つ声になり
収まらぬ胸を写経に諭される
リハビリへ一歩踏み出すスニーカー

川崎市 大島 三四朗

突風を恨んで帽子追いかける
血糖に追いかけられる万歩計
駆け足の季節に花はついて咲く
八十路坂越え晩学の眼がひらく

川崎市 塩澤 ひで

子のように筈背負い山の路
朝蜘蛛に今日の雲行き託して
針の穴ほどの幸せ助けられ
秒針がワルツにひびく今日佳い日

逗子市 神戸 みず帆

降り止まぬ雨の音符が狂い出す
何気ない言葉に足を掬われる
翔べる時あつたと思う風の向き
石投げて波紋の行方確かめる

藤沢市 妹尾 安子

言い足らぬ分はペットにこぼす母

曲がり角までは気丈に送る母

町内の花に詳しい万歩計

おおげさに驚いてやる子の手品

横浜市 巖 田 かず枝

花いっぱい植えて悲しさ紛らわす

母の日は自分に褒美買ひに行く

カップ麺味も値段も星三つ

前例があると安心するらしい

横浜市 生 坂 サト子

予定表やや大き目に句会の日

吟味した水着待つてる海開き

妥協する間口どんどん広くされ

泣き叫ぶ藩陽での児胸を衝く

横浜市 伊 藤 ふみ

五月晴れ自然に足はスニーカー

逆境に背を向けるとは損なこと

意表突く言葉を放つ青りんご

無欲ねと言われ椅子取り負けてやり

横浜市 近 藤 道子

虚栄心なくさぬように気をつける

明日咲く花と楽しい会話する

曲りたい方へ曲がれぬ野菜達

後手後手の対応だから不自信

横浜市 布 山 嘉信

裕福を誇り連なる鯉のぼり

議員秘書金の成る木に口を利く

ストレスが百薬の長毒にする

医者のかぜ薬横目に卵酒

横浜市 平 達也

思い出の夢で会う人会わぬ人

喜びを満面にして夢さめる

迷路からまだ抜け出せぬ老いの坂

簇より時の流れて子が育つ

横浜市 三 村 八重子

突き放す親の度量を子が試し

遺伝子をそんないじっていいですか

リストラに柱の傷も人の手に

雨上がり存在感の紅ぼたん

横浜市 吉 田 裕峰

幸せな老後がつくる笑い皺

予想せず講釈だけの評論家

転勤の無い窓際で生き字引

風上の隣へ涼を撒いておく

東京都 井 上 つよし

伸ばしても曲った釘はまた曲り

鼯鼠目に見ても年だという鏡

別腹が一つじゃ足りぬ広州路（雲南紀行二句）

石林に三蔵法師石と化し

東京都 やまぐち 珠美

近松の墓は市井を今も観る

昔いた町に形見を埋めてある

波立って真似を拒んでいる水面

臘氣になんて嫌いなバラの棘

東京都 清原悦子

無人駅さっそく足に蚊が止まり

ちぎり絵に明日の色を貼っておく

ストレスを解かしてくれた友の声

ただいまを迎える声は温かい

新潟県 高野不二

肉野菜牛乳信じるものはない

政治家も食品も皆嘘をつく

金出して田植え体験するという

酒だけは家中で母の日を祝う

京都府 清水英旺

身をよじるアロエの茎のおぞましき

パンコンが仲人をするこの時代

介助犬になれぬ愚犬がいとらしい

筍の皮はぐごとく心晴れ

大阪府 小栢こずえ

つばめ来て田作りせよと急ぎたて

嫁の留守家事の苦勞がよく分り

自分史の中に生きてる古着捨て

山菜の香り煮つめて愛送る

大阪府 畑中節子

夏の草われ一番と背のびする

深呼吸香る若葉を一人占め

春の絵にえのぐ塗り足す初夏の風

朝もやの晴れゆく湖面逆さ富士(河口湖)

池田市 多田契子

師の影を踏まずも遠くなったまま

ゆっくりが地となる年齢にやつとなり

一片のプライド残し陽は落ちる

埋もれ火のイタズラなのか胸弾む

和泉市 横山捷也

娘が嫁ぎ小さくなった朝の音

ふるさとの日和聞いている長電話

過去を消すつもり女の靴の音

聞く方に回ろう番茶が旨いから

大阪市 熊代菜月

大阪のもうかりまっか消えました

結び目に母の願いがこめてある

何所にでも居るおばさんのコマージュ

アンケートみんな普通と書いておく

大阪市 西川更紗

鯉のぼり乗ってみたいと駄々をこね

水溜り青空いっぱい吸いこんで

マニキュアを赤に変えても気づかれず

誉め上手声が若いとトーンあげ

柏原市 永 浜 加津子

花たちのヒソヒソ話風そよぐ

妻臥せて春の嵐が吹きぬける

長生きをしそうな予感いいのかな

チャンスにも一歩が出ないもどかしさ

河内長野市 木太久 正 一

久し振りラッシュに遇うて嗚呼しんど

全集を揃えたままで悔いている

妻の恩いざこれからは倍返し

行動に年相応のかげの声

河内長野市 村上直樹

浮き沈む波間でつけた生きる知恵

悩みなどどこ吹く風の空の青

少年の闘志のように若葉萌ゆ

迷っても答えをくれた座右の書

吹田市 須磨活恵

仕舞風呂心の垢も身の垢も

ぬるま湯の日々ぼんやりと黄昏れる

貧乏はいいさそれでも達者なら

言われても言ってもうれしいありがとう

吹田市 木村無緑

フリーガン一役買つて有事論

人という地球を壊す虫が居る

リストラは無いのか今日も蟻の列

戦犯を拝む総理の不戦論

高槻市 乙倉武史

花愛でる心のゆとりある暮らし

歳と共段々しほむでつかい夢

笑いこそ心の髣の錆落とし

健康の源は無理せず粗衣粗食

豊中市 藤井則彦

こつそりと妻も読んでる週刊誌

週刊誌いつも好評発売中

散髪が終わったあとも週刊誌

まだ半分あるじゃないかと楽天家

富田林市 稲川恵勇

器用さに欠けて一言居士でいる

人情と地酒で左遷癒される

悪いこと出来まへんなとすれ違い

犬も食わぬ喧嘩に勝ったためしない

箕面市 寺井柳童

星ひとつリードしてから胃が痛む

病院へ行くのが日課健康法

雨ばかり撮ってる旅の写真集

日本晴れあきたこまちにひとめぼれ

羽曳野市 福田悦子

行水を知らぬ若さの中にいる

金魚すくい昔の腕はどこへやら

七夕の笹へ願いは多すぎて

フラッペと名前を変えたかき氷

羽曳野市 森 下一知

神戸市 両川 無限

横からの風がさえぎる正義感

ふる里へ近づく水が澄んできた

変化球覚えて親を困らせる

まだ食える腕が浮いてる不況風

枚方市 荘 司 弘 之

鯉のぼり美味しそうな風が吹く

渋滞のニュースで連休らしくなり

新人のトチリ楽しいバスガイド

発泡酒飲んで税金思い出す

八尾市 平 川 幸 枝

気を遣いながらぼんやりする余生

円滑にまた会うこともある別れ

生きているぼんやり出来ぬ介護法

ほしい物手にして心空になり

八尾市 山 本 宏 至

腰痛と我慢くらべの草むしり

のみこみが早い分だけあきつぽい

無理したと顔に書いてるプレゼント

戎橋ぼんやり歩く空財布

兵庫県 岩 本 美緒子

同胞と見る小雀が春の庭

聞かずとも解る予感の古い哀喜

離れ部屋オーブンにして我が天下

夢乗せて余白におとす浅葱彩

淋しさを埋める折り紙かも知れぬ
天下り妻 姑の席に着く
子に譲るルートに種を蒔いておく
見るだけの客にも自動ドアが開く

神戸市 伊勢田 毅

向かい風正論少し温める

無位無冠七人の敵ちゃんという

ライバルの歩調をそつと真似てみる

胃の中で酒と薬がもめている

神戸市 木村 忠 義

もう歳かやる気を出して案じられ

年がいもなく気を若くもち過ぎか

溝ができ声かけるのに要る勇氣

固まって咲く花はみな元氣そう

三田市 石原 歳 子

拡大鏡辞書とコンビを組んでいる

一安心医者に貰った太鼓判

寛ぎの旅は鈍行お湯の宿

消え失せた蚊帳のよさ知りブーム呼ぶ

篠山市 円 増 純 子

ピカピカに鍋光らせる憂さ晴らし

人の目を盗んだ恋にあるスリル

抜けるよな空が吸い込む祝い唄

理想には遠く脱皮を繰り返す

宝塚市 飯西ミサヲ

大阪のおすしやさんに集合し

ばあちゃんが送ってくれた太いネギ

別れの日あなたに贈るありがとう

そろそろとくるから老いは迎えられ

和歌山県 村中悦男

間食の摘発をする血糖値

見舞客昔なつかし風連れて

道草をしようと誘う水の声

退院を静かに待ってる靴がある

和歌山市 上地登美代

人間のエゴにほとほと泣く地球

なんじゃかんじや嘆けど米のある平和

ペイオフへちよつと案じる振りをする

確信へ母は心を鬼と為す

和歌山市 北村光男

私に手を触れないで鳳仙花

転勤の飲めば出てくる恨み節

足元に不平泡吹く蟹が居て

支え合う心のこもる人の字か

和歌山市 橋爪佐一

入れ歯落ち捜してあげる仲となり

同窓会以心伝心眼でサイン

これ内緒あんなだけよと他人に言い

同窓会敷を埋めても同じ歳

和歌山市 根田美子

灰汁のある人それなりの味もある

根回しをし過ぎて枯らす事もある

あの人はきつと聞いているひとり言

今日もまた正直者で日が暮れる

和歌山市 武本碧

底辺に生きて上澄み光らせる

もともとは米と言い張る左利き

幸せの尻尾つけたりはずしたり

赤丸をつけて無念の休肝日

和歌山市 松尾和香

気まぐれに生きた人生折り返す

カーネーション五月の風に良く似合う

初しほり五臓六腑にしみわたる

墓参り生きる証のまつりごと

海南市 堂上泰子

雄弁にさせる時効となった恋

芍薬をパツと咲かせた温暖化

大好きなあなたへ捜す青い鳥

蟹気楼だった私の思い入れ

鳥取県 池澤大鯨

席譲るつもりで立って無視される

上品にいつまで続く譲り合い

譲り受け書き込みメモを活かす知恵

かち合つてこの場は譲りはるか先

鳥取県 岡村孝明

鳥取県 細田裕子

足あとを残す続きを書いていて
連休へ家族の絆強くする

五十代老後が視野に見え隠れ
深呼吸胸の奥まで若葉色

天敵が居て世の中は保たれる
環境の浄化へ和紙も使われる

野の花と会話がはずむ散歩道
道草を食ってルーツが狂い出す

鳥取県 奥田保子

鳥取県 前坂美佐枝

気が付けば親子おんなじ声しぐさ

参観日ママの変身見事だね

行き帰りルーツ変えれば倍楽し

この命 後がないとは言わせない

鳥取県 蔵本悦子

鳥取県 平井栄翁

温暖化地球のヘソも曲がり出す

カーネーション母が変身したのだろ

鯛鰯愚痴があるなら聞きましょう

ボンコツになっても笑顔絶やさない

鳥取県 澤裕子

鳥取県 平木公子

葉桜が風とワルツを踊ってる

極楽に行けるルーツが見つからぬ

のし袋見栄が半分のぞいてる

臆病で浅瀬ばかりを渡ってる

鳥取県 鈴木一弘

鳥取県 山岡久枝

家計簿の穴はカードで蓋をする

空席の花一輪に蟬しぐれ

つぎつぎに積んだ積木が揺れる日日

思惑でいいねいに摺る黒い胡麻

好きな事していると胃腸調子よい
長生きをしそうな食事老い二人
子育ての母はやさしい顔になり
百円の店が楽しく買いきる

鳥取県 吉田 弘子

近所づき合い年功序列生きている
負けて勝つながい月日の戦です
方言に説明がつく日本語
踏みつけた草ほど強い芽を出した

鳥取市 西尾 敬之介

どん欲に歳を忘れて講義聞く
軽口がとんだ誤解の渦を巻く
言い訳ができないように幕を張る
野良犬も飢えてひもじくじゃれてくる

鳥取市 永原 昌鼓

柔らかい声が急所を突いて来る
まだ死ぬぬ今日もしっかり飯を食う
天も地も汚して人は通り過ぎ
茶の間には喜怒哀楽の顔が寄る

鳥取市 森 美智代

振り出しに戻り明日の花を摘む
噂など気にするな雲流れるよ
前略のあとを掻き消す雨の音
雲行きを触らぬ神の傍観者

鳥取市 横田 春名

里帰り仮面はずして風入れる
噂好き知らずしらずに鬼となる
銀婚の妻がまさかの弓を射る
微笑んで苦勞話にまた戻る

鳥取市 録 沢 風花

身辺にいろいろ起きて春おぼろ
修羅越えた強さを秘めている笑顔
頼られるうちが華だと鞭をうつ
葉桜に春の微熱がとれてくる

倉吉市 森川 あらた

人形にだけは弱音を吐いている
生きている人ほど怖いものはない
天才と言われることはありえない
笑い声いつも絶やさぬ仲でいる

米子市 足立 由美子

静寂の中で雨音だけがする
輝いているのはきつと新社員
少しずつ目標変えて生きてみる
小春日の中へゆったり命干す

鳥根県 菅田 かつ子

だまし風何を信じていいのやら
おしゃれする気持ちにさせたい知らせ
傘もつか持たずに行くかまだ迷い
こんなとき神さまそっぽ向かないで

出雲市 加藤 スズコ

あこがれた世紀に生きてポランティア
茶の間にも身近くなった政治論
芸の虫磨く絆の親子猫（江戸家猫八さんをしのび）
いい仲間いるから結ぶ軽い靴

岡山県 国 米 きくゑ

爪丸く切つて外面いい夫婦
自分史の余白彩どるベンを選ぶ
中傷も愛を咲かせるベンを持ち
年金へ安心売りが来て困る

宇部市 高山 清子

もつれ糸解けず今宵も眠れない
何時からを余生というや落ち椿
満月を丸呑みしてる大欠伸
腹立つ日下戸でも酒が欲しくなる

竹原市 正畑 半覚

源流を求めて父の森へ行く
思い出す人があります花の色
赤い夕日が立ち止まる無人駅
わたしにも無常の風が見えてくる

唐津市 坂本 兵八郎

ライバルの動きを測る石を投げ
一一合既にギヤーが切り替わる
布石した場所を獲物が避けていく
宮仕え済んで毎日いい天気

香川県 原 賢

どの子にも母の泉が満ち溢れ
こりたはずなのに実印押している
話などしたくて花の種を蒔く
今日もまた見ざる言わざる黄昏れる

愛媛県 黒田 茂代

こんなにも花を狂わす温暖化
死ぬまでに戻るだろうと株を抱く
春夏秋冬 経巻読誦から朝に
出かかった小言呑み込むこつ覚え

愛媛県 山之内 八重美

老い一人つぶやく余生風の中
流れ雲噂は軽く受け流す
旅心 ひよいと曲つて見たい町
あいまいな心に虹も消えてゆく

今治市 野村 清美

何となくつんと冷たい高い鼻
言うまいか言おかコーヒーまぜながら
社交術自慢も愚痴も聞き流す
ふんわりとタンポポ空へ飛ぶ構え

今治市 塩路 よしみ

人並みの命が欲しく善を積む
傷ついた心の影は見えますか
夕やけ小やけ彩が女を黙らせる
くたびれた鞆に愛の物語

松山市 高橋 宏臣

待つことが嫌でチャンスに嫌われる
鯉のぼり風が男の空にする
薄情な鬼の答が真かも
好きなき好きに旅する世界地図

武蔵野市 亀井円女

嫁と娘に逆転されてえびす顔

良き老後とつくに捨てた女偏

ごゆつくりにくつかり乗つてはなりませぬ

横浜市 石原三郎

高齢は無口にこにこ喜ばれ

ポンコツを修理しながら八十路越え

春嵐いやよいやよとチューリップ

横浜市 豊田羊子

バスデーカードに祝吟考える

きかされた女性に人気あつたころ

肝炎の本送らないまま本棚に

横浜市 山梨雅子

昨日より今日は歩けた試歩の杖

コトコトと煮豆楽しむ梅雨模様

新聞を読む体調が良いらしい

岐阜市 平野あずま

価値観の違い鏡の右左

職安に逃げ水を追う人の群れ

マドンナを写真嫌いにさせた皺

尾張旭市 三浦きぬ

長生きは肩身の狭いこともある

もう結構いやまだ生きよ老いの揺れ

春近しつい口遊ぶ早春賦

滋賀県 久保和友

ケータイで呼び出してみる陰陽師

歩調とれという歩き方があつた父

七人の女とたまごを割っている

京都府 前上英一

定年の内助へ指輪つつましく

道程の長さに触れぬ父と飲む

お互いの汗を劳らう宿浴衣

京都市 三宅満子

せわしなや花も季節も前倒し

出かけるとメディアが煽るからやめる

阪神に一喜一憂して疲れ

大阪府 高木道子

雨上がり紋白蝶もいそいそと

へそ繰りも底を突き出す休み明け

出番待つ布団たたきの虎メガホン

大阪府 野田栄呼

眼を閉じてなぜか口開け目に薬

筍の生命力が石にじる

カーネーションあげたい時に居ない母

大阪府 前田忠子

わが家にも作って欲しい燕の巣

様々なさだめ集めて空の旅

余暇ばかりふえて家計薄火の車

大阪府 東 文 江

ツバメさん一年ぶりの里帰り
雑草と戦いつづけ勝ち目なし
かゆいとこ手の届かない嫁でした

大阪府 桑 田 ゆきの

一服のお茶ではぐれる仲となり
シグナルをもう出している足の冷え
ジャンケンのリハビリ弾む介護室

大阪府 藤 井 郁 代

長寿へのゆとりの貯金顔のしわ
潤いの豊かな趣味を生甲斐に
くちなしの花の香りに頼寄せて

和泉市 小 坂 凡 英

下積みもなにも構わず薺咲く
古稀にきて父の頑固を首肯する
此処かしこ興の尽きない欲と慾

泉佐野市 備 後 三代子

日に三度きつちり食べる律義者
風呂敷に包んでみたい春の宵
なつメロのすらすらと出る僕の風呂

大阪府 岩 崎 公 誠

反骨の本音を吐いて身を削る
チューリップ恋しい人へ首のばす
不景気で安く見栄えのプレゼント

大阪市 平 井 露 芳

頭にええ言うから食べるホタルイカ
表だけ覗いただけのUSJ
USJに負けたらアカン宝塚

大阪市 小 川 恵美代

皇室の愛すくすくと青葉の季
泳ぎたく風を待ってる鯉のぼり
ペイオフの対処マンション買う人も

大阪市 大 川 道 子

札束で人の心は囲えない
夢つつむ風呂敷きつと無地が良い
顔に出ぬタイプで苦勞悟られず

大阪市 星 野 きらり

白寿でも奥さまと呼ぶ嬉しそう
笑い皺わたしのトレードマークです
母の日を待ってるわたし子に還る

大阪市 尾 崎 黄 紅

魚偏をいくら訊いてもすぐ忘れ
少しだけ頂いてきた酔うている
慰めにきて慰められて帰り

大阪市 伊 藤 博 仁

人の鼻雌花に見える杉花粉
預ければ利子はつくけど蚊の涙
咲く時期をずらせば虫もやって来る

大阪市 中村 忠敬

横文字の遊園地だけ流行つてる
嫌煙派敵は多勢で無視される
この家にや用ありません貧乏神

大阪市 三浦 千津子

日々好日 神に任せた命なり
余生とはいつからを言う薄曇り
建て前が本音に変わる酒の量

交野市 田岡 九好

エーテルのような時代の毒を吸い
パニックをやんわりそろとすり抜ける
屑の意志なりともおれの意志である

門真市 矢阪 英雄

停年の一時停車で火を消さず
豆かじり沢庵かじり歯は自前
五十軒そば屋はみんな誇り持つ(出石)

岸和田市 坂口 英雄

長老が来て年寄りが席譲る
靴下を穿けば水虫笑い出す
たこ焼きを食べて二人は仲なおり

岸和田市 亀井 皎月

水絶えず苔むす不動法善寺
相槌を打って味方に入れられる
大安も仏滅もない嬉しい日

堺市 渡辺 さだを

青春は心の若さへッセの詩
人生に賞味期限はないはずだ
難病に耐えて炎で燃え尽きん

堺市 河盛 龍三

嫌な人だけど気になるプロポーズ
夭折の忘れ形見を生き甲斐に
酔うほどに若い気分で恋心

堺市 大橋 錦

袋詰めおいしい春を待つ母へ(母九十二歳)
またさむい筆筒の中も落ちつかず
公園の青いテントで足すくむ

堺市 梶本 哲平

褒めたのにバックで買ってきた蔬菜
頑丈が逝って弱虫生き残り
教育を考え直すこどもの日

吹田市 二宮 栄子

ごめんなさいが素直に言える児に育ち
かごめの輪塾に行く子が抜けていく
友が来て見栄もすこしませて盛る

大東市 南原 正和

ライバルが優しく見える定年後
妻の留守初めのんびり後佗し
僕の餌お気に召さぬか池の鯉

新緑の大社二十歳の日を想う

高槻市 安田 忠子

下手でいい下手でいいよとおだてられ
阪神の快進撃に活もらう

高槻市 大崎 侑子

子供部屋鍵つけてから親離れ
新人が入らず未だ新人で
デュエットで噂の仲を披露する

羽曳野市 山本 たけし

花時計眠たくないか午後三時
会心の笑顔ほころぶお立ち台
食えるだけあれば欲ない二度の職

羽曳野市 永岡 章司

晴耕雨読 聞こえは良いが職がない
こつこつと貯める年金孫齧る
部下は無しスペシャリストとおだてられ

東大阪市 今岡 貞人

影法師みたいに付いて来た八十路
三山を眠くさせてる春がすみ
あと少し上手に使いたい命

東大阪市 笠井 欣子

子に美田残さず雑草風に揺れ
錆びた脳封じる寺へ傘忘れ
それぞれの時計に合わす台所

妻の怪我ボケる暇なく家事せわし

枚方市 小川 良吉

信号まち乙女紅差し木々萌える
トラブルを避けて微笑む老いの技

枚方市 大昇 隆広

Uターン鞆に母の味詰めて
この暖簾継げと言えない父の背な
花の無い墓も静かに彼岸会や

藤井寺市 伊藤 アヤ子

肩書きが自由に生きる邪魔をする
やんわりと魔のささやきが忍びよる
行動に母の面影重ね見る

藤井寺市 西村 栄一

デパートのカニを横目にサンマ買う
ハーモニカ昔をしのぶ音がする
凡人で食い意地だけは負けません

藤井寺市 吉田 喜代子

布団干す楽しい夢を見るために
おしゃべりな友だ私も喋らせる
噂話聞くだけならば面白い

藤井寺市 増井 ヨシ枝

打った手を軽くかわして蚊が笑う
制服の胸もふくらむ花の中
とびすぎる妻のスカート短すぎ

八尾市 田中トシエ

風向きを読んで主張を裏返す
馬が合う大風呂敷と小風呂敷
グーばかり出して頑固な児が育つ

八尾市 中島春江

医院開院引きセールとも言えず
青空に糞虫外を見たくなり
コマーシヤルだけになつて紙兜

八尾市 松葉君江

手抜きせぬ律儀な父の力瘤
おいおまえ名前も呼ばず五十年
海外へ年金バネにジャンプする

兵庫県 黒崎美紗子

ひたたくり小さな町の大事件
苗植えて祈る気持で水をかけ
今だから言える話と声ひそめ

兵庫県 徳平毬子

嘘ひとつ向いた視線が身に刺さる
生かされて薬七彩今日の糧
本音いう日記にしかと鍵かける

尼崎市 桑原東園

仲裁に声は出せない水中花
堪忍の袋は妻に押しつける
窓際にもう矢を向けぬキュービッド

尼崎市 軸丸勝巳

少子化が消す思い出の遊園地
朝の川空氣一人で吸う散歩
大根に出身地聞く市場籠

尼崎市 山田耕治

あの年のあの日の桜思いおり
車椅子桜トンネル通り抜け
孫去んで風船少しづつしほみ

伊丹市 延寿庵野鶴

ハードルを下げて明日の策を練る
ファイナルアンサー時が答えを追っかける
キリトリ線けじめをつけて妻と生き

川西市 井本清山

新駅と団地が生まれ消えた山
山頂がやっと見えても遠い坂
夏バテの予防に早寝して昼寝

神戸市 船津とみ子

生きている命バンザイ七十七
脳溢血を病んだ治った娘と話す
死ぬもんか百歳歳を目標に

神戸市 山口光久

満ち潮になるまで隅で耐えている
澄んだ目のあなたに嘘はつけません
妻の呪文 真綿のように効いてくる

篠山市 谷 田 多美子

生駒市 小 西 稔

年一度宇宙を跳ねる鯉のぼり

五十二歳の亡父の遺影に喜寿供え

五月晴れ布団を高く高く干す

三田市 田 中 章 子

四季のある国の恵みを感謝する

遠慮なく庭をのぞいて犬散歩

デパートの大半占める婦人服

三田市 辻 開 子

趣味の道けられられて奮起する

連休が明けて二人の朝寝坊

孫生まれ祖母の宝がひとつ増え

姫路市 服 部 一 典

いやはやと申し訳ない顔で詫び

親切が労りであった午後うつ

茶柱が立たなくなった朝のパン

奈良県 江 波 正 純

衣替えシコ踏みなおすダイエット

ちよっぴりのいいかげんさが潤滑油

トラ勝って一人祝杯あげて寝る

生駒市 飛 永 ふりこ

緑風に乗って一から出なおそう

オシャレ度をプラスしているいい笑顔

何もかも忘れ夕焼け一人じめ

メール読むただちに返事新時代

人生は人のところを読む努力

今の世は黒でも白と押しつける

和歌山県 辻 内 次 根

新緑の晴れているから開く窓

逃げそうにするから影を踏んでいる

他人の非とがめる時の鏡の目

和歌山県 森 下 順 子

てっぺんで天向いて咲く桐の花

ありあわせとも気付かれぬ五目めし

五感みな生きてよろこぶ若葉風

和歌山県 今 一 歩

絵手紙に旬の食材教えられ

他人の身になつて欲しいと泥拭う

鉛筆にたしなめられて書き直し

和歌山県 前 岡 健三郎

ペイオフも他人の事と無関心

W杯期待と不安フリーガン

不況でも成田へどっと人の群れ

和歌山県 宮 本 三喜夫

お母様ちよっと逝くの早くない

かあさんがまだ使ってるラジオです

人間は愚かな者よ欲絡み

和歌山市 永廣昇太郎

円満な人と言われて主義がない
優しさを家族に貰う傘寿坂
見る人に星は冷たく温かく

鳥取県 河本晴子

花を替え櫛を替えて御命日
つまずいた足が年齢知れと言う
やさしさを揺れる新緑から貰う

鳥取県 岩崎和子

一人旅杵をはずして空をとぶ
絶唱の河島英五胸に棲む
鴉鳴くなぜか不安の風となる

鳥取県 竹信照彦

近頃は二次会もある披露宴
電線がコイの邪魔する初節句
あの人がやっぱり議員さんですか

鳥取県 竹森富久江

不用意に靡くと旗も嫌われる
時流れタイムスリップする画廊
褪せてなお案じてばかり旗を振る

鳥取県 橋谷静江

つまずいた石をも一度確かめる
お土産は一度仏壇経由する
お隣へ素敵な人が越してきた

鳥取県 松川行男

人間に生まれたら銭いるらしい
風がきたさあ鯉のぼり元氣出す
鯉のぼりひねもす飲んだ初節句

鳥取県 山下節子

宇宙という器の中にあるわたし
悲しみを笑いとばして元氣だす
腹の底浅いところはまだ白い

倉吉市 大下智子

降る月に叱ることなど皆忘れ
味噌汁の味は確か永田町
平和だな夫の麩を聞いている

倉吉市 西脇日出子

何時もの客箒を立てて見たけれど
立ち話子供エプロン引き寄せる
葉桜に実を託しおり花吹雪

倉吉市 前田喜美子

道しるべかすかに灯す母の愛
麦わらで祖母の手解きホタル籠
肩の荷を何時おろすだろ母一人

鳥取市 河田のり代

刈って行く野草を食べた過去がある
金の実るルート見つけて苦を背負う
朧月語った亡母の年を越す

鳥取市 近藤 秋星

神さまがまだ生きさせてくれている

野菜畑茄子の紫鮮やかに

思い出の糸をたぐれば君が居る

鳥取市 田中 瞳子

絶景を窓の向こうにもっている

傘たたむ仕草絵になる妻で居る

カーネーションおすそ分けする果報者

鳥取市 谷岡 清子

かすがいの絆子供が締めてくれ

身のほどで暮せば風も温うなる

底辺に笑い袋の花咲かす

鳥取市 福島 庸二

夢の中遠い世界を手繰り寄せ

生活がルーズになった文明化

前向きな志向で心軽くなる

鳥取市 宮脇 道子

海の歌ゆとりの風に乘る孤独

診察室可愛い名前が吸い込まれ

覚悟して山河にかえる準備する

鳥取市 山宮 愛恵

今日は雨 好きな花瓶にすぎな花

あったかい余韻残して客が去る

亡夫の徳賈い合掌するばかり

忘却の陰に一輪紅椿

明日のこと判らないから夢がある

老いてなお お洒落心を捨てないで

鳥取市 山口 千代子

もぎたての梨へ喉から手がのびる

ティータイム脳を洗ったレモン汁

添い寝から静かに抜けるタイミンゲ

米子市 小塩 智加恵

よく見える眼鏡はずして鏡見る

庭の花呼称してます惚け防止

花柄を着たら背筋がのびてきた

鳥根県 持田 多輝子

青葉風湯の香にむせぶ浴衣

憂き事も読書でいやす老いの部屋

横文字のカルテに命預けてる

鳥根県 福岡 博利

介護保険納めるだけの元気です

角と香車やっぱり角で突っ走る

絡むから尻尾は切ってしまいたい

鳥根県 毛利 幸

うきうきと気持ちしが空を散歩する

人生を鈍行列車で走ってる

人生を走り続けて六十路坂

安来市 原 煩惱児

沽券という魔物が肩を怒らせる

煩惱に迷わず潜る寺の門

永田町右も左も春風

出雲市 梅 ミツエ

鯉のぼり大きな夢をなびかせる

夕暮れの雨しゅんぼりとさびしそう

風が舞う紫すみれ踊り出す

出雲市 荒木英子

春うらら余生思つて寺巡り

花散つて負けずに庭の芝桜

花冷えに衣重ねて趣味の道

出雲市 川島和歌子

急ぐほどじを踏んでる慌て者

思い切り流れを変えて策をねる

気を抜くと春風そつとくしゃみする

松江市 松浦登志子

赤色の鉛筆握り降りた駅

わたくしの個性がやつと光りだす

紫の季節が好きな揚羽蝶

松江市 松本知恵子

大山の裾野でこころ休ませる

雨の夜は雨に蛙の歌も良し

一匹の金魚に貰う愛もある

岡山市 土居ひでの

故郷の宿で憩いの湯が溢れ

六法も聖書もみんな生きる杖

納得の話が出来る父の貨車

岡山市 大森純子

標本にされる定めにあった蝶

成績はどうあろうともマイペース

価値観は財布のひもが知っている

岡山市 清水金太郎

ささやかな願い鳥居に石がのり

大学院出て職安の道をきき

笑い声大きな家から聞えない

倉敷市 撰 喜子

連休は我慢年金暮しです

姑の介護に白髪背もまがり

子の駄頑固親父もかぶと脱ぐ

広島県 福島万年

朦朧と歩く仏にお接待

遍路道歩き歩いて風になる

軽トラが歩き遍路に声かける

因島市 村上和輝

梅雨晴れ間ひととき妻のうつ晴れる

片肌を脱いだ女の自己主帳

リストラの男ネクタイしめて夏

府中市 岩 本 雅 代

五月晴れひらりひらひら蝶の恋

強弁を吐いてマドンナ崩れ落ち

同じ事何度も聞かれテストされ

北九州市 岡 田 幸 生

肝心な時に隠れて出ぬ記憶

リストラのニュースへ釣書戻される

古傷を時々妻に掘り出され

唐津市 岩 崎 實

九条の外濠埋めていくはなし

過去未来見通す力 刃研ぐ

あたりまえそこに真理の生卵

宜野湾市 杉 谷 一 栄

大会にはやるも足の弱さ知る

窓遠く輝く光パチンコ屋

カーネーション真心いっぱい包み来る

高知県 近 森 功

百歳で取れる保険に加入する

手に汗を握りなだめる腹の虫

立話いつか実が入り腰をすえ

高知県 百 田 幸

方針は嫁に任せている無口

良い余生今を大事に生きてます

思うことズバズバ言える若さかな

高知県 桑 名 孝 雄

巻紙に候文で決めてやる

自覚など思いもよらぬ濡れ落葉

賛美歌と櫛しきびで老いの義理

高知県 貞 岡 佐 紀 子

スローライフ今の私に良いリズム

文旦の授粉私は蝶になる

無農薬 虫と共生里の味

高知県 小 川 てるみ

闘病の長さを詫びる千羽鶴

年老いて自慢話はやめにする

充電をするかのように妻の旅

南国市 小 原 圭 二

宝くじすぐ品切れになる不況

惚けた振りしてた気がする亡母の笑み

何もかもやられて駄目な外務省

香川県 松 村 輝 夫

影法師同い年です追って来る

賞味期限書き替えている我が命

貧乏くじ引くと他人が嬉しそう

今治市 渡 邊 伊 津 志

満ちてくる波紋のような言葉舐め

常識を背負う言葉は毒を呑み

人間を失ってから誤差が増え

(中村好恵・古手川光・根岸方子3氏の句は51ページに掲載しています)

麻生路郎物語

(7)

—新短歌運動の「雪」発刊—

東 野 大 八

結婚した翌年の大正三年第一次世界大戦が勃発したので、路郎は東京を引揚げ大阪中央電信局の外国電報の検閲係になった。だが、この職も戦争終結とともに終りを告げ、大正四年、大阪市北区上福島中一丁目で素人臭い古本屋の店を開いた。店の名は葵書店。

—南無葵 俗名小島善右衛門 青 明

これは六厘坊に傾倒した藤村青明の六厘坊追悼句の一句だが、路郎も六厘坊の家紋の「葵」を店名としたようだ。そして大正四年八月路郎生涯の川柳生活にとつては、最初の重要な関門ともいふべき「雪」を刊行したのである。年来の盟友川上日車は書いている。

「古川柳には古川柳独特の味合いと響きを持つてゐる。私たちは久しくそれに浸つて川柳作家としての揺籃期を過した。だが少年期はやがて迎える青年期の前提である。少年期には「紅い」と映つたもの、それは伝承的「紅い」であつて、自己の発見した「紅い」ではなかつた。ここに少年期と青年期との間に

一つの曲り角がある。その曲り角を意識にためず一直線に歩みつづけるのも、透徹した一つの道ではあるが、自己に厳しい執着をもつ者にはそれができない。そこに青年期の浮標が横たわる。路郎と私が手を携えて「雪」を発行したのは、まさにこの曲り角に立つた時であつた。

くろくろと道頓堀の水流る 路 郎

行く末はどうあらうとも火の如し 〃

こうして路郎の眼は、つきつきと人生のあらゆる角度にひろがつていった。

道頓堀の水の流れは誰の眼にも映る。だがその印影は、ただ事象そのものに過ぎない。

いまここに示した路郎の句には、水の流れに秘められた人生の謎を究明しようとする自己の意識がもたれる。この意識こそは文字の枠外にあつて、句そのものを深く味う者のみ与えられた捨棄の恩沢である。事象を意識の上深く捉えられるか、捉えないかは自己認識の深淺によつて定まる。これが作家として起

つ場合、最も重要なくさびだ。

かくて自己の内攻的推移に倅しつつ、路郎と私とは「雪」編集に心を砕き、異なる二人を一人格に結晶せしめたのである。これが「雪」創刊の動脈であつた（川柳雑誌S32・7占

橋特集号「雪の項」路郎と私 川上日車

「雪」創刊号は本誌と同じサイズの上質ア

ート紙八頁。日車が句四十二句と六厘坊書簡

（日車宛金剛山登山の記）六厘坊はこの登山

の無理で発病、死因を作つたらしい）このほか日車作のコントが二頁、まさに日車の完全

な独立舞台で、まるで日車特集号だ。

同誌一頁は藤村青明の急死追悼号である。

天才か攫徒か瞳の落ちつかず 日 車

一杯の冷水捧ぐるものもなし 〃

浴衣掛一すいてくる旅なりし 路 郎

絶命ときに落日は瞬けり 〃

タンクステンの破裂か青明の死か 〃

同誌三号には、はじめて路郎が巻頭に十五

句を発表している。店頭より事務室へ〃

晴 友来れば又あきんどとなり 路 郎

他人ことにあらず売れぬ日の続くとき 〃

S O F A が欲しいと妻のうら若く 〃

妻や待たぬ靴音を高めんか 〃

この号から「雪」もがぜん生彩を帯び、誌

面も一種のけんらんさを帯びはじめた。そし

て「雪同人」の顔ぶれが裏表紙に載りはじめ

る。それによれば伊藤観魚・小穴隆一・中谷

義一郎・信時潔・加藤静児・塩谷鶴平・宮林董哉・松村鬼史・藤原遊魚・小出楯重・牧野虎雄・兼崎地橙孫・石浜純太郎・雪幹事・斎藤松窓・麻生路郎・川上日車

画家・俳人・歌人・作家・大学教授など往時A級の学識者文化人を一堂にあつめ、學術隨想論文スケッチと多彩豪華な誌面構成で、同誌十二号には「榊屋おせん」特集号を出し吉井勇・水島爾保布・喜多村緑郎・岡田八千代が寄稿している。本紙の絶頂期である。

「路郎君、君は飛行機の着陸式なり。白秋に触れ、浪六を解し、長唄を知る。相撲に猛かりしは昔日の高商時代なり。今はダブルカラーに替えチョッキ、しかして五匁のゴールド・チェーンは新たに購求せられたるなり、三分の粗髯を試みに一時間写真を撮る。聞説近く洋行の準備なり。旅行免状は正に君の胸間に収められてあり」(「番傘」三号「番傘の人々」TKL生)

これが大正初期の路郎のハイカラスタイルで、いかにも「雪」幹事にも相応しかろう。路郎は若年から一種のスタイリスト(心身ともに)であつたことが窺いとれよう。

さて、「雪」刊行に当って注目すべき傾向として見る人を捉える事は、路郎も日車も川柳という呼称を一切用いず「新短歌」の字句をもつてし「雪」全刊十九冊をすべてこれで

押し通している点である。

「八月一日(大正四年)日車とともに「雪」を刊行し、新しい傾向の句にひたむきに押し進んだ。それがため「新傾向派」と呼ばれ、既成派からは嫌悪された」(山崎楼メモ)

そうした新傾向の句とはどのようなものか――

―膝に足のせて一人の力なる 日車

―果太鼓今や鰻を裂んとす 路郎

―葬ひの雑音街の底よりす 路郎

―微風の吹くまゝ光りに歩む 路郎

「雪」八号より

「路郎と日車が「新短歌」と言うて十七字型の短歌風のものを作つて発刊したのが「雪」でしたが、同人にはなりたくともなれませんでした。各方面のエリートを選んでいたらからです。発表の作品も多彩多様でバラエティに富んだ総合雑誌でした」(渡乃書簡)

そういえば「雪」には、のちの画壇の重鎮牧野虎雄や小出楯重がカットやスケッチを描きまくり伊藤観魚が独特のタッチで絶妙の筆を揮い、吉井勇の一頁組の短歌もある。

ところで筆者が注目したいのは、塩谷鶴平と宮林董哉の「雪」紙上における活躍ぶりである。なぜ、この二人は雪同人なのか。

鶴平は河東碧梧桐門下の重鎮である。虚子の「守旧派」に抗拒する碧の「新傾向派」を支えたのは実に鶴平である。大正四年三月に発刊された碧主宰の「海紅」は鶴平の全面

的な経済的援助で出た。編集は滝井折柴(孝作)中塚一碧楼ら碧門のそうそうたる顔がずらりと並ぶ。鶴平は碧の右腕と目されていたという。鶴平は岐阜市郊外江崎村の大地主で、政治に関係して家を潰されるより俳句の方が家は安泰というので、家人がむしろ積極的に俳句を奨めた。彼は若年から新聞日本の碧俳壇に傾倒していた。本名塩谷熊蔵。

鶴平は伊藤観魚と同じ明治十年生れで、碧門を通じて親交を深めた。鶴平は崇拜する子規を観魚の兄に伴われ伊予松山の子規堂に訪れたりしている。観魚は名古屋市の料亭金直の二男で、俳句に熱中して義絶になりかけた程で、雪同人は大阪の藤原遊魚の紹介による。観魚がまた鶴平を誘った。鶴平は「海紅」のパトロンであると同時に「雪」のパトロンでもあつたらしい。

宮林董哉は長野県生れで本名弥吉(M20生れ)若年から思想的なことで特高につきまといわれ、職業も転々とし大正三年碧門の縁で鶴平を頼つて岐阜に来住し、鶴平経営の梨畑の人夫で三年を過した。「雪」終刊号(T6・2)は、牧野虎雄の二頁のクロッキート、あとは董哉が俳文二頁と、作句五十句で埋めわずか八頁の雪終刊号は消えていくのである。誌数十九冊の終刊である。路郎と日車もここでは完全に筆を絶つている。

路郎が川柳を新短歌と銘打ち、川柳における新傾向を旨指したのは、鶴平をパイプに碧梧桐を信奉したのだとの説があるが、誤りである。現に路郎は雪誌上で碧の講演に反発し、碧の俳壇制圧の態度を激しく非難したあと、彼自身の新短歌観を次の様に述べる。

「今後の自分とは、近も自己の作品の上には真と新との尺度を用い、自己の芸術と自己の生活に真摯でありたい。(中略) 少くとも自分自身を欺く様な芸術に生きていこうとは思わない。この意味において新短歌は要するに自分の日常生活の呼吸そのものであり、更に自分の信仰が把握する処の祈祷である」(雪)

この主張は子規が明治三十一年短歌革新に手を初めた頃の主張を背景としている。路郎の雪における新短歌運動は、子規に焦点を定めていたことは明らかだ。(S32古稀特集号) 路郎が大正四年三月「番傘」同人を辞退し、その五ヵ月後に「雪」を出している。

「彼が番傘を去ったのは、よしの夫人との結婚問題が動機となったように噂する人もあるが(筆者注「本連載」(4)参照) それはたまたま契機となったものであって、むしろ創刊当時に参加し得なかった不満をはじめとして、編集に介入し得なかったもどかしさや、所謂学校出としての孤独の淋しさ等が累積した結果と想像される。かくして昨日の親

友は今日のライバルとなり互いに関西柳界への翼を伸ばして行く運命の人となったのである」(「ふあす」と「五〇七号」路郎の番傘時代、堀口堯久)

このような見方が往時も現在も一般的な観測のようだが、山雨楼メモにはきわめて重大な一項が以下のように記されている。

「雪は第四巻第一号(T6・2)で廃刊した。半歳で一巻で一九冊を正味出したわけだが、この廃刊の理由は文芸的日刊新聞を計画するために廃したもので、日刊新聞はついに諸種の都合により出なかった」

堯人の観測によると、水府が路郎に相談なく「番傘」を発刊したことが、結果的には路郎の「雪」をひき出した、といったごく単純な観測のようにもみられる。だが実はもっと底の深いものが路郎側に潜在していたということが言えると思う。

筆者にいわせれば、堯人の指摘する路郎と水府の「ライバル」意識は、新短歌志向の路郎と、伝統川柳志向の水府の、作句上のモチーフの異和感に伏在する、と断定したいのである。番傘誌上に路郎が執筆した「川柳講座」を水府が鋭く批判している。路郎はここにおいて番傘同人を下りざるを得ないと感得した、少くともそういうことが考えられるのである。

ともあれ文芸的日刊新聞の発行という途方もない夢は、二十八歳の路郎らしい発想だが、

このニュアンスは後年の「川柳雑誌」の発行へとつづがれたことはたしかである。

閑話休題、路郎を雪時代に還えそう。

「雪」が勢いのよい時点では、路郎は翻案もの、小説、散文を手がけ多彩な才能ぶりをみせてはいるが、率直にいって稚拙そのもので再録に堪えるものはない。その中で、雪終刊の前夜の十八冊目に、不死鳥の筆名で「包丁と大根と葱」という注目すべきエッセイがある。

「包丁がスカッスカッと大根を切った。大根は別に痛そうな顔をしなかった。かくあるべきを予想していたように。(中略) 葱は悲しそうに包丁をみた。もう一日の命乞いをしたが包丁は耳をかさなかった。青い血が止度もなく流れて葱は悪臭を放った。ばかな奴だ、これが俺の日々の仕事ではないか。包丁は寂しくわらった。くる日もくる日も惨劇は続いた。いつしか包丁の腕が鈍ってきた。一寸した事にも疲れを感じるようになった。俺もとうとう錆のくる日が近づいた。永遠のために俺はどうしたらよいのであろう」

新短歌運動に絶望するそれは路郎のうめきともいえるのではないか。切字の多い路郎作品が同じ誌面につきぎのように掲げられている。

――むらいのしづしづといくひなたかな

――大根さげて婢のもどるひなたかな

――こうがいの銀はさびしくひかりけり

波多野五楽庵選

和歌山市 福井 桂香
れんげ草五月の風を掴まえに

真夜中の花壇にまぎれ込む尻尾
くちなしの雨と別れてきた微熱

和歌山市 川上 大輪
懇々と私を諭すパンの耳

疑問符が柩の中で溶けはじめ
三度目の桜私はまだ真冬、

弘前市 高瀬 霜石
雪国に生まれて赤い主語を持つ

天寿全う父の達磨に目を入れる
和歌山市 木本 朱夏

春の泥覚悟で愛は奪うべし
影踏みの影がよろめく薔薇の昼

亡母が来て止まった春の長はなし
 半分の視野で飛んでる赤い蝶

上を向いて歩こう私へ応援歌
有難いなあ颯爽と歩けます

鍵穴から洩れていたのはプライバシー
救し難きをゆるして人間取り戻す

弘前市 相馬 銀波
各論のジャブ総論の武器でした
三合の酔いが地金を露呈させ

東京都 播本 充子
今にして想えばあれがラブレター
一つずつくれば容易な波なのに

燃えやすい紙が縁切寺にある
川崎市 和泉あかり
王手飛車あなを楽にしてあげる

吹田市 山本希久子
公園のはずれに咲いて見過ごされ
ちよつと椿はずして生きてみませんか

鳥取市 岸本 宏章
うしろ指さされた背が疼きたす
争わぬつもりの爪を丸く切る

春夏秋冬待ち呆けには馴れている
七転びして私が毀れたす

横濱市 川島 良子
内部告発次はアナタを狙い撃ち
東大の門をくぐつていく眼鏡

三高の沽券邪魔してまだ独り
小さい善人間捨てたものでない

砂川市 大橋 政良

鳥取市 徳田ひろこ
八尾市 高橋 夕花

すばらしい笛だと自負をしています
 綾部市 藤田 芳郎
 言い訳は柩の蓋の裏に書く

出来過ぎの人生でしたありがとう

蛇行しています覚悟が揺れてます
逗子市 神戸みず帆

ふしぶしが痛み話題にこと欠かぬ

すぐ口を割るきつと善人だらう
海南市 谷口 義男

矢車が歌う五月の絵の中で

瘦せ蚯蚓抜いた草から離れない
弘前市 齋藤 岳

りんご樹の花を飛び交う飛蚊症
 尼崎市
 内田美也子

弘前市 中山 雅城
基会所で言い訳してる野暮な石

黒石市 相馬 一花
平凡な顔で非凡な化粧する

三田市 北野 哲男
三界に家あり里に母一人

倉敷市 井上 富子
ハ長調ばかり我が家のフライパン

和歌山市 山根めぐみ
泣きながら敵討つ日を考える

大阪市 前 たもつ
自慢話たいがい後ろ向いている

札幌市 三浦 強一
終焉は桜吹雪の中がいい

和歌山市 楠見 章子
切り取れば絵になる街で人恋し

西宮市 牧測 富喜子
自己保身白い手袋見せしめよう

寝屋川市 江口 度
ほつぺたをひっぱたかれたのが答

海田市 三宅 保州
何人の楯担いだ花手桶

松江市 三島 浜丘
右往左往した足跡がまだ消えぬ

八尾市 井尻 民
調子よくまた会いましょう通り雨

弘前市 福士 慕情
自分史の最後白紙のままだろう

和歌山市 榎原 公子
アスパラが折れて第一反抗期

高槻市 乙倉 武史
も一人の私が影で糸を引く

米子市 政岡日枝子
枠組みが緩くて倅せが逃げる

尼崎市 春城 年代
足を痛めて御身大事に生きている

吹田市 早川 棲世
お辞儀十ぺん名刺一枚置いて出る

和歌山市 青枝 鉄治
元部下が上司となつて来る輪廻

倉敷市 小野 克枝
さりげなく優しさ贈りまだ他人

富田林市 大橋 鐘造
四面楚歌 一人芝居が巧くなる

枚方市 海老池 洋
戻れない道をどんどんきた夕日

高知県 桑名 孝雄
遺産などないがお前が遺産だよ

岡山県 矢内寿恵子
生き上手忘れ上手になつて老い

大阪市 神夏磯典子
女です鏡の恐さ知っている

八尾市 村上ミツ子
うっかりと相槌うつたばつかりに

大阪市 奥村 五月
残り火に老後の怖い風が吹く

大和高田市 鍛原 千里
うらぶれた町で生まれた火の女

鳥取県 上田 俊路
許そつと決めて階段下りてくる

河内長野市 水谷 正子
忘却がいくつも秘めてある喪服

米子市 白根 ふみ
善人の仮面みどりの風おもしろ

四条畷市 吉岡 修
鉛筆を折つて二章をあきらめる

海田市 堂上 泰子
春泥のような慕情に絡まれる

横浜市 三村八重子
疑問符をひきずり人の列につく

西宮市 門谷たず子
影だけがみんな許してついて来る

寝屋川市 籠島 恵子
折り返し点もはるかになつてくる

松原市 小池しげお
嫌な顔していなかった地蔵さま

大阪府 澤田 和重
潮時を雨が教える立ち話

泉佐野市 稲葉 洋
順調に消化してます老境譜

香川県 川崎ひかり
両の手に紆余曲折の傷のあと

倉吉市 牧野 芳光
色褪せてきたなと思ふ赤い糸

富山市 舟渡 杏花
ひよつとこの裏の鳴咽を聞き洩らす

横浜市 田中 笑子
金婚を迎えたあととおまけです

唐津市 久保 正剣
ずぶ濡れになりたい時もある女

鳥取県 土橋はるお
救わずにおれぬと弥陀がおつしやつた

愛媛県 花岡 順子

京都府 丹後屋 肇
笛の音へ踊り続けているピエロ

和歌山県 中後 清史
風塵が注ぐ疎水の花筏

藤井寺市 太田扶美代
万策が尽き一本の薬つかむ

堺市 和田つづや
千羽目の鶴と一緒に旅に出る

川崎市 小林久美子
少々のワインが妻を蝶にする

鳥取県 土橋 螢
また探った花盗人は哀しいね

西宮市 奥田みつ子
なぜだろう午前五時には目が覚める

唐津市 田口 虹汀
正直はあまり良くないことらしい

唐津市 仁部 四郎
今日もまた惨事の花にあう不幸

羽曳野市 徳山みつこ
仲人は省き衣裳は三度替え

大阪市 浦田 綏子
力ください菠薐草を食べている

和歌山県 桜井 千秀
帝王学などと倅をこき使い

西宮市 西口いわゑ
消しゴムに心の奥を覗かれる

風みどり行くあてもなく町に出る

岡山県 山本 玉恵
待つ人も待たるる人も風を行く

京都府 都倉 求芽
近ごろは一人のキップしか買わぬ

寝屋川市 森 茜
室生寺のもみじが栞る蔵書なり

鳥取市 夏目 一粋
日めくりの終の一枚めくれな

鳥取県 西沖 彰雄
見栄と意地捨てて気楽に生きてます

和歌山県 吉村さち子
出来過ぎた話に裏が透いて見え

鳥取県 岩崎みさ江
一病を持って情が深くなる

和歌山県 古久保和子
神様の死角で右の肩が痛む

和歌山県 福本 英子
突き当る壁が邪魔して越えられぬ

鳥取県 池澤 大鯨
途中下車二度と乗る気はないけれど

アルゼンチン 松井美稚子
初対面モチーフ要らぬ毒舌家

大阪市 川原 章久
家のローン済んで実印嬉しそ

横浜市 吉田 裕峰
春なのに抵抗力が萎えてます

交野市 田岡 九好
蛇自身別に悪気はありません

横浜市 石原 三郎
面白くない堅物に妻は馴れ

松江市 津川 紫晃
火がついた女の糸が絡み合う

横浜市 近藤 道子
意地を捨てくると曲がることにする

箕面市 出口セツ子
春淋しどこにもあなた居ないから

出雲市 園山多賀子
二枚舌いいえ辛酸嘗めた舌

香芝市 大内 朝子
人情にもろい女で流される

鳥取市 武田 帆雀
地目地歩 一步も引かぬ杭を打つ

米子市 光井 玲子
窓ぎわの椅子にも父の物語

愛媛県 中居 善信
どうしても動かぬ石を一つ抱く

和歌山県 武本 碧
一休みしてたらすわる椅子がない

寝屋川市 岸野あやめ
鈍いのを大人物と誤解され

奈良市 乾 春雄
切り札を一枚持っていた油断

香川県 松村 輝夫
九分九厘勝つと信じた大誤算

八尾市 宮崎シマ子
相合傘男の半分濡れながら

横浜市 山梨 雅子
どこことなく父親に似る娘の相手

鳥取市 前田 一枝
もうこれ以上負かりませんと両手振る

父が遺して

いつてくれたもの

古藤 愛子

本社相談役 東野大八先生が亡くなられて、7月18日に一周忌を迎えます。

あらためて先生を偲び、ご冥福をお祈りしたいと思い、ご息女の古藤愛子さんに先生の思い出を執筆いただきました。

編集 部

あれ以来、父に会っていないのがもう何ヶ月経つたろうか。すれ違う人の中に、喫茶店の中に父の姿を探し求めている自分がいる。

私は三人姉妹の長女に生まれ五十数年を父と共に暮らした。父の無類のコーヒー好きは新聞社時代からだから、ゆうに六十年以上になるだろうか。二人で毎日のように喫茶店に出掛けたものだが、気の早い父は私が飲み終るか終らない内にもう席を立とうとしてい

た。早朝から物書きをしている父にはこのコーヒーが脳にスッキリ働くらしい。

父の人生は想像を越える波乱万丈の八十七年であった。「歳月は戸隙を過ぎる白駒のごとく……色々あつたけど面白い人生だったよ愛子」と言う声が今にも聞こえてきそう。

私が小学校低学年の頃だったと思う、押入を開けると何かぶら下っている物体があった。よく見るとそれは父の義手であり幼心に不気味に映った。しかし、体に合わないのか義手はほとんど使わずに、押入の中にしまわれたままであった。その代わりに背広の空っぽの袖の中は、タオルか新聞紙が丸めて入れであった。

片腕の父に抱かれた記憶なく 愛子

隻手となつて帰還後の新聞社勤務時代には、早朝から夜遅くまでどんな盛夏の油照りの日も、背広を着て駅までの悪路をボンコツ自転車に乗り岐阜まで通勤した。負けず嫌いの性格だったから、大工仕事もよくやつていた。ノコやカナヅチを使って本箱や椅子を作ったり、修理したりして家族を驚かした。自分の体のハンディーを患痴つた事もなく、

楽しんでやっていた。私達子供は父が片腕だという事を余り意識せず育つたように思う。そう思わせない所が父の偉い所でもあった。

酒好きの父の楽しみは晩酌で機嫌がいいと軍隊時代の話がお決まりで、川柳あれこれ四方山話にも花が咲き、いつもにぎやかな食卓だった。

たった一度だけ左腕を切断した時の話をしてくれシヨクを受けた思い出がある。父のしてくれた話はこうだった。

昭和二十年四月三日夜半、野戦病院の牛小屋で、アセチレンの青い灯に囲まれたワラ床の上で、麻酔なしでささらになった血まみれの上膊はノコギリで切断された。その瞬間氣絶してしまつた。

故郷大洲へ帰つて生家の前に立つた時、ふいに白髪の母が出て来て頭のテッペンから足の先まで眺め、フラッと下がった軍服の片袖を見るなり

「お前は義男(大八先生の本名、編集部註)だな、なぜそんな姿になったんや。ここを出す時はちゃんと五体揃えて出したんや。失くなつた片方の手を東条に還して貰つて来い。」格子戸をむすずつかんでそう叫んだ氣強い寅年の母は、涙を滝のようにほとびらかせ

て号泣した。父は泣いた母親をこの時初めて見たそうである。

私はこの話を聞きしばらく何も言う事が出来なかった。野戦病院で左腕を切断してから五十年以上経つというのに、冷え込む冬の寒い日など切り株（父はそう言っていた）が疼いて、顔をゆがめて痛みをこらえている時があった。

私の毎日の日課としてお灸を肩、腰、足に二十分ほどしていたが、肩先からヒヨイと出した左腕の切り株は枯木のようにやせて細くなっていた。それを見た時、「本当に父には長い間苦勞をかけたなあ、筆一本で子供三人育て上げてくれた。」と言いつくせないほどの恩義を感じ、細い肩が愛おしく、涙をこらえるのが精一杯であった。母も父を支え和裁、編物と夜なべをしながら家計を助けてくれた。両親には頭の下がる思いだ。

豪放磊落、齒に衣着せず短気で早トチリであつたけど、アツサリしてユーモアがあり、ユニークな父であつた。妹二人は母に似て美形なのに、私は父に似て損したなあと思つて思つていたが、今は父に似ていて得した気分である。

一番の形見となつた父親似

愛子

晩年は病気のせいもあつて徐々に体が弱つてきてはいたが、亡くなる一ヶ月前の六月中旬頃まで原稿書きをし、そのなめらかなペンの動きが止まる事はなく、父は終生現役であつた。確かな筆力、知識の深さ、驚くべき記憶力と人脈の広さ、強靱な精神力を持った父を誇りに思い、その生き様から学ぶ事は多い。父の遺書には「八重子には本当に筆舌に尽くし難いお世話を受けた。冥府の果てより幾久しく深謝の誠を贈りたい。」とあり、苦勞を共にしてきた母への思いが書かれてあつた。父の死後、書庫には雑文や連載物が沢山遺されており、よくこれだけの量を書いたものだ、父の凄さを再認識し感心した。そして父の書き遺したものを無駄にはしていないと思つた事だった。

父の著の一冊に『人間彩影記』があるが、その中で父はこんな事を書いている。「私がいよいよ臨終となりその生物としての主体性を喪失する時、その昏迷の暗夜の底に浮かぶのは、きっと川柳の句の幾つかに違いない」その時父の脳裏には果してどんな句が往來したであらうか。

地平線 兵衣のおれが駆けていく 大八

10周年記念 和歌山県川柳大会

とき 9月8日(日)午前11時開場・午後1時開会
ところ 和歌山ビッグ愛 1F大ホール
和歌山市手平2-1-12

TEL 073-435-5234

当日参加費 1500円(軽食・発表誌等)

事前投句 課題「十」 牛尾 緑良選

(当日出句) 出句締切り 12時30分

「手紙」 大炭 暁星選

「福」 馬場 明子選

「丸い」 川上 大輪選

「流れる」 木本 朱夏選

「組む」 森中恵美子選

「回る」 橘高 薫風選

賞 県知事賞・市長賞・全日本川柳協会会長賞他

☆各題 2句(未発表作品に限る)

☆事前投句・課題「十」締め切り8月15日必着

☆事前投句料 千円(当日欠席の方、発表誌・送料含む)

(現金書留または定額小切、郵便切手は代用できません)

☆事前投句は専用製書または官製葉書に住

所・名前(雅号)・当日参加、欠席、懇

親宴出欠の有無をご記入ください

◎大会終了後、懇親宴を行います、会費3500円

◎投句先・お問い合わせ先

〒692和歌山市六十合1184-114

川上大輪 FAX TEL 073-462-7229

主催 和歌山県川柳協会

特集

私の健康法

(順不同)

私の健康づくり

園山 多賀子

この頃は何処の会に出ても、たいがい長老と言われる歳になりました。よくぞこれまで生きて来られたものと思います。健康で長生き出来るのは幸甚なことです。十年來続けている布団の上での体操をご紹介します。

まず布団の上で仰臥の姿勢をとり、両膝を両手で抱え、胸の辺りまで押し上げ運動を百回。次に曲げた膝を今度は左右横に倒しながら、それに合わせて首は反対に交差するように動かすことこれも百回。

次に足を真つ直ぐ伸ばし、両足を揃えて腰から下部に足の指先も同時に屈伸運動を続けて百回。続いて腹部に移り臍を中心に時計の針の右回りマッサージ百回。次に臍を中心に

上下左右のツボを十数える間指圧する。次は顔の方に上がり鼻筋から鼻の下のマッサージ。続いて耳たぶの下を人差し指で圧迫、両手で耳たぶの上を押えて刺激するマッサージ。

最後に両掌で耳たぶを押さえ、左右の人差し指を組み合わせ、後頭部の首の付け根を圧迫すること百回。以上で上部を終り脚部に戻り、立て膝をして片方の土踏まずで他方のふくらはぎを上下にマッサージ。そして五本の指の間に五本の手の指を組み合わせ、グルグルと回しますと、土踏まずの辺りに快感ある響きがあり、効果があるようです。

これはずっと以前に中国のマッサージ術だと友人から教わったものに、新聞やテレビ等から得た方法を自分なりに取り入れ、創作したパターンです。

朝早く目覚めた時ラジオを聞きながら、所要時間三十分位ですが、ラジオに聞き惚れて手が休んだりして延びることもよくあり、時

間にはこだわりません。風呂上がりにまた繰り返し都合朝夕二回となります。

また私は便秘症ですがこれも友人から聞いた漢方薬「センナ」を飲み続け、副作用もなく今日に至っております。皆様、騙されたと思つて試してみませんか。因みに私は大正元年生まれ、数えの九十一歳です。

要は良いと思つたことは継続する忍耐が必要で、趣味の川柳と同じことが言えると思います。尼縁之助先生が「川柳は出席すること。そして続けること。途中で壁に当たつても砕けない信念が大事だ」との教えを肝に銘じております。消極的なことは考えず今日一日を大事に興味に支えられているこの頃です。

快食快眠

くよくよしない

恒松 町紅

農家の三男に生まれ、数え年五歳で叔父夫婦へ養子縁組。そして養母三十三歳、養父四十二歳で他界。実兄十九歳、次兄三十三歳、先妻三十歳、他にも何人も若くして他界。それも男が短命だった家系に育つて、私が今年傘寿を迎え五体満足なのは、過去の親族系列の中でも数少ないという不思議な運命に、今日まで健康で生きてこられたのは、一体何だ

つたのか考えてみても分らない。

食べ物に好き嫌いなし、煙草は四十歳までに止めたが、毎日一合五勺の晩酌は欠かしたことがない。睡眠時間は八時間から九時間ぐつすり、夜中のトイレはたまに一回ぐらい。

早起きは苦手でジョギングなどしたこともない。昔は木刀の素振りを百回程度やったが三日坊主で終わった。手足を動かすのは脳の働きからだと思うから、脳を使うことは毎日やっているが、運動といえば時々ま畑へ出るくらい。それも一時間ほどしか続かずしばらく休憩、テレビの時代劇で脳を休める。

あまりよくよくしないから、気にかかったことでもすぐ忘れるが、これは忘れっぽいのかも知れない。強いて健康法といえ、これは女房のやっていることだが、三度の食事は在戦時代から今日まで朝、昼、晩きちんと勤めていたところと同じように几帳面にとっている。そして毎日冗談を言つては女房を笑わせている。またいつまでも心の底にストレスを溜めないことも健康法だと思う。これが難しいことで、本人の気付かぬうちに溜まってくるから気をつけないといけない。

町内会の会合などで、元気で参加している顔ぶれでは最高年齢である。いつまで動けるかわからないが、五体満足で皆さんと交友させて頂きたいと、神仙にお願いをしている毎

日である。

海草・小魚・生ジュース

田中正坊

生来の虚弱体質の私は、小学校では栄養内徴兵検査では第二乙種という弱兵であった。それが生き延びて満八十歳も間近になったのだから、「健康法」らしきものがあると思われても当然だろう。

私の常用薬については、以前に本誌に書いたし、いわゆる健康食品についても触れた。また、健康機器も何種類か買つて使つてみたが、効果が表れるまで長続きしなかったからこれについてはコメントしない。

もともと健康に最も大切なものは、清い空気と良い水だと思つてゐる。だが私の住む土地では到底望めないで、せめて性能のいい空気清浄機と浄水器を備えることとしてゐる。だとすると、食物ということとなるが、メニューとして海草と小魚と豆類が欠かせないだろう。海草はまず昆布だが、とろろ・おぼろ・塩昆布など、海苔は焼のり・味付のり・佃煮、そして若布とひじきも加えたい。

小魚は目刺・ちりめんじゃこ・いかなごなどがあり、豆類は枝豆・えんどう豆・そらま

めのほか、豆腐・納豆・厚揚げ・湯葉などの大豆製品が控えている。これらをバランスよく常用することを心掛けてゐる。

もう一つの決め手は、生ジュースである。まずリンゴをベースにし、季節に応じてパセリ・人参・キャベツ・トマトなどの野菜、オレンジ・蜜柑・グレープフルーツ・梨などの果物を二、三種類、ミキサーではなく、ジュースでしぼつてレモンの汁を加え、コップに一杯飲む。これをこ二十余年、毎朝、続けている。今のところ、何にも勝る健康法だと思つてゐる。

健康の秘訣は朝の生ジュース 正坊

ボケない小唄

中後清史

最近、知人の大正琴の先生から、松の木小唄の替え歌で「ボケない小唄」を頂き、面白いなと思ひましたので、ご紹介をして投稿に替えさせて頂きます。

ボケない小唄

一、なにもしないで ボンヤリと
テレビばかりを 見ていると
のんきなようでも 年をとり
十年はやく ボケますよ

二、仲間はずれで ただ一人

なにもやること ない人は
夢も希望も 逃げてゆき

三、酒も煙草も のまないで
唄も踊りも やらないで

人のアラなど さがす人
他人の三倍 ボケますよ

四、ゴルフ・カラオケ・ツリ・シヨウギ
趣味のない人 味もない

異性に関心 もたぬ人
友達ない人 ボケますよ

五、風邪を引かずに よく食べて
足腰きたえて 早寝して

頭つかって おしゃれして
根性もたなきや ボケますよ

六、年をとつても 白髪でも
頭禿けても 若い気で

恋を忘れた ヤボな人
色気出さなきや ボケますよ

中国の気功は、心身の鍛練法です。病は氣

からという通り、心構えが肝要です。

「まだともう巧く老後を使い分け」これ
は毎日新聞の地方柳壇で、秀句で抜けた私の
作品ですが、このまだの言葉の多用化に努め
ております。「年はいくつですか?」「もう七
十四です」となれば、語尾はアキマヘンワと

なります。「まだ七十四です」と言えば、ま
だまだこれからですよ。と続きます。くよく
よしたり、取越し苦労は止めて、大らかに
プラス志向で明日へ向かいましょう。氣持の
持ち方が、健康法の秘訣だと思っています。

体より心の健康

酒 井 一 壺

心と体の健康が互いに助け合つて健康が維
持されるのです。私自身今日まで特別の事は
していませんが、誰でも何処でも出来る簡単
な事を実行しています。但し本人の意志で何
処まで続けるかが問題です。私も負けそうに
なりますが、努力して続けています。

(A)心の健康

①好奇心、前向きによく読みよく書く。

②広告、宣伝、口コミに迷わされない。

③若い人に接しよく話しよく笑う。

④効果をあせらず、無理に頑張らぬ。

⑤いやな事はすぐ忘れ、気分転換する。心配
はほどほどに。

(B)体の健康

①好き嫌いをなく、特に菜食主義で腹七分目に
し、水分を多くする。

②規則正しい生活(夜は九時に寝て朝は五時

に起きる)。

③体をよく動かし、出来る事は進んでする。

(軽い体操・ラジオ体操など自分に合ったも

の) ・手足や首腹腰背など動かす体操(立って、
座って、椅子で、寝ながら、電車の中、待ち
時間など、いつでも、何処でも出来る)

④進んで外氣にふれる。一歩でも多く歩く習

慣(背を伸ばし目線を高く少し早目に)

⑤自分に合った趣味を持つ。

⑥薬は必要以外飲まぬ、医者の薬も最小限に
する。

⑦ビールは少々、タバコは吸っていません。

要はマイペースの生活で、腹七分目にし、
好奇心を忘れず、常に前向きの姿で、心も体
もこまめによく動かし、よく歩き、あきらめ
ず、根気よく続けて行くと、きっと元氣が出
ると確信しています。川柳を投句し、またあ
ちこちへ投稿するのも、私なりに健康につな
がると考えて実行しています。

ニンニク・十葉健康法

寺 井 東 雲

私は医者。薬は飲まないようにしていま
す。なぜかと言いますと、働き盛りの三十歳

と私の八十歳も同じ量のカプセルでは、老人は胃を悪くするように思われ、また体にきつく合いません。風邪に効く薬はなくてはならない強壮剤と聞いております。

そこで普段から体を丈夫に保つために、ニンニク卵を作って毎日飲んでおります。作り方はニンニク一キログラムを下ろし金ですり、それをガーゼで絞って汁を取り、そこへ卵黄を十個いれて混ぜ合わせ、土鍋で約二時間炒りますと砂粒大になります。それを普通は食後三回ですが、私は耳掻きに三杯位を毎朝飲んでいます。きついので鼻血が出る時もあります。一回作りますと約半年分あります。

昔、産まれたばかりの赤ちゃんが頭におできが出来、その時母親に十葉を飲ませると、自然に治ったとよく聞きました。現在、死亡率トップの癌は、皆様少なからず持つております。小さいうちに退治しないといけません。それに効くのは十葉だと思います。家族全員に毎日十葉を飲ませております。お蔭さまで三十年程になりますが、皆元気で働いております。

また毎朝欠かさず飲んでゐるのは、大匙三杯の蜂蜜を湯で溶かして、玄米酢を小匙二杯入れて強壮のために飲み、三時にはリング半分すりおろして飲んでゐます。これも健康のために良いように思います。

達者で長生き致しましょう。

自転車漕いで

福井桂香

一週間のうち二回の新聞配達を続けてから早いもので、もう十四年目になります。始めのうちは、目覚まし時計を掛けていても時間が気になって、夜中に何度も目が覚めて困ったものでしたが、週間リズムが身につくと案外、楽に起きれます。でも一月末から二月中は厳しいものがあります。元来、朝寝坊の私は早朝の景色などとは無縁の生活をしていましたから、夜明け前の凜とした空気が星と月が残っている空を眺めながらの配達はいの外、楽しいものになっていきます。

平成十年三月、突然に手足が痛くて動けなくなりました。その少し前に微熱があり流感かもしれないと病院に通ったり、整形外科を受診したりしましたが、病状が悪くなるばかり。大病院で検査の結果「リュウマチ性多発筋痛症」という病名の膠原病でした。ステロイドの投薬、五十日の入院、そして退院後も副作用のムーンフェイスや眼圧の上昇による緑内障の危険性など、すべて克服して平成十二年にはステロイドと、きつぱり縁を切ることができました。また、入院中は減塩食

(一日5g)でしたので、それまでの高血圧症も元にもどり、それからはなるべく減塩を心掛けています。

「禍転じて福となる」というように、再び健康を取り戻し、また週に二回の新聞配達を始めています。毎朝のウォーキングなどでは私には無理ですが、週二回配達であれば何とか出来ます。寒い朝は一杯の温かいドリンクを飲んで、「サー」と勢いをつけて出掛けます。時には犬も吠えてくれます。街角での発見もあります。約一時間の配達から帰ると体がボカボカして、うっすら汗ばむほど。しかし、暴風雨の日にはさすがに大変です。

少しでも地域のお役に立てたらと、引き受けた新聞配達が、かえって私の健康に役立つなんて、とても不思議に思えます。昨年は一度も風邪を引かずに過ごしました。「人のために火をともしば、我がまえ明らかになるがごとし」との言葉を深く実感しています。

肉体の老化には、だれしも勝てませんが、「色心不二なるを一極と云ふなり」との言葉もあり、心が健康であれば、体もまた健康でいられると考えています。

ともあれ、減塩と体に合った適度の運動、そして、心身両面においての栄養に気を付けて、これからも元気に頑張っていきたいと先輩の方の後に続いて行きたいと思えます。

誹風柳多留二四篇研究 43

山田 昭夫・伊吹和男
大野 秀二・小栗清吾
橋本 秀信・粕谷長生

清 博 美・佐藤 要 人

321 吉原でいつち高いハば、アなり

山田 浜田先生の「吉原では遊女の揚代その他いろいろ私わされるが、何も理由もないのに三会目に遣手と称する婆に沓歩やるのは最も高く感じられる」(『江戸川柳辞典』)をそっくり戴く。所詮は心情の問題。

駕よりもやりの沓歩が高い物 六五三
沓歩やらずハはぎそうなば、あ也 一七二
清・佐藤 賛。

322 客をとらまへる時にハ一文字

山田 吉原では、「性悪の客が馴染の女郎に渡を附けずに、他の女郎に手を出すといった

やうな、物じて没義非道の行為でもやらうものなら、夫こそ大変、大勢の女郎が寄りたかりて、其男の、鬚を散切りにし或は女の振袖を着せて満座の中で嘲笑するなど、頗る峻烈なる私刑が行はれて居た」(『川柳吉原志』)。

首題句は、その浮気な男を見付けた場面であらう。何時もの優雅な八文字はどこへやら、一文字にまっしぐら。

七文字へらして客を追かける 二四四
八もんの陣で息子をとかまゑ 四二二
いけどりを先きへひかせて八もんじ

清 賛。花魁道中のシャナリ／＼の八文字だが、この時ばかりは真一文字。怒り心頭に達している。

佐藤 賛。

323 殿様をおなかへ入れてねだるなり

山田 雨譚註「ふところへ入れる也」。

御妾。殿様を「懐に入れ」て、おねだりする。

ある夜のむつごに親へ五人ふち 拾四二
夜ル夜中カ妾なま米ねだる也 三三〇

はらからのため大小ねだり出し 一三二六

清 雨譚註、遠慮がちですネ。ハツキリ破礼句とした方が数段面白い。

佐藤 賛。

324 判取へおもたたく渡す恥かしさ

山田 判取について辞書類の説明では一寸分りづらいのので、例一句目に鈴木倉之助氏がつけられた註を引く。

「当時の大呉服店(越後屋・大丸など)では、売場の手代が客から代金の支払を受ける、と、半切紙(杉原紙を横に半切にしたもので、手紙を書くに用いる)に売上げ高を記し、小刀でそれを切り、『半取り!』と丁稚を呼ぶ。すると丁稚は『アーイー』と長い返事をして代金と売上伝票を帳場へ運び、番頭から判をもらってくる。これを判取といった」(『教養

文庫「誹風柳多留二編」。

「重たく渡す」とは、金銀とかでなく錢で支払う意で、裕福ならざる身を恥じているのだらうが、呉服屋としては、

袖口か衽ッ賣れてもときのこへ 宝七12 15

お客様は神様なのです。

判とりハ賣上ケを切ル時によび 二15

はん取へかちりと小粒わたすなり

明四信2

はん取りの衽丁かけるはんじやうさ

明八義2

橋本 賛。緞の文銭で払うので。

清 賛。文銭を百枚通した緞(さし)はかなり重い。

佐藤 賛。

325 有ツたけ着たとハ見へぬ仲の町

山田 花魁道中。

まさに豪華絢爛であるが、内証は苦しい。あらゆる手筈を総動員して整えた道中、そんな舞台裏など素振りにも見せないで、緩やかに八文字を書いている、というのであろう。やりくりをしたとハ見へぬ仲の丁

ひんほうのかくしごっこは中の町 二〇三 四四27乙

そんな料や道中するをしろ 見 明三桜4

清 賛。内実は火の車だが、そこは虚飾の世界である。

佐藤 賛。

326 新しい出はを息子ハかんがへる

山田 出端は「②出るてがかり。きつかけ」
『日本国語大辞典』で、外出理由の新趣向を考えるドラ息子。歌舞伎の出端囃子を利かす。

あたらしい出はかとむすこじゆすを下ケ

天四松1

掃舞台にはとてちりの出端はなし

一〇七18

助六の出端ハ河東に蛇の目傘

一三九32

大野 賛。外出先は吉原。

橋本 同。かこつけの種は尽きず。

清 同。ありとあらゆる機会がかこつけの種にされる。

佐藤 賛。

327 仲人を眞向キに成てあそバされ

山田 眞向は「正しくむかうこと。正面」
『広辞苑』のことで、この場合は眞面目に、

真剣にほどの意。

一寸ハッキリしないので、駄労働を試みる。

仲人口と言つて、婚礼の仲人ほどいい加減なものはない。が、どう云う風の吹き回しか、至極眞面目に仲人を果そうとした徳人が居た。

首題句は、そんな仲人を見て逆に弄んでいる周囲の人達と見たが如何。

眞向ハ今にしらぬ仲人

武七7

十分一取ルにおろかな舌ハなし

宝十一札1

伊吹 賛。悪条件(姑・ドラ息子・持参嫁など)が重なりすぎて、どんなに仲人口を駆使しても、まとまりそうにない縁談に、仲人料が欲しいためか、真剣に取り組んでいる仲人を揶揄した句。

小栗 不明。「遊はされ」?

橋本 賛。だが伊吹説の逆、仲人専門でない目上のくそまじめな御人が一生懸命にまともようとする様。「遊ばされ」は敬語ととる。

清 不明。武家の仲人、或は、武家相手の仲人? ことによると、殿様の手を付けた女を下の者へ下げ渡す? つまり殿様が自ら仲人のようなことをする。

佐藤 大名などがその側室の一人を家来に下げ渡すことであらう。

荀香のむ

宮西弥生選

糸巻きにつくろいした日を巻いている
やさしくてとても厳しい広辞苑
鴉三羽論議がつづくゴミ袋
抱きしめて貰えばわかる骨密度
旅人をもてなす心もつ田舎
光りすぎてる人とは親友にならぬ
罪いくつ捨てて拾って生きくらべ
若葉風娘二人は子を産まぬ
咲き終えて花が教える人の道
ほどく時のことも考え結びましょ
ふる里を消してしまつた父の墓
母の湯呑み満たすことばを搜してる
美しい花も葉裏にもつ秘密
ありがと一つ増やすと楽になる
生き通し生きて未完の詩がたまる
捨て犬に試練はじまる雨つづく
二流でもいいさ会社はまだあるぞ
炎の色が出せないままの絵の具皿
がらくたを入れたる箱を捨てられず

熊本市	永田	俊子
八尾市	高橋	夕花
弘前市	一戸	ツネ
川崎市	和泉あかり	
米子市	青戸	田鶴
米子市	政岡日枝子	
倉敷市	小野	克枝
榎原市	居谷真理子	
尼崎市	内田美也子	
堺市	志田	千代
米子市	鷺見	正子
奈良県	渡辺	富子
和歌山市	福井	桂香
米子市	白根	ふみ
岡山県	矢内寿恵子	
大阪市	渡部さと美	
羽曳野市	徳山みつこ	
愛媛県	黒田	茂代
和歌山市	楠見	章子

間違ったの電話謙虚に聞いている
ちつぽけな草にはいつも負けている
飾つたら何処かでわたし売れるかも
方角に凝ると動くのが恐い
運鈍根しばらく風になつてみる
言い訳を重ねてしまう花ぐもり
思案する私を乗せる観覧車
悟ること出来たら翼生えてくる
夢多数まだまだ生きていなければ
ふつ切ろう高嶺の花に刺がある
こじんまり平屋住居の豊かさよ
ゆずり葉のいのちあまりに潔い
耳の痛い話に耳が寄りたがる
熟女です男心の裏が読め
楽しみの日待つ日々もより楽し
要らぬこと言ってしまった無言劇
こぼれ種忘れた頃に花ひらく
甘く見てまとまるものが纏まらず
ひっそりと咲く花だから気にかかる
出直しの靴がなかなかなじまない
見舞いして悲しみじんと帰り道
本流を離れ流れが見えてくる
秘め事を隠してしまう袖たたみ
開き直ればこわいものなし酔美蓉
シヤガールの赤と青とにある叫び

大阪府	三浦千津子
鳥取県	さえきやえ
藤井寺市	高田美代子
鳥取県	石谷美恵子
西宮市	西口いわゑ
寝屋川市	森
芦屋市	黒田
大阪市	川久保睦子
富田林市	藤田
堺市	西村りつえ
横浜市	保田
和歌山市	武本
八尾市	宮崎シマ子
倉吉市	野口
堺市	矢倉
富田林市	片岡智恵子
横浜市	秋元
和歌山市	吉村さち子
鳥取県	岩崎みさ江
西宮市	牧瀬富喜子
米子市	木村富美子
西宮市	奥田みつ子
藤井寺市	鴨谷瑠美子
吹田市	山本希久子
生駒市	飛永ふりこ

お大事にどこまで線をひけばよい
 とダンスの整理が出来ぬ袋帯
 やどかりも昨日を脱いで旅に出る
 日本を甘くみるなよフリーガン
 お料理が好きでマニキュアとは無縁
 嘘ひとつ呑み込んだまま陽が回る
 善人と呼ばれて脱けぬこの仮面
 仕舞風呂首まで浸る至福なり
 平凡な暮らし二流であろうとも
 タンポポも決心ついて風に乘る
 Eメールついていけない指がある
 心機一転舶来ももん提げて旅
 浄土へのみやげはなにがいいだろう
 残り香を絞って果てる黄水仙
 ごめんねと素直に言えば済んだはず
 自己愛の足袋をいよいよ白くする
 明日探るつもり金柑まる裸
 ある時は少女の顔で切りぬける
 六月の雨にやさしい夢を見る
 彗星を母は探しに行つたきり
 パラエティーに富んだ我が家のフライパン
 見通しのきく場所探す女傘
 目玉焼きフライパンが大きすぎ
 今日までを真剣に生きたと書く
 九十三歳とても愛しい二度重なり

倉吉市	山中	康子
大阪市	神夏磯典子	
和歌山市	古久保和子	
横浜市	川島	良子
東京都	播本	充子
東大阪市	田中美弥子	
鳥取市	永原	昌子
寝屋川市	平松かすみ	
鳥取県	西原	艶子
神奈川県	神戸みず帆	
八尾市	生嶋ますみ	
米子市	林	瑞枝
八尾市	村上ミツ子	
松江市	川本	畔
鳥取市	録沢	風花
和歌山市	西山	幸
和歌山市	福本	英子
藤井寺市	太田扶美代	
大和高田市	鍛屋	千里
西宮市	門谷たづ子	
倉敷市	井上	富子
八尾市	井尻	民
八尾市	高杉	千歩
今治市	塩路よしみ	
香川県	川崎ひかり	

私の足跡を見る慶弔費
 百万円の振袖が泣く箸使い
 飢餓の子の眼の奥にある青い空
 右脳左脳脱線続く梅雨最中
 あの辻を曲れば別れの刻がくる
 ためらい傷の数だけ悔いを抱いている
 年金で叶えるほどの夢を追う
 あんなことこんなことまで耳二つ
 テーブルで祖国が茶せんに揺れてゆく
 花咲かそ天国までの滑走路
 何も無くて困む子が居る孫が居る
 鯖ずしの極致三日は寝かされる
 過激な海わたると決めている翼
 輪転機も私も主張してみたい
 胸底にいつもあるのは母のこと
 蕎麦殻の坊主枕で夢も見ず
 尼崎市 長浜 澄子
 寝屋川市 岸野あやめ
 三田市 久保田千代
 和歌山市 桜井 千秀
 松江市 佐野木みえ
 羽曳野市 吉川 寿美
 香芝市 大内 朝子
 東大阪市 安永 春
 アルゼンチン 松井美穂子
 寝屋川市 太田とし子
 東大阪市 北村 賢子
 大阪市 津守 柳伸
 和歌山市 松原 寿子
 箕面市 出口セツ子
 寝屋川市 籠島 恵子
 大阪市 本間満津子

俊子さんの句―その昔亡母の映像と作者を重ねたおもしろさか。
 「糸巻」久しい言葉であるが、時代錯誤ではない。これからもずっと
 女として生きる限り句材として生きてほしい。夕花さんの句―久し
 くして作者らしい佳句に接して嬉しい。常に分身として生きる辞典。
 ある日は血となり、そして肉となる道標である。ツネさんの句―鴉
 三羽が面白い。人間だつて「三人寄れば文殊の知恵」。ゴミ袋は彼等
 の死活問題。どんな議論が知りたい。あかりさんの句―骨太食品に
 ふりまわされる昨今。必要以上摂取すると逆効果とか。ときどき強
 い腕で測定してもらうなんて本当に嬉しい限り。でもひとり者はど
 うしてくれるの。

池

高島 啓子選



一日をゆつたり生きて池の鯉溜池でみがかれてゐる鯉の赤ジヨギングは池一周と決めている故郷に悲しい民話抱いた池池の土手日がな釣り人見てる人鳩もぐる逆さ団地を掻き乱す釣池へリストラ組がふえてくる亀の池 亀も仏の顔をする稲作に賭けてため池見過こせぬボケベルが鳴る釣池の竿の主引つ越しの池に子鴨の徒競走逆さ富士描いて池はアーチスト河童棲む民話の池をダムが呑みどぶ池に嵌まってからの失語症釣り人の帽子が並ぶ初夏の池溜め池があつて棚田にある緑震災の池に戻つた青い空気の毒が後手に回つた池の柵五月雨に池の蛙が弾みだすアメンボがワルツを踊る春の池過去形の失敗談が池にある白鳥が泳いで池が絵になつた

敏子 緞子 庸佑 高栄 千里 高栄 章久 三代子 あずま 恵勇 みね 登美 順子 松煙 一知 朝子 ヤギエ 栄子 典子

優勝を逃した池を忘れない山の池静かな時間いただいたコンクリで固めた池を子に残す伝説の池は今でも青く澄み水争いの歴史知つてる村の池汗流し不況の池を泳ぎに会う睡蓮の花咲く池でモネに会う池巡りやつと繋げた手の温み深き罪池に沈めて故郷を出るふるさとの池で醺する民話酸欠の池で溺れているメダカ義理固いタニシは池を離れない池売れた事は蛙に話すまい池だつたはずだが団地出来ている分教場泳ぎ教えてくれた池

充子 扶美代 ちかし たもつ 鉄治 喬水 ミツ子 珠美 克治 柳弘 岳水 しげお 哲男 正雄 鐘造 保昌 恭昌 一壺 みつこ たず子 義 高瀬 霜石

スクリーン

傍島 克治選



病窓は四季を彩るスクリーンスクリーンせましと写るモロ娘モザイクがかかる記憶のスクリーンジョンウエイン男が匂うスクリーンクーパーが居て青春のスクリーン口付けも英語も映画から覚えスクリーンへ涙は拭かぬ風去りぬスクリーンに写り喜ぶエキストラスクリーンのように上手くは行かぬ恋スクリーンで涙を流す優勝旗健さんも歳だと知つたスクリーン銀幕に我が青春を重ね見る戦争も平和も知つてスクリーンこわもての男泣かせたスクリーンスクリーン泣いた笑つた恋もしたスクリーンに出なくて少女親を捨てスクリーンのヒロイン恋に恵まれずスクリーンのすき間迷がさぬゴマシヤル特撮のスクリーン想うテロの跡仇討ちに拍手が止まぬスクリーンスクリーンが忘れていない原爆忌殺人も詐欺も楽しいスクリーン

喜江 文士 尚士 孝雄 善信 東吉 正子 一花 遠野 セツ子 倫子 恭昌 扶美代 水笑 雄々 度 雅城 四郎

青春の墓標の下のスクリーン
ジエンド甘い余韻を抱きしめる

こんな恋してみたかったスクリーン

銀幕の弁士もスター名調子

老醜を見せぬ原節子の矜持

スクリーン真似るさよならのシーン

駅馬車の轍残したスクリーン

スクリーンポップコーンも忙しい

スクリーン正しい者が勝つ安堵

スクリーンで臓器を裂いて切り刻む

数々の名画と消えたスクリーン

公民館のスクリーンにいるドラエモン

千と千尋世界に駆けるスクリーン

夢枕過去鮮やかにスクリーン

寅さんも若い我が家のスクリーン

佳

スクリーンの主役にはまりゆく夢よ

銀幕の名花も枯れてゆく流れ

咳一つないスクリーン今佳境

モノクロのスクリーンから昔よぶ

美女がむむ野外映画のスクリーン

人

特攻の螢が光るスクリーン

地

駅馬車の砂塵はみ出すスクリーン

天

少年に戻る映画の切符買う

軸

勝ち戦信じ込めましたスクリーン

正 剣

修 ぎ

あずき

(原) 輝 夫

あやめ

充子

ヤギエ

重人

可住

史風

章久

妻子

たもつ

義男

保州

朝子

隆盛

武史

鉄治

英旺

螢

正雄

高瀬 霜石

高瀬 霜石

高瀬 霜石

高瀬 霜石

高瀬 霜石

高瀬 霜石

ちよつと

ささきやえ選



百円でちよつと素敵な夏帽子
春帽子ちよつと気取った妻と旅
回る縮ちよつとウインクして通る
ちよつとずつ右へ曲がつていく政治
大國へちよつと言いたいことがある
一寸の虫にも生きる意地がある
砂時計倒してちよつとお茶にする
ちよつとでもポナナス出れば良しとする
まだおんちよつと紅ひく六十路坂
詰将棋ちよつと口だし嫌われる
エプロンがちよつと隣へ行ったきり
もうちよつと飲みたいけれど我慢する
もうちよつと待てば良かったプロポーズ
金蔓へちよつと打算の紅をひき
ちよつとしたミスで栄転ふいにする
顔色がちよつと出来来た病み上がり
ノーベルの頭がちよつとだけ欲しい
御先祖にちよつと近づく御念仏
もうちよつとです勲章へ手がとどく
ちよつとだけいい事をした茶のうまさ
ちよつと手をかけると生きてくる庭木
昔からちよつと来てには気をつける

清山 正雄 万年 強一 岳水 正子 恭昌 敏昭 邦昭 夕ミ 螢 鐘造 俊子 旋風 一知 勝規 五月 可住 あずき 一風

この話ちよつと毒味が混ざってある
三代代ちよつと譲って丸く住む
毒を持つ花にもちよつと好意抱く
ちよつと風呂そのまま女房帰らない
ちよつとだけ声聞きたくて墓参り
神様の力をちよつと借りてます
ちよつとしたことが大きな溝つくる
ちよつとした油断が生んだ医療ミス
ちよつと芽を出して期待をさせる花
おすそ分けから始まった輪が温い
ちよつと貸すお金はあげた方がいい
もうちよつと愛想が良いとまだ売れる
ちよつとした気配り客は忘れなない
ちよつとこい悪友からの助け舟
地獄極楽ちよつと覗いて来た命

佳

ちよつとだけ話せばわかるお人柄
叱るだけ叱って最後ちよつと褒め
ちよつとした事へ夫婦で来てくれる
ついちよつと洩らした語尾が歩き出す
善と悪ちよつとつまんで生きている
ちちの背に少し近づく鉤屑
ちよつとだけ自分の葬儀見て逝こう
ちよつとしたことも知れぬ青い空 竹治ちかし

天

軸

次男 晴翠 雄々 愛論 栄子 扶美代 一粹 和重 純子 妻子 圭一郎 泰竜 勝巳 寿恵子 悦男 高明 しげお ヒサ子 霜石 慕情 德三

初歩教室

題 — テーブル

はん だ きん いち
吐田公一

① テーブルに花を置く

② テーブルを叩く

③ 子が巣立つて老い二人のテーブル

④ テーブル代りのリング箱

のような類想句が多かった。どうしてもテーブルという題では範囲が狭いように思われ勝ちだが、辞書を引いてみると、テーブルチャージや机なども含まれる。中でもリング箱に着目されたのは面白いと思つたが、投句の中に相当数見られ、着眼点が甘いと言わざるを得ない。ただ、類想句の中でもその表現の勝れたものや穿ちの利いたものは類想句と言う範疇ではないことを付言する。

一句を生む難しさは大変だと思ひますが、それに挑戦することが大事で頑張つて下さい。
添削句

○賑やかにテーブル囲み花が咲く 忠子
上五と下五が類似語。ありきたりになるが、
▽同窓会テーブル囲み花が咲く

○孫たちとテーブル楽し老いの坂 稔

老いの二人暮らしへ孫がきた楽しさを

▽孫がきてテーブル楽し老いの家

○この席はメインテーブル気が重い 敬之介

上五は冗長

▽スピーチにメインテーブル気が重い

○ユーモアなテーブルスピーチ盛りあがる トシエ

披露宴とすればスピーチだけでテーブルの

意が伝わるのでは――

▽スピーチが盛り上げている披露宴

○テーブルを囲むというが二人だけ 九好

働き通したあとを楽しむ様子を

▽テーブルで老後楽しむ差し向い

○テーブルマナーこだわり過ぎて舌が留守 洋介

下五にこだわりすぎたのでは。もつと単純

に表現をしては

▽テーブルマナーこだわり過ぎて味わえず

○人知れずテーブル撫でる明日退社 いたる

下五を単純にもつてゆけば

▽苦労した机を撫でる定休日

○無人駅時刻表をあてに待つ 三喜夫

テーブルが詠まれていない。着想は異なるが

▽テーブルで夢を上げる時刻表

○テーブルに百円コップ並んで 栄一

百円コップが並ぶでは人間が詠めてない。

▽テーブルのグラスに愛のワイン酌く

○テーブルに喜怒哀楽の染みがある みず帆

原句もいいが、私としてはあるよりあとの方が――

○詰め込んで丸いテーブル角が立ち 輝夫

人間の感情等が詠まれていないよう。川柳

は人間を詠む。見付けは違うが

▽円卓で四角張つて見る見合席

○楽しみは石のテーブル桜花の下 節子

上五が冗長。バーベキューとあつたので

▽バーベキュー石のテーブル花見酒

○老人会テーブル叩き談論す すすむ

下五が叩くと合致しない

▽テーブルを叩き老人世を歎き

▽テーブルに政治不信を叩きつけ

○テーブルの上に私の夢が有る 菜月

どんな夢かを具体化されるといいのでは

▽テーブルに夢が広がる旅プラン

○五十年丸いテーブル有難う 比佐子

内容が希薄

▽円卓に思い出偲ぶ老いの家

○テーブルの御馳走視線熱くなり 和香

原句の内容を具現化すると

▽立食のパーティー視線が追う料理

○テーブルの下でも妻に注意され 弘之

てにをは 添削

▽テーブルの下から妻に注意され

○どさどさとテーブルの上積み重ね 大 鯨

何を積み重ねているのか。人間を詠むには
積ん読とか具体化する必要がある。

▽読みさしの本で埋まっている机

○置き手紙と食事テーブルに妻は留守 宏 子

○テーブルに食べ方置いて妻は留守 純

置き手紙と妻の留守。よく似た句

▽食べ方のメモテーブルに妻は留守

○ファミレスのテーブルのまわりあたたい 英 旺

ファミレスの情景を具体的に――

▽騒ぐ子でファミレステーブル落ち着かず

○テーブルに子のパソコンは躍動す 和 友

マウスが走るでテーブルは詠まなくても

▽パソコンのマウスが走る子供部屋

○不況から屋台テーブル空元気 清

下五と上五が噛み合わない。

▽不況から屋台テーブル愚痴並ぶ

○テーブルが大きく見えるこの春闘 勝 久

何で大きく見えるのか、私には分らない。

▽テーブルの労使の顔の色あえず

○手を伸ばすだけで用たる机あり こずえ

下五が安易

▽机から届く範囲に物を置き

○円卓が人の和作り和やかに 郁 代

中七を変えてみると当然下五の着想が変る。

▽円卓に話が弾む誕生日

○嫁そしる老女テーブルまで叩き 美恵子

上下を入れ替えてみると(倒置法)

▽テーブルを叩いて老女嫁そしる

○テーブルに向かう暇なく職探し 美代子

着想は異なるが、雪印などを想定して、

▽偽装から机が消えた職探し

○一輪を挿したテーブル誰れを待つ 和 輝

同じ内容を

▽訪う人待つテーブルの花一枝

○テーブルの拭き方を見る姑の目 章 司

見るとあるので目を省いて、

▽テーブルの拭き方いいちい見る姑

○中東の和平テーブルつくは何時 真 一

○イ・パ両国テーブルつくは丸でなし さだを

時事吟としての同想

▽テーブルにつけぬ運命を背負うイ・パ

○テーブルに集う家族のいい笑顔 昌 鼓

下五は冗長

▽母の日にテーブル囲む里の家

○テーブルもクロスと花で化粧する 裕 峰

説明句に近い

▽化粧してテーブル晴れの日を迎え

○家族みな揃いテーブル椅子足らず 照 彦

同じ内容を一寸した小道具(見付け)で川

柳らしくなるのでは

▽テーブルが足らぬ家族の里帰り

佳句

テーブルにチンしてという冷えたメモ

テーブルのマナー気にせぬ呵呵大笑

テーブルも机兼用子等巢立ち

テーブルに溢れた子等も遠くなり

母の日はテーブル掛けも衣替え

その昔テーブルリング箱で足り

ライバルの対角線に居て酔えぬ

テーブルのしみてバレてる盗み酒

テーブルに愛の花咲く新世帯

テーブルを回り花婿出来上る

テーブルを囲んで許した娘の相手

テーブルに顔が揃った連休日

テーブルの夫婦茶わんが始発駅

単身の机子供の写真置く

テーブルに付かない孫の反抗期

テーブルに就いて揉めだす遺産分け

テーブルの下でもからむベアの足

テーブルが涙のわけを知りたがり

テーブルに零したくちをそとと拭く

(中七がいい)

食卓に花(輪)の恋心

(あと味のいい句)

私の句

テーブルの下から渡す黒い金

美弥子

喜 子

欣 子

円 女

アヤ子

彰 雄

恵美代

登志子

文 江

つよし

錦

智加恵

ヨシ枝

(山) 雅 子

像 山

侑 子

きらり

鈴 美

ふりこ

栄 子

更 紗

秀句鑑賞

同人吟 清水潮華

— 6月号から

生きている今日と言う日に深呼吸

米澤 俣子

早いもので、私が川柳を始めて十五年経ちました。その間個人的にも、予想だにしなかった様々な出来事に遭遇し、人生の転機に二度三度と立たされました。長い一生には、誰にでもそのような時期はあると思います。

川柳をやめたいと思った時もありました。しかし、その都度故満秋さんに励まされ今日に至りました。

秀句鑑賞をするに当たり、満秋さんが常々言っている五七五と日常茶飯を平易な言葉で詠む、と言うことを念頭に置きました。

課題吟と自由吟の作句姿勢は大きく異なります。課題吟は競吟です。大会なり句会で抜けることを前提にしています。しかし、自由吟は川柳に於ける自分史です。自分自身のさまざまな思いを十七音で表現し、なおかつ発表をして活字にするには、読む人誰にでも解ってもらえなくては、その意味がありません。一人よがりでは、思いが伝わりません。

私の琴線に触れた句と言うことで鑑賞させて頂きました。

毎日時間に追われて、空を見上げたり、花を愛でたりを忘れて生活している私にとって、命への感謝を沁み沁みと、思い出させてくれました。

生きていると言うか、生かされていると言うか、終着駅が近い今こそ、心のゆとりを持つ大切さを教えて頂きました。

リストラを知らずに眠る名刺入れ

鶴田 遠野

先の見えない不景気に、多くの人はいすの不安を抱えている昨今です。

それにしても、退職金の上積みによる、早期退職の募集に予定人員をオーバーする応募者がいる記事には、驚きました。

この先も働く意志のある人生を、無惨に断ち切られた無念さが、ソフトに十七音に詠み込まれています。

激しい言葉での表現より、より強く作者の心情が伝わってきました。

幸せのレベル下げれば出る笑顔

西村 りつえ

高望みはしていない積りでも、それとなく他人と自分を比較しているのでしょうか。

力んでは駄目なのは分かっているけれども、なかなか達成できません。この句を読んで成る程と思いました。上へ上がる事ばかり考えていましたから。

レベルを下れば自然に余裕もでき、視野も広がり、優しい笑顔が出てくるのですね。何か肩の力が抜けて軽くなりました。

作者のお人柄がしっかり出ていて、この句に背中をポンと押されました。

雨の日を心待ちする赤い傘

栗田 久子

真っ赤な傘、雨の日の鬱々な何処かへ吹っ飛んで仕舞いそうですね。

買うときは何となく躊躇するのですが、少し派手目で綺麗な傘は、雨の日が待ち遠しいものになります。

歳など忘れ、ルンルン気分させてくれます。素直にご自分の気持を詠まれ、私も雨の日に赤い傘を差したいと思います。

傘だけによらず、素敵な帽子で夏を迎えたら少し若返り、夏バテにはならないでしょうね。この句から若い気を頂きました。

忍の字を千ほど書く風が止む

江口 度

悔しいこと、腹立たしいこと、本当に数えれば切りがありません。

一時は、その思いが頭から離れませんが、やがて時が解決してくれます。消極的に解決する方法をとっていますが、このように、積極的に自分を押さえるとは、達人の技です。

今は、逆切れ、暴力など、一部の人達の現状が報道されていますので、怖くて他人に注意などとても出来ません。

高齢者も社会のお荷物のような感じですが、これも忍の字で耐えましょう。

ちっぽけな星に神様多すぎ

新家 完司

もしかしたら、人間の数だけ神様もいるのではないのでしょうか。

余りにも宗教による紛争が多すぎます。それとも人類はいくさ好きなのでしょう。

小さい頃は、神様を信仰していると聞くだけで、その人を文句なしに尊敬致しました。自分とは全く違う良い人で、神様の身代わりだと信じていました。

これからは、地球を平和にする神様だけを選別したいものです。

考えさせられた一句でした。

デパートの地下の平和を見て帰る

西山 幸

最近、新聞にもデパートの賑わいがよく報道されています。マスコミもデパートの惣菜が売れている事を歓迎しているようです。それに触発されているのではないと思います。が、働く女性も家庭の主婦も何の違和感なく、夕餉の膳に並べています。

平和と言えば、これも平和の一つですね。世相を皮肉っている感じがさりと出ていて、感心いたしました。

石段を見上げただけで草臥れる

川上 大輪

私は、家の前の急坂を見上げては、上らない前から息が切れるような気がしています。何でもこんな所に家を建てたのか、と何時も悔やんでいます。まさにこの句の通りです。

勉強をさせて頂きました。

持て余すワイングラスの長い脚

古久保 和子

先日私もワインを飲んだのですが、あの脚には、何処を持つと良いのか、一瞬迷いました。普段ワインを飲まないものですから。

それにしても、私と同じように、和子さんも考えていたとは、嬉しくなりました。

この一句でぐっと親近感が増しました。

セールスにメリットだけを聞かされる

矢野 梓

電話によるセールス、また玄関のチャイムによるセールス、知人からの義理が絡んだセールス等々、色々ありますが、断るには勇気がいられます。

売の方がメリットを数え上げるのは当然で、それを冷静に判断するわけですが、なかなか出来ません。

作者の対応の冷静さが如実にできています。

捨て犬を孫の涙に負けて飼う

原 さよ子

犬猫大好き人間の私にとってこの句は、有難く涙が出てきそうです。

心ない飼いやをする人が後をたちません。我が家の犬猫は自慢じゃありませんが、捨てられた者達ばかりです。

老後の良きパートナーとして、かけがえない癒しの名人です。

涙に負ける作者の優しい心持ち、本当はとも強い方だと思います。犬猫を最後まで責任をもつて面倒をみるのは、ただ単に可愛いとか、優しさだけでは、つとまりません。

句の構成も良く、ズバリ作者の心情そして情景が、目に浮かんで来ました。

大事に飼ってあげて下さい。

秀句鑑賞

— 6月号から

川崎 ひかり

膝までが言い話ににじり寄る

稲川 恵勇

アハハと笑いました。まったく身も心も旨い話にすり寄って行きますもの。「にじり寄る」とは言い得て妙です。

ありがとうたくさん言つて陽が暮れる

近藤 道子

たった五文字のひらがなですが、「ありがとう」とたくさん言いたいし、また聞けたら幸せですね。

切れば敵切らねば柳になる尻尾

藤田 芳郎

難しい選択です。尻尾は自分で見えないだけに結果は運否天賦です。

悔しくて空缶ひとつ蹴ってみる

須磨 活恵

ささやかな反抗。大きく堅い物だと爪を剥ぐし、空缶は手頃なところでしょう。

ピンとたち白髪が主張する毛染め

福田 由美子

白髪には申し訳ないのですが、一歳でも若く見せたいのもまた女心です。

リストラの夫が掃除機かけている

熊代 菜月

男の人もそれなりに気を遣っているのですね。案外可愛いところありますね。

愛という漢字を習う四年生

中川 千都子

恋文を書く時「愛」は漢字なくして心が通じません。四年生は恋知り初めし年頃かな。

正義感にもえた若さに遠くいる

藤井 一二三

年を取ると人間丸くなると言いますが、きつと妥協してしまうのでしょうか。正義感イコール若さ……でしかうか?

井へ生きる幸せてんこ盛り

星野 きらり

毎日美味しく食べられるって本当に幸せです。健康で大好きな川柳作って、私までも幸せになります。

沈まねばモグラ叩きが飛んでくる

両川 無限

世渡りって難しいですね。浮いても沈んでも人に批判されますもの。

怖いのは人間ですか金ですか

山下 節子

見方考え方ですが、両方怖い時もあります。生死がからんでくるのはお金、それを遣うのは人間ですから……。

夫から名前呼ばれた事がない

百田 幸

私と同年代でしょうか。今更名前呼ぶ方も呼ばれる方も照れちゃいますよ。かあちゃんです。

ペイオフを他人こととは情けない

寺井 柳童

本当、本当、でもあの金この金と心配しなくてすむ気楽さもまたいいかも。無い者の負けおしみでしょうか?

今日こそは言おうと鍋を温める

神戸 みず帆

言いたい事は些細な事でしよう。「鍋を温める」で気持ちの余裕と愛情を感じます。

春だものきつと跳べるにちがいない

蔵本 悦子

待ちに待った春、三段跳び等如何ですか。

面倒な話に如何レモンティー

野村 清美

レモンティーと聞いただけでリラックス出来ますね。女性らしい佳句です。

添削のむずかしさ

はんだ
田公
一いち

川柳塔誌五月号初歩教室「鍵」の題で、返送させてもらった句で、

○幸せを探しつづけた鍵の束

について私の添削は、

鍵を擬人法（探している本人）として考えてみると、

○幸せを探しつづけた鍵の旅

ではどうでしょうか、と言うものでした。

それについて、ご本人から「鍵の束に人の試行錯誤を入れ、いくつもいくつも思い患う気持ちを詠んだつもりなのですが…。見方を変えたと鍵の束が幸せを探しているようにもとれますね」というお返事を頂戴しました。実のところ、このお手紙を拝読した時、私はハツとして、自分の愚かさに忸怩とした思いをいたしました。他人様の句を読み取ることのむずかしさをつくづく思い知った次第で

す。

このような誤解というか、作者と私の間で見解が齟齬があつたようで、そのような句がこれまでもいくつもあったように思うのですが、なかなかご意見を率直に届けて下さる機会がないようで、これは私にとつても不幸なことであると思うのです。と申しますのは、折角ご苦心なさつた作者の思いが伝わらず、私の独断専行（ひとりよがり）で評をしてしまう結果となるからであります。但し、次に述べますように、句は一人歩きをするものゝであり、投句の中に句以外の文言を書き加えることは、特殊な場合を除き許されないこともまた否めないのです。

句は発表（投句の段階を指します）をされてしまうと、前述のように一人歩きをするものですから、それだけに「ご自分の思い込みを詠まれる際にも「これでどうだろうか、読んでいるただく相手に自分の意思がはつきり伝わるだろうか……」と言う反省というか、第三者的な（主観を除いた）立場の眼で、二度三度読み返してみる必要があるのではないかと

思うのです。現在私はまだ勤め人の身ですので、帰宅後夜に締め切りという酷な時間的制約の中で、六、七〇人の方の添削をしなければなりません。

るので、言い訳がましいようですが、多分に粗雑な添削に陥つていられることもまた事実だろうと思ひ、一所懸命に作句し、ご投句いただいている皆様方に、常に申し訳ないという気持ちで一杯なのです。

さて、このことは別ですが、選者にしてもできる限り幅広く句を理解するように努めるべきですが、選者も人間である限り自分の経験則からはみ出すことは容易ではないのです。

ある有名な作家の言葉の中に「誰が読んでも解る句、解り易い句を創るように心掛けねばならない。だからと言つて説明句に陥つてはならない」とあります。この点が非常に難しいのであり、そこに僅か十七音字で表わす文芸の深さがあるのかも知れません。

解り易くて、しかも誰にでも作れない句、

寝転べば畳一帖ふさぐのみ 路郎

人恋し人わずらわし波の音 栞

など難解な言葉もなければ何でもない表現の中に、人生哲理とでもいふような視野の深さを持つ句は、なかなかにして生まれるものではないが、少なくとも私達が川柳を学ぶ限りは、このような先輩のいい句を参考にしながら、自分の句、自分だけにしか創れない句をものにするように心掛けたいものです。

旅行失敗記

出口 セツ子

私の実家は父が旅行好きだったので、幼い頃から、春休み、夏休み、冬休みには必ず旅行し、他に連休など、年に五、六回は行き、それが家族のコミュニケーションの場にもなっていた。

主人も、主人の亡父も旅行は好きだが、一人旅が好きなのである。主人は二十五歳の時、一人で三カ月ほどドイツへ行ってきた。向こうで一人の女性を巡って決闘をしたり、二十歳の時にオーストラリアに塾を作りに行ったりと、目的地や期間を決めずに、気の向いた時にふらりと冒険の旅が好きなのである。

ところが、私は方向音痴だから一人ではどこへも行けないし、一人旅など淋しいので嫌いである。旅はあくまで賑やかに楽しめなければ嫌なのである。そこで、結婚してから、義母も一緒に家族で出歩くようになった。今までは留守番ばかりだった義母も「動ける間

に人生、楽しまなきゃ」と言う私の言葉に、「そうやな。お金を持つて死ねないし」と旅行費用を出してくれるようになり、主人は、

「江戸時代だったら、君は帰されてるよ。江戸時代のおふれ書きに、お茶とか遊びを好む嫁は離縁せよ。とある。結婚してからは、ちつとも一人で旅行ができない。」とほやいている。

国内旅行では、たいてい義母と一緒にであるが、義母はパスポートを持って居ないので、グアムへは珍しく親子水入らずで行った。旅慣れている主人は、

「着替える必要なら、向こうで買えば良い。日本人はねらわれやすいから、カメラや大きな荷物は持たないように。」と、パスポートと最小限のお金はポシェットに入れ、あとはゴールドカードだけで荷物は持たない。ツアーより自由気ままな旅の好きな主人。割高になるが団体の中に入るのじやなく、ホテルと飛行機の手配だけを頼んでグアムへ。

ホテルまでの乗り物の手配等、雑事は自分達でやる代わりに自由である。

翌日は海で泳ぎ、主人が子供達に「せっかく来たんだから、水上スキーに乗

せてやろう」と心配する私を残し、三人で姿が見えなくなった。しばらくすると、「大変!」と息子が戻ってきた。

誰かがしたのかと驚いて聞いてみると、モーターボートの運転手が、「サービス」と言っ

てて急旋回をして、スキーが転覆、哀れ主人の眼鏡は深いマリンブルーの底。眼鏡は旅行に際してかけていた保険で後日作ったが、眼鏡がないと〇・一以下で何も見えない主人。車の国際ライセンスを持っているので島の観光の予定だったのが全部パー。タクシーで買

い物だけだったが、後はよそへ食事に行くこともなく、ホテルの食事。ブランドの財布を高い値で買っ

てしまつて悔しい思いをしたり……天気予報で台風が近づいてきていたので、帰りの飛行機が飛ぶか心配したり……これは義母を日本に置いて来た罰なんだろうか? いやいや、誰もけがせず、眼鏡だけの災難で済んだと思えばと考えたりもしたが、

「今度、来る時はマંションを借りて一月位ゆつくり来たいね」と主人。

これに懲りて、以後の旅行には予備の眼鏡を必ず私に預ける。そんな風に、いろいろな所でアクシデントに遭いながら、楽しい思い出に変わっているのである。



小林周信さんを偲ぶ

穴 吹 尚 士

五月二十日早朝、突然あなたの訃報を受けました。肺に溜まった水を抜くための入院だから見舞いは不要との葉書を頂いて、正直にお見舞いも控えて、復帰されるのを心待ちにしておりましたのに……。

平成十一年春、会社のOB会総会で川柳同好会（そうりゅう会）発足の案内があり、その指導者があなたでした。

そうりゅう会では、十名足らずの超初心者があるの膝下に集まり、生れて初めて句会と称するものに出席しました。

当時の句報を読み返してみますと、川柳とは言うもののいずれも著にも棒にもかからぬ代物ばかり。これほどひどいものを、毎月懇切にご指導頂いていたのかと、今更申し訳なく思っています。

あなたはいいつも「できるだけ多くの句会に出席するように」「なにわ柳壇をはじめ新聞雑誌に積極的に投稿するように」「たとえ入

選しなくとも自身のボツ句と入選句を比べながら読むことが勉強になる」と指導されました。

あなたのご指導のお陰で「そうりゅう会」も今や会員二十名を越し、その半ばは川柳塔の同人誌友となり、日々句作に励んでおります。なにわ柳壇をはじめとして会員の入選も日増しに多くなり、奇しくもご逝去の前日のなにわ柳壇「似る」では四十句の中で三句の入選を果たしました。この入選句のご批評を頂けなかったのは誠に心残りであります。

川柳塔の理事に就任され編集部の仕事に携わられてから間なしの、ご発病、闘病と伺っておりまして。

柳人として、川柳界への寄与、後輩の育成に多大の力を注ぎ始められて、まだまだ多くの業績が期待されておりましたのに、残念でなりません。

平成十三年夏には二周年を記念して、各自自選十句の「そうりゅう会句集」を刊行しま

した。あなたの序文を巻頭に頂き、それぞれが駄作をなされました。あなたは、聞き上手忘れ上手でいい仲間

ゆつくりと歩き自分がよく見える階段を一つ昇って視野変える

見舞客カステラ一つ持ち帰りおみくじの好きな女の男運

どん底で結ぶ絆に嘘はない

そこそこ済ます師走の立ち話
いい目覚め一夜で消えたわだかまり
妻の留守至福と思う昼の酒

の最後に

役割を果たし枯れ葉は地に還る

を選んでおられます。

何か予感されていたのでしょうか。

あなたは家庭人として、社会人として、柳人として、穏やかな顔でその実、いつも力の限りご努力をなさってこられました。

役割を充分に果たされたとは思いますが、まだまだ期待するものが大きかっただけに、余りにも早く地に還られたと、口惜しい限りです。

あなたの柳人としての意志を継いで、私達もこれから精一杯努力して参ります。

どうか、安らかにお眠り下さい。

お別れの涙に曇る五月晴れ 尚士

本社 六月句会

六月六日(木) 午後五時半
ア ウ イ ー ナ 大阪

梅雨入りもまだなのに、盛夏を思わせる暑さが続く六日、六月句会には汗だくの百十名の参加を得て夕刻開催された。

まず、過日逝去された里小路氏(参与・寝屋川市)小林周信氏(理事・大阪市)のご冥福を祈り黙祷を捧げる。

お話は前にもつ氏。昨年三月大阪の中心部へ引越し、以来大阪城公園のウォーキングにはまっている。(地図を使い熱心に説明)

大阪城 毎朝妻と手をつなぎ たもつ

生来喘息気味で、かつて漢方の医者のお勧めによりウォーキングで軽快した記憶から、転居の機会に再開した。毎日一時間、土の道を約七千歩。結果、半年で体調は良くなり喘息も治った。

葉捨て自己療法で生きている

毎朝歩いているとホームレス問題をはじめ勉強になることが多い。

「人生の達人もいる青テント」「週二回炊

き出す鍋へ列続く」の二句で結ぶ。

月間賞は西内朋月さん(川西市)に輝く。

(司会)柳弘(記名)月子・澄子
(受付)あやめ・義子(清記)尚士

席題「雨」

鶴田 遠野選

雨宿りつい表札を見てしまふ

一步

コヒーと話の弾む雨の午後

能子

土砂降りになれば決心出来たのに

弘一

俄か雨無人の駅の情け傘

諷云児

雨の日はにわか詩人になれそう

茜

あめあめ降れ母さん僕が一人じめ

ルイ子

雨だれの音が孤独へつき刺さる

千里

やらずの雨もたつく恋の背を押す

楓楽

企みを見抜かれている今日の雨

瑠美子

逢いに行く心見透かれ雨となる

人代

雨続き猫も私も自閉症

とし子

雨をよるこぶ赤い長靴赤い傘

一風

絵手紙を飛び出しそうな雨蛙

かすみ

ノーマア非核を願う黒い雨

セツ子

金子みすずをひらく小雨の降る窓辺

桂香

雨の日のデパートまたよし傘の中

いわゑ

長雨に長期休暇の万歩計

修

雨よ降れ昨日の罪を流したい

いわゑ

騒がしい一日だった雨上がる

義

傘抱いてババ待ち兼ねるお下げ髪

尚士

メールより声が聞きたい雨の夜

達子

予報官雨の功德を説いてはる

ダン吉

午後のお茶雨の序曲を聞いている

澄子

別れる日雨でも履いていくヒール

雨やどり美人の横で落ちつかず

雨天決行感情論の真ん中で

どしゃ降りですら空気になる招待席

雨あがりまた初心から出直そう

哀しみの深さへ雨が降りそそぐ

肩を打つ雨はふたりに銀の粒

自己嫌悪激しい雨に打たれたい

外は雨タンゴの曲を口ずさむ

住

雨天決行ここから先は神の手に

雨雨雨の恵みの千枚田

雨の日の珈琲館の無言劇

悲しみを思い出させる雨期のうつ

あじさいは一雨欲しい色で咲き

核の傘半世紀もの雨宿り

雨の日を選んで雨の旅に居る

雨季乾季生きる辛さと有難さ

雨漏りも気づかぬままに倦怠期

軸

兼題「まだ」

福井 桂香選

肝心の用まだ言うてない長電話

叙位叙勲まだまだ目指すものがある

だってまだ女を抱いたことがない

まだ呑んだ事ない京の奥座敷

(奥)五月

森子

則彦

澄子

森子

隆盛

泰子

義子

扶美代

柳弘

千里

昭

三男

尚士

笛生

希久子

天

希久子

満津子

充子

螢

利昭

好きやねんまだよう言わず酔うた真似
祖父米寿まだまだ張りのある謡
燃える血が流れ続ける八十の恋
まだ九十恋も仕事もしていません
年老いた母より先に死ねません
まだ恋ができる銀髪なでつける
まだ五欲恥かしいけどございませ
速達にしたのに返事まで来ない
妻はまだ口を閉ざして許さない
まだ少し未練があつて押さぬ判
星空を見ている二人まだ他人
まだ来ない君と僕とのキューピッド
大好きな彼と接吻まだしない
ロボットにまだ芽生えない恋ころ
試着室まだまだ捨てたものでない
肺がんと言われてもまだ煙草吸う
まだ欲が残つて墓石まで値切り
握手した手のぬくもりをまだ信じ
まだあかん言いつつ蓋を開けたが
理想の職がまだ見つからずバラサイ
初夏の風恋のきざしはまだ吹かぬ
元かれのメール未練があるらしい
愛はまだ未完で楷書ばかり書く
老木の気品まだまだ衰えず
散つてもまだ慈愛をそそぐ桜守り
夢は今半熟卵を抱いている
ひとりまだ戻らぬ夜の茶碗むし
八合目まだまだ汗は厭わない
神さまが死んだ噂はまだ聞かぬ

哲男 正雄 セツ子 一歩 舞夢 真理子 朝子 泰子 瑠美子 鐘造 柳弘 かすみ はじめ 希久子 諷云児 度 とし子 たず子 典子 弘一 瑠美子 天笑 楓楽 求芽 義子 森子 文 ダン吉 弘一

付和雷同まだ消しゴムが離せない
まだ核が足らぬとヒト科騒がしい
佳
まだまだと何時まで焦らす夏帽子
まだ少し走れそうです発車ベル
まだ拗ねている子にラムネ抜いてやる
まだ息を止めるのですかレントゲン
満月へまだ断ち切れぬことがある
人
表札にまだ父さんは生きている (志) 千代
地
そのまままだ置いてある子供部屋 保州
天
まだ脈があるんだ今日も叱られる 一風
軸
ハッピーロードまだ決めかねるラストの絵
兼題「物」 玉置 重人選
物の弾みでウエディングベル鳴らす 充子
金が物言うて裏木戸すうーと開く 正雄
物言えは何時も矢玉が降り注ぐ ルイ子
ブライドが物にけじめをつけたがる 澄子
物ごとに動じないのはいつも妻 一風
リストにはのるが物大いつも逃げ 洞庵
我が物となつて重たい屋根瓦 アキ
物さして計つてみたい愛の距離 いわゑ
よく滑る口が物議をかもし出す 寿美
物語ですがと本音しまい込む 正雄
物置の奥に出すことはない宝 求芽

辞職するまでは肩書き物を言い
欲しい物教えてくれるコマーシャル
物臭な夫が動く何かある
欲しい物もう何も無い命だけ
母が来る荷物にならぬ愚痴を持ち
そんな物まで捨てる報いはきつとくる
姑の物差しとうに戸棚にしまわれる
手荷物が三つになると要注意
大物にしては細かいことを言う
お菓が大事なじいじな物になり
大物となれ保育器の大あくび
物にした修行辛さは口にせず
幸せは食べたい物が食べられる
引出しの中で小物が騒がしい
男物干して用心する美人
初物の値にふれ母は箸をとり
白い物からいただいている自信
物欲を捨てると人は眠くなる
本物の恋かごはんが食べられぬ
虫干しの母の着物が語りかけ
母さんの荷物の中にある温み
物言わぬ花にたっぷり水をやる
佳
物の無い国で綺麗な眼の子供
わたくしが魔女でお話統いてる
本物のよう光つてくるくすり指
火も水もくぐつた人の物わかり
物欲に負けて心が枯れてゆく
金太 真理子 一知 弘風 昭 保州 たず子 冬葉 玄也 典子 諷云児 憲太郎 能子 泰子 扶美代 鹿太 朝子 朋月 五月 義 賢子 篤子 洞庵 楓楽 朝子

人

古箏筒父母にもあつた物語

地

お互いに物足らんけど夫婦なり

天

身に含うた物指しですのお付き合ひ

軸

進物のリボンが赤い下心

兼題「磨く」

大内

朝子選

十年前の靴を磨いて履いている

妻と娘がエステ通いで競い合う

磨かれた脚はボールを天に蹴る

速球に磨きをかけて出番待つ

趣味ひとつ磨きダイヤに縁がない

ゴルフクラブはビカビカですが下手ですね

淋しくて鏡を磨く晴れるまで

あかんたれ母の涙に磨かれる

不況風磨いた腕が宙に浮く

残り時間磨く石けん泡立てて

磨かれた才能莫山の筆遣い

原石と信じて明日へ子を磨く

土器磨く卑弥呼の声が聴きたくて

七人の敵もそれぞれ靴磨く

丹念に磨くと光る石を持ち

鍋磨く今日はご機嫌いいらしい

美人だが心磨けと言う鏡

磨かれたワイングラスがしゃべりだす

磨こうと思う心が続かない

(矢)五月

天笑

義子

螢

遠野

たもつ

三男

あやめ

三喜夫

英子

茜

一知

扶美代

柳弘

セツ子

諷云児

桂香

篤子

房子

鐘造

洞庵

求芽

何はともあれいつものように歯を磨く

磨かねば脳が退化を狙つて

手こずらす子らが磨いている教師

嘘少ない混せて美辞麗句を磨く

磨いたら光ると信じ生きていく

ていねいに磨く自分の歯を磨く

おもむくに磨いて見せる骨董屋

育てた子磨いてくれたのは他人

善人の手で艶が出るおびんずる

私を磨く机を拭いている

根気よく磨くお鍋も私も

磨かれたうそと遊んでいるグラス

ライバルという格好の研磨剤

悪口を言わないように歯を磨く

住

孤に耐える私を磨く時だらう

切っ先を磨いて風を待つている

針の穴磨いて愛を探つて

にんげんを磨けば空気澄んでくる

支え合う愛ビカビカの車椅子

逆風にしっかりと夢を磨いて

心まで磨いてくれた山の宿

天

台所磨いて今日も悲無し

軸

萎えぬよう五感を磨く恋をする

能子

英子

遠野

楓楽

保州

いわゑ

美代子

とし子

真理子

萬的

典子

(矢)五月

保民

洋

保州

ダン吉

森子

修義

澄子

ダン吉

天笑

千枝子

兼題「困る」

川島諷云児選

雨が降っても困る降らないのも困る

お尋ね者の写真が僕に似すぎて

振り上げた拳を降ろすのに困る

老いてなお丸くなれないのも困る

A型でなかなか前へ出られない

三人に一人は古稀と言う団地

昼抜いてきたのに会議お茶も出ず

困るのは手ぶらで来いと言う誘い

頂いて褒めようのない社長の書

生活に困つていても生きている

商品券迷いましたと書いてある

バリアフリー工事中です車椅子

家のことはつたらかしで町の世話

応援の過熱も困るフリーガン

困つたらしいも神さま仏さま

忘れたら困る自分のフルネーム

居眠つた隣の美女がよりかかる

困つたらおいでと神は如才ない

丁寧な礼状重荷になつて来る

首から上元気づきるも困ります

煙草喫う場所見当らぬ駅になり

悪友が断酒の僕を呼びに来る

達筆へ返事書こうか書くまいか

妹が兄の真似して困ります

母さんは困つた顔を見せなんだ

ベイオフに困る苦勞をしてみた

献立に困つたらしい冷奴

イエスともノーともとれるから困る

螢

洋

森子

みつ子

妙子

義子

篤子

正坊

尚士

舞夫

哲一

正雄

隆盛

伽羅

かすみ

とし子

鹿太

萬的

たもつ

紫香

金太

文

伽羅

瑠美子

弘風

(志)千代

修

貧乏になれて困らない

妻よりも長生きしたらどうしよう

困ったとは言わない父の道具箱

一足の草鞋どちらも脱げぬから困る

ずっと金無いので余り困らない

ポップコーン隣で食べる映画館

近松の濡れ場で咳が止まらない

落丁のあたりで困り切っている

登らせておいて梯子を外される

お心遣い少し重たく思います

困っても魂だけは売れるものか

困ったらいつも煙草に火をつける

姉からも妹からも惚れられる

天 天 天

独りでは背中に貼れぬ貼り薬

かくれんぼ影がつげ口して困る

兼題「有名」 河内 天笑選

お米屋を有名にしたつばめの巣

ドタキャンの宗家が払う有名税

全国に名をとどろかす河内弁

芸の道名の出る頃は粗も出る

有名な子の有名な親になる

名優の後姿に魅せられる

有名な山より故郷の山や川

保州 義

澄子

美代子

月子

朝子

茜

扶美代

鐘造

扶美代

楓楽

金太

天笑

泰子

泰子

柳弘

鹿太

一知

能子

千代

高栄

日曜の秘境は銀座並みだった

有名になり過ぎ弾は四方から

ハナエモリ時代の波に逆らえず

有名になったと顔に書いてある

新聞で見たぞと友の葉書くる

有名な世話やきがいるご町内

有名な橋の下にも青テント

野次とばすのが有名な議員さん

名が売れてから胃薬が手放せず

有名になって安い肉は買えず

有名人名外に小さい幕の石

僻地校選抜に出て町光る

有名な先祖を泣かす二世三世

カレー事件また古里が晒される

イチローも宗男も同じ鈴木さん

有名になった証のスキヤンダル

親戚に有名人が一人居る

紹介をされて穴場が一つ消え

人間国宝家では只のおじいちゃん

有名になって親子が遠くなる

名をあげてカメラに監視されている

マスコミが有名にする只のひと

ジミー君笑われた過去今は画家

有名になって貧乏しています

有名な播磨屋橋がこれですか

小さい村有名にしたカメルーン

有名も無名も介護保険料

鐘三つしばらく近所騒がせる

保州

東雲

憲太郎

ダン吉

昭

シマ子

岳人

洞庵

希久子

義論

愛論

武庫坊

求芽

たもつ

伽羅

五月

千枝子

三喜天

メ女

いわゑ

とし子

朋月

ふりこ

ばっは

則彦

一歩

かすみ

一知

有名になれば昔が顔を出す

有名になつてうかうか喋れない

人 哲夫

イチローは打たないとおばあちゃん

有名になつたらサインしてあげる

地 金太

有名な足蹴りあっているピッチ

天 西内 朋月

名が売れて自民党から誘いの手

軸

課題「さんま」(秋刀魚)

入賞90人にさんま進呈

はがき一枚に2句(一人二枚まで)

住所、氏名(柳号) 電話番号明記

〒988-8501

投句先

気仙沼市役所内「さんま川柳大会」係

七月三十一日(水)消印有効

締切

川柳けせんぬま吟社選考委員会

一次選

川柳宮城野社顧問 ちば東北子氏

二次選

九月十日(火)さんま川柳全国誌上

発表

大会号

発表誌希望者は郵便小為替七百元

を添える。投句同封の際は用紙はがき大

賞 作品賞90句他

主 催 さんま川柳大会実行委員会

主 管 川柳けせんぬま吟社

後 援 全日本川柳協会・川柳宮城野社

第九回「さんま川柳」全国誌上大会

わんぱく

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

川柳ねやがわ (前月分) 江口

度報

好調の波に初心をふと忘れ
二番手でトップをさぐる息づかい
好調の波は早めに引いてゆく
好調に白髪がふえた誕生日
在りし日を偲び別れの弔辞読む
握手して別れた友の計に啞然
辛抱すな帰って来いと里の父
ケセラセラ別れ上手が泣いている
腐れ縁切れて左遷もいいとする
格好よく別れた背が泣いている
大軒かくのて別居しています
もう二度と逢えぬ予感の手を離す
芽吹く木に誘われて行く万歩計
人間には芽ぶいてならぬものがある
毒草も新芽のうちは初初し
嫌なことぴりりと消した山椒の芽
育つ芽もしばむ芽もあり師の言葉
芽吹く木木わたしは迎えられて
大阪を太陽の塔見張り番

時弘 博泉 とし子 三郎 庸佑 あやめ 冬葉 修 朝子 かすみ 仁清 弘風 弘一 一風 吉之助 英王子 日出子

USJ大阪に住みまだ行かず
大阪の讃岐うどんに腰があり
春うらら蕪村さがしに毛馬の土手
大阪の天気予報も母は聞く
大阪の匂いへ降りる旅がえり
極楽の裏木戸だろう天王寺
納得はしないが頭下げておく
公園は一期一会の日向ほこ
善人と思われている鼻眼鏡
ぼつと桃咲いてうららになる私
坂道を妻がどんどん先を行く

さち子 三峰 茜 恵子 光子 順三 ルイ子 高栄 忠央 利昭 洋

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

身の内に満ちるものなく流される
法改正いつも弱者に流れ弾
永田町流されるなら洗いたい
こだわりと色が素直に染まない
回転寿司皿の数に負けました
若い頃眺めた川は青かった
失敗も若さのせいにしてしまふ
お若い世辞ににんまりしてしまふ
若い時の私を見るような嫁
足萎えて妻の元気に時にいらだつ

あずき 欣史子 香住 慶子 会美 千代 能子 アキ シマ子 弘直

ローズ川柳会

山崎 君子報

まごころを送るまごころ返される
みつばにらあなたの愛が庭に萌え
送られた干物小出しに故郷の味
人間と人間だから喧嘩する

みつ子 貴代子 てる いわゑ

年寄りの冷水だがと前置きし
送別の言葉にならぬ若く逝く
いい旅をしているらしいエアメール
千手観音の抜けるお手は大きいな
音域を抜けて今夜故郷下りる
拡張の店舗さびれて幕下りる
おてんばでおしやべり上手孫三歳
迷わないタンポポのわた奔放に
月下美人送りし人の遠く棲む
割り切って渡ると余生明日がある

キク子 藍 澄子 義孝 哲一 ミサヲ トミエ まさお 武庫坊

いずも川柳会

佐藤 治代報

残照のこんなところに有ったドア
生き残るドンコも軽く砂をはく
残業の明かりが景気つけている
どの種も少し残して蒔いている
私を残して独走する時間
スリル満点思つた後の不整脈
絶叫のスリル火の輪をくぐり抜け
崖つづち好きなてんでてまりです
懷でスリルの種を温める
加速度をつけてスリルの赤トンボ
魚とは哀しい距離にいるスリル
知恵種を持って内閣そり返る
シンプルな笑顔が好きな柿の種
種まきも終つて鳩はほつとする
根づいたら一歩たりとも引かぬ種
落ちこぼれた種がわたしの現在地
まいてやる種が大きく深呼吸

美江子 治代 与根一 忠義 多賀子 美佐子 多輝子 久子 多喜 歌子 章峰 夢醉 桂子 満江 カツ子 寿美 蘭水

決心をしてから種は口ひらく

断るとますます慕情つものらせる
要注意 妻がますます牙えてきた

再婚へますます元氣おしいちゃん
升二つ飾つて繁昌祈願する

言わぬが花ますます好きになるお人
読めぬからますます不安になるカルテ

回覧板持つて茶のみの小半日
エリートの回転椅子が回らない

回り道するほど温い風に会つ
よく回る舌に詭弁が遊び出す

老いた時計よネジは弛めに回すから
よろよろと回るコマだがしがみつく

岸和田川柳会

長谷川呂万報

銀行とうまく付合う小商人

ほどほどに付合う仲で争わず

何に不足だまつて猫が出て行つた

付き合ひも電話ひとつで潰される

付き合ひを折る電話へわざと咳

散歩するボチも付き合う長話

空徳利風が付き合う山頭火

出来事の言い訳下手が責めを負い

出来事がかもす茶の間の泣き笑い

寸劇になるかもしれぬ俄か雨

不祥事に慣らされて行くおそろし

特ダネに命をかけるカメラマン

出来事で飯面をぬいで憎まれる

湯豆腐の湯氣に向き合う老夫婦

畔

まこと

ちかし

茂美

玲子

さみえ

芳枝

房枝

昌枝

淞丘

紫晃

ちえ

れいじ

昭二

蛙城

東雲

英雄

力子

守

仁緑

洋

狸村

白光子

苑子

穰一

けい子

岩夫

夏は来ぬ貧富は問わず冷奴

新世帯豆腐こわこわ切っている

煮詰つた豆腐の樂し鍋の底

湯豆腐で愛が芽はえた南禅寺

慰めの筆が生きてる老いの趣味

泣き笑いさせてなんぼの喜劇人

慰めて叱つてはめてレギュラーに

慰めたつもりがなぜか泣かせてる

握る手に無言慰め通じてる

会うだけで慰めもらう友の笑み

言葉などいらぬ時間が慰める

川柳塔みぞくち

小西

雄々

善をして今日の実りを感じとる

人生の実る樹を植え夢を持つ

実りみて次の対策知恵しほる

好い話実り幸せかみしめる

豊作に湧いた昔が懐かしい

今がある実り信じた夫婦愛

実りある心が欲しく写経する

雨風にもたわわに実る山ぶどう

一坪の畠にも実る豆のつる

汗と涙で実りうれし金メダル

組替えた遺伝子やはりよく実る

高槻川柳サークル卯の花

川島諷云児報

飯面脱ぐスリルが欲しい八十路坂

ライバルの足を掬つてやるスリル

体感のスリルへ父は手をかさず

みつえ

甚一

一脩

弘子

さよ子

植代

ふみ子

房枝

東吉

路子

呂万

正光

智恵子

弘子

康女

豊枝

静江

久代

和枝

鈴枝

公美枝

雄々

体脂肪知つてトンカツ食うスリル

夫婦独楽一緒に転ぶスリリング

仲直りした弁当のプチトマト

お誘いにわくわく老いのイヤリング

好きなこと見つけわくわくして生きる

ふらり来てわくわくさせただけの春

立ちのぼる湯氣の向こうにある平和

湯加減にこだわりがある祖母のお茶

湯治場の恋方言を意識する

思い出をやさしく癒す湯の香り

ぬるい湯のように沁み入る愛もある

湯沸しの音が癒しのワンルーム

湯につかりしばし艶歌の友となる

お湯割りで豪快にやる勝ちいくさ

掃き溜めに鶴とわが子を買ひ被る

孝一

加寿老

澄子

稲子

活恵

鹿太

泰雄

庸佑

無祿

あやめ

満寿蔵

義一

秀夫

克治

佳句地十選

(6月号から)

浅野 房子

ロゼワイン恋の魔法にすくかかる

小豆煮るなんかしらんが楽しくて

暗号をわかつてほしい白い白ら

白樺一期一会の風を聴く

納得をしたケリだから笑つてる

こころ今異常乾燥注意報

倅を書き足してゆく無地の画布

神様も絵馬の数だけ汗をかき

可能性今階段を降りてくる

朝の氣を一ぱいに吸い悪を吐き

みつ子

義子

いわゑ

たず子

保子

楓 楽

シマ子

遠野

扶美代

文

うちの子が一番可愛い入学式
下宿代なにに消えたか知らぬ親
戻らない子等待つて夜が明ける
新婚の嫁へ毎晩電話する

親馬鹿の夢に重たいランドセル
ともだちの家へ泊ると信じてる
内助の功無くなり離婚増えている
紙一重奇跡は神のおはし召し
美味かつたなあ安かつたなあ二日酔い
翼を下さい空翔ぶ夢は捨ててない
電話帳の重さよ遠い人を恋う
生き方を少し変えよう春だもの

川柳塔おっぱい吟社

木村あきら報

血の絆々に乱れる遺産わけ
消費者は嘘八百を食わされる
永田町を抜けると嘘の要らぬ街
石一つ投げて相手の出方待つ
花の下野点の釜に湯がたぎる
草津の湯風呂の中から湯もみ唄
つまずいた石から学ぶ渡世術
都合よい事だけ聞こえる老いの耳
打ち明けて話せば刺も抜けてくる
忘れたい過去を他人は触れたがる
週刊誌巡るたびに首が飛ぶ
湯タンポの杵軒下に掛けてあり
おこぼれを頂き我が家花盛り
二人して築いた積み木ゆるがない
湯当りをするまで浸る温泉狂

尚士 求芽 晴美 光穂 五月 重人 治三郎 武史 節子 諷云児
ひかり あきら 賢 かおり 吟笑 治延 いさむ 八重子 文仙 勝 輝夫 貞月 寿々女 よしみ 放任

天馬にもなろうと遺産子が跳ねる
新時代メールで行き来する時代
うたた寝にそつと布団を思いやり

東大阪市川柳同好会 森下

愛論報

家族みな思惑がある寒日和
ご無沙汰の詫び状届く寒日和
寒日和いのちを洗う水を汲む
走つたら凄かるうと見る仁王
定年後まだ小走りが続く闇
走らねば影が私を抜いて行く
辞書の上走り回っているクイズ
紙人形少女の脱皮知っている
因習に人形反旗ひるがえす
人形を人たらしめる腹話術
夕焼け空なお美しい和解して
難問が次々解ける定年後
結び目が解けてひとりになる門出
勝手耳悪い事なら良く聞こえ
雑音は聞こえぬ耳で輪をつなく
月満ちて命の音が届く耳
春の耳洗つて光る音を聴く
愚痴聞いてあげる優しい耳がある
竹原川柳会 時広 一路報

坊太郎 はつ恵 正雪 庸佑 弥生 愛論 萬論 シマ子 信治 度 太朗 良子 宏 賢子 柳宏子 朝子 東雲 美弥子 章久 雅文 湖風 蘭幸 史子 千枝 民恵

竹伸びてイベント祭り待っている
春うらら竹原ヤッササ街をねる
ロケがあった古い町並み自慢する
咲く花を描いて気張る土作り
春の土ほつこりは今日命生む
石垣の僅か土にみどりの芽
土に坐しやが一つ石となる
大樹もいつかは土になる輪廻
ほんものの土に還つてゆく木の葉
小川さらさら土には土の彩があり
竹の子の土割る音を聞く囃
Uターン土の匂いをひとりじめ
ふる里の山の七仏春祭
野仏の辺りは今日も温い風
三回忌亡夫はいつもの笑顔だな
寝仏にのぞかれてる露天ぶろ
時どきは仏の前でいい子する
会者定離そして仏にまた会える
招待状彼岸の仏から届く
峰の青みんな仏の顔に似る
仏背に負うて歩いて六十三
母に似た桜の下に仏さま
花の下四月生まれの仏生会
川柳のはなしが好きなたち
木洩れ日がちよつと眩しい磨崖仏

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

髪洗う 未練は泡と消えました
苦勞した母の髪の毛薄かった

年子 房宏 正子 慶子 幸枝 一年 貞夫 節子 笑子 厚子 菁居 孝枝 汎美 千代美 敬子 半覚 寿枝 栄恵 輝子 淑子 不朽 静風 一路 里江 千恵

嬰兒の未来に無限の夢がある
有事法無限の平和危うくす
ルート3無限の愛を信じよう

風無限墓地に念仏子がまもる
愛無限神はウフと絵馬を読む
恩愛の海は無限の色で澄む

小柄で地味僕にはでかいおやじの背
遠くから軽い会釈で仲がよい
身を守る小さな鍋をみがき上げ
蒔く種子のあたたかきものたなこころ

入選の絵と問答の息づかい
山葵田の山のせせらぎ花笑う
堪忍の袋は妻に押しつける
鯉のぼり大気汚染の中泳ぐ

一本の歯痛で思考回路切れ
忠魂碑訪う人もなき夕日影
遠い軍歌が表われそな風が吹く
ひき出しは空っぽ夫はもう居ない

夜明けの雨すなり俺を手なずける
地下街の噴水五月の風知らず
犬ほうずき現状維持という墮落
時効なき弔旗は風をはらんでる

無駄骨が折れて動かなくなった蝶
かりそめの位置で葉指のリング
ふくべむら川柳
橋本多哥由報

糸子 幸子 満寿蔵 十四郎 勝巳 比ろ志 孝一 昭三 しづ子 光穂 寛之 正子 東園 志激 純 義芳 武庫坊 静 全彦 半蔵門 久子 定男 芳子

逃げ道を考えてから意見吐く
水道の流れ選挙が変えました
色っぽさ負けてたまるか姥桜
古里の小道満足して歩く
人間は一に道徳二に学び

三幸川柳教室

三宅

保州報

映画跳ね夜啼きうどんで人心地
スキップで跳ねる娘のいい便り
魚拓から尾鰭が跳ねる音がする
インターネット脳細胞が跳ねている

飛び跳ねるチャンスへじつと風を待つ
ムツゴロウも跳べぬ元氣のない干潟
七転び八起きでタルマ跳ねてみる
アイドルが跳ねると上がる視聴率

ちよつと恋したい今宵の紅桜
つべんから花を見守る多宝塔
お花見の序で遺跡も見て帰る
見てくれる人はなくとも山桜

在宅介護さくら咲くすと咲くまいと
けれん味が独り占めする花の下
生き延びて一期一会の花の下
明日は散る花とは知らぬ蝶の舞

縄張りが年々狭くなる花見
絵筆から春らんまんの花開く
似顔絵をまともにも画いて憎まれる
モノリザの絵と問答を繰り返す
絵心をちくりと射した夕景色
絵はがきに羽を伸ばした跡がある

春恵 昭恵 寛子 信子 静子 豊太郎 清 章子 一步 嘉平 さち子 イセ 碧 登美代 和代 マリ子 千秀 みね 公子 町子 鉄治 朱夏 敏子 正一 栄之進 正匍 幸子

びっくり箱開けた途端という写楽
ふるさとの山河絵にする春霞
その時の都合で歳が替わります
都合など言えなくなった金バッジ
医者都合で二度も切腹させられる
都合など言っておれない二度の職
散り時は風の都合という桜
人間の都合を通しすぎないか

京都塔の会

都倉

求芽報

和子 利治 起世子 昇 伸二 かず子 桂香 保州 春蘭 篤子 達子 正坊 しげお 満子 柳宏子 幸代 萬的 だだし 庸佑 満寿蔵 克治 求芽 益子 福子 典子 宏子

てのひらのいけず煮て食お焼いて食お
女同士いけずな視線で値踏みする
目に見えぬいけずの街に棲んでいる
気づかいはいけずか私だけ呼ばぬ
いけずする場が一番すばしい
老舗継ぐ父の免許が厳しすぎ
年重ね奥義にやつと届きかけ
免許証趣味と実益豊かなり
でも嬉し優良運転表彰状
免許皆伝姑から受ける嫁になる
道楽が遂に名取りとなる踊り

川柳塔唐津支部

久保

正剣報

年寄りのだまつていくとそつと告げ

實

半世紀平和に酔った太鼓腹

兵八郎

銀行利子じゃ素うどん食べられぬ

輝夫

客もない玄関花は絶やせない

勝視

浮雲や花の生命の清美さん

水笑

遠来の友にたつぷり新茶注ぐ

晴翠

父さんが見れば頼れぬ優おとこ

高明

鳥の鳴かぬ日も不気味ですヨ

虹汀

粗食にも耐える金魚を買う夜店

四郎

世間体気にするほどは気にされず

正剣

川柳大阪

高木

信幹報

旗手を切り下がる支持率どう守る
ちよつとでもいいじゃないか気は心

喜楽

炭坑節老人会はよくはずみ

三十四

スパーのカニが不満の泡をふく

民子

友愛と信義へワークシェアリング
功労賞たんとあげたい母のシワ
定年退職家族みんなの賞である
職人の賞と無縁の荒れた指
雪かむり水仙凜として主張
美人見て振り向き妻に叱られる
花ことば知らない妻の誕生日
咲いて散る花は生涯良しとする
美人薄命うちの母ちゃん大丈夫
やせ細り残り少ない親の脛
新婚さん膝すり寄せて窓の月
少ない髪前に後ろに振り分ける
恋文の別れをきれいな文字で書き
賞味期限切れても私お月さま
美しい心の羨む世相
美しく生きる余生も汗をかく
友情が少なくなった雪だるま
紹介を待ってたようにプロポーズ
大賞と無縁草刈るボランテア
ひとつそりと咲く水仙に憧れる
花かごに夢がいっぱい盛り合わせ
幸あれと舞う花びらに心咲く
少ないな本当の事を言える奴
きれいだなあ花の精かも知れぬ女
美しい夕焼け明日はいい日だろ
波あれど梅も桜も酒もあり

友愛と信義へワークシェアリング

本蔭棒

功労賞たんとあげたい母のシワ

春蘭

定年退職家族みんなの賞である

一步

職人の賞と無縁の荒れた指

金太

雪かむり水仙凜として主張

ダン吉

美人見て振り向き妻に叱られる

利昭

花ことば知らない妻の誕生日

敏

咲いて散る花は生涯良しとする

洛醉

美人薄命うちの母ちゃん大丈夫

柳弘

やせ細り残り少ない親の脛

青道

新婚さん膝すり寄せて窓の月

照月

少ない髪前に後ろに振り分ける

孝峰

恋文の別れをきれいな文字で書き

川童

賞味期限切れても私お月さま

鉄心

脱サラへ故郷の山呼んでいる
山登る先祖の声にけつまずく
窓ガラス拭いて春咲く音を聞く
割烹着ははずして花の咲く話
肩書きをはずして土と仲が良い
進学へ喜怒哀楽の風に会う
咲き満ちて許された愛だきしめる
わらべ唄流れて里に花が咲き
未練ありまだ終幕は下ろせない
さあダツシユ野辺の小花が呼びかける
花吹雪あびて今年も浪人か
桜咲く逢いたい人に逢っておこ
土つきの野菜の味にはれなおし
うるさいのがうるさくなって幕にする

脱サラへ故郷の山呼んでいる

純子

山登る先祖の声にけつまずく

美智子

窓ガラス拭いて春咲く音を聞く

多美子

割烹着ははずして花の咲く話

八重子

肩書きをはずして土と仲が良い

とみ子

進学へ喜怒哀楽の風に会う

靖子

咲き満ちて許された愛だきしめる

寿子

わらべ唄流れて里に花が咲き

つや子

未練ありまだ終幕は下ろせない

美緒子

さあダツシユ野辺の小花が呼びかける

穂子

花吹雪あびて今年も浪人か

開子

桜咲く逢いたい人に逢っておこ

君代

土つきの野菜の味にはれなおし

かはる

うるさいのがうるさくなって幕にする

可住

川柳塔鹿野みか月

土橋

螢報

そば道場にゆく沐浴の後でゆく

保子

沐浴の後のビールがうまいこと

久枝

沐浴へ戯れている小鳥たち

みさ子

厄除けにゆく沐浴の後でゆく

富久江

三グラム華麗に谷の湯あみする

孔美子

抜根の沐浴君のひざ枕

くに子

にんげんに戻れる沐浴が効いた

八重子

しっかりと括れるこの手まだ確か

諷人

胡蝶蘭の支柱を括り同居さす

睦子

宴つけた会を上手に締め括る

かつ乃

意見などちつとも聞かぬまま括る

和子

一括りしても残りが持ち切れん

実満

得意技括って納屋に放り込む

節子

贅肉を括りつけられ痛む腰

腹の中ハムがとぐるを巻いている
全て括つて一筋の煙にする

決められた括りと違ふ資源ゴミ

生き方を晴耕雨読とさめました

寄り添つてみても三歩の距離があく

男の子よるこぶ鯉がよく踊る

本物をよるこび手打ちソバの味

よるこんでみんな揃つた初節句

この耳は歓喜の声をきくと聞く

生かされているよるこびに愚痴こぼれ

よるこびの声空港は花ざかり

午前様待つてた頃が懐しい

チビリチビリ飲まにや夜警が動まらぬ

夜という空間がありすくわれる

真夜中に出て来る者を見て見たい

夢いっぱい花いっぱい夜の夜が明ける

川柳塔わかやま吟社

牛尾

緑良報

賽銭の五円仏と逢うために

俄か雨静かな街が走り出す

気まぐれに生きた私のラストラン

行列の頭を替えて生き残る

徒歩五分時計は嘘をついている

出し惜しむたつた五文字のありがた

まだ五欲あつて五戒に遠く居る

柿若葉目に染む五月いちち好き

ありがたや五百羅漢に亡父の影

慌でずにしつかり締める靴のひも

公子

石花菜

盛 桜

和 枝

武 子

茶 子

英 夫

喜 志

みどり

立 亥

房 子

きみ子

弘 子

はるお

汲 香

きみゑ

螢

さち子

美 子

和 香

結 実

豊 太

和 子

保 州

三 男

利 治

順 子

食べた後ニュースで慌てのむ葉

気まぐれがここにそ一人雨に濡れ

気まぐれではなさそう妻の乱に遇う

気まぐれな猫と退屈しう距離

駅の名にロマンありそう途中下車

気まぐれな女で手綱が離せない

気まぐれなミセスの財布狙われる

気まぐれ娘と給料前の待ち合わせ

気まぐれな私へ凶と諭す神

気まぐれな天気と悩む気象台

気まぐれな空へいそがし折りたたみ

お互いの気紛れ許し合い夫婦

行列の長さはお人柄だろう

行列だ何かいいことありそうだ

百名様までが気になる列にいる

蜘蛛の糸ちぎれぬように野辺送り

半世紀レジャーの列に居る平和

夢求め自分探しの列の中

稚児よりもママが衣装の較べつこ

行列に眼がはなせない稚児の母

長 柳 会

加 島

由 一 報

青蛙柳に器量見すかされ

探しものしてたら妻のへそくりが

青春に二人で読んだ枯れすすき

降るほどに縁談あつたような夢

降りだした雨に牡丹も傘をさし

降りそそぐ愛に染まつてパラサイト

青い地図抱いて都会へ行つたまま

紀久子

度

寿 子

輝 子

鉄 治

三喜夫

英 子

怜

泰 子

健三郎

千寿子

柳 宏子

大 輪

稚 代

和 重

射月芳

富美子

美 子

佐 一

あつむ

夢のまま終つたボクの青写真

青空に雲の落書き一直線

降り続きでてる坊主欠伸する

気が付けば雨がやんでたディタイム

願いごと星降る夜を待つ少女

一陣の風ひらひらと花吹雪

国民の総意に反す宗男さん

降るような縁組のがし歳重ね

フレッシュマンキラキラ街を闊歩する

青空を信じて居ますいい笑顔

先輩に道を譲つた青い風

五月雨と思えば楽し妻の愚痴

青い蚊帳遠い日の夢青い夢

エリートもハローワークでうつろな眼

故郷の夢を追うてる青りんご

健康にこだわる妻のプロッコリー

日中友好黄砂どつさりプレゼント

星が降る美しき眉近くあり

川柳塔なら

坊 農

柳弘報

男星野えくぼの底にある決意

やわ肌と孫のぬくもり頬寄せて

肌色が健康美の片えくぼ

宅配が元気な四季を載せてくる

にこやかな遺影に四季の歌唄う

一年生大きな声で初名乗り

福祉課の受付へ行く重い足

脱ぎ捨てたブルカの肌にある平和

会えば抱く孫のえくぼに見る絆

和 代

三和子

たけし

良 男

芳 野

ひろし

千太郎

輝 治

一 慧

潤 子

富美子

直 樹

けい子

和 子

正 子

正 一

幸 雄

由 一

さだを

敏 子

美和子

とし子

桜 竜

積 子

理 恵

佳 子

絹 子

人間味しみじみと知る癒し銀

受付に誰が生けたか百合匂う

阿修羅から四季折々に誘われる

四季感が無いと嘆いてゐる胡瓜

白足袋で着物の四季を引き締める

くすりより勝る白衣の片エグボ

化粧まだ肌になじまぬ新社員

隠しても肌は知つてゐる不摂生

鳥肌が立つ殉教の自爆テロ

人間のエゴがなくなつた季節感

奈良の笑顔疲れが癒される

削られた山肌が血を吹いている

評判のソフトへ並ぶ受け付け日

受付の花一輪にある癒し

乳飲ます時のえくぼは親世音

来訪を魚拓に託す禪の寺

旬の帯しめて女将の片えくぼ

ケロイドの肌が許さぬ原爆忘

磨かれて四季を忘れた葎たち

川柳塔きやらぼく

政岡日枝子報

風ひゆるる酔うて桜の花と揺れ

都市砂漠に孫はきつと根を下ろす

ライバルがあるから強くなれそうだ

山桜私の方を向いて咲く

ふるさは癒しの場所よお母さん

首に鈴つけて好みに飼ひ馴らす

むつみ
秋泉

修

恵美子

真理子

春雄

春蘭

章久

孝子

良一

太一

洋子

茂雄

ダン吉

和夫

朝子

卓

半蔵門

柳弘

道子

秋雄

瑞枝

玲子

富美子

すみこ

八重子

麗

雄大な大山の下育まれ

植山で嘶くしたたかないのち

新緑のなかの万象やわらかい

地味だけどやっぱり好きな野の小花

大切な目が文庫本におかされる

日々過ぎる刻がとつてもいとおしい

髭剃つて連休を待つ過疎の村

与野党のキャッチボールがうまし

あの人もしよっちゅうお留守遊び好き

風船を割つて子供に叱られる

乳房枯れても女の役はまだ続く

イーメールに熱中するお父さん

人工のひざで万葉の桜見る

水の神火の神宿は守られる

かわはら川柳会

上田

財産を譲る話に子が乗らぬ

キーパーはここは譲れぬ仁王立ち

譲られた服に昭和の香り止め

褪せぬまに譲り余生の旅に出る

風向きで譲らぬ風がもつれ出す

それらしく言葉の途中口はさむ

人生の途中静まり陽を期待

菜の花の黄色にひかれ途中下車

挫折せぬように途中で振り向かぬ

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

時子

千代

てい子

恵子

田鶴

由美子

すみゑ

蘭

天雀

千春

やえ

晶子

ゆき

日枝子

俊路報

輪多朗

静子

悦子

泰良

寿子

一薫

聴

雅子

俊路

慶子

香住

叩いたらびつたりそれからのラジオ

びつたりと合わないままに共白髪

楽しみは妻留守の間の盗み酒

氣に入りの靴で氣の合う人と逢う

巣立たせる楽しみがある母の汗

楽しみを採すレンズを取り替える

川柳塔まつえ吟社

津川

全没でわたしの中は空っぽだ

生と死の別れも同じ空の下

青空を全部掴んで寝転んだ

空回りばかりしている苦勞性

魂の空で戦友笑つてゐる

青い空まだ来ぬ人を守っている

オーイお茶只今新茶入れてます

新茶のむ笑ひ葉が入れてある

ゆつたりと甘い新茶に溶けてゆく

新茶飲み小さな勇気わいてくる

新茶飲み命輝くような朝

新茶摘み看板娘揃ひ踏み

一匹の真鯛魚拓の墨をする

一匹の虫を殺したほどの悔い

一匹の大蛇八つの瓶を呑む

荒縄で男一匹勝負する

同じ親から一匹ずつの個性持つ

一匹の鰯に海の話聞く

花嫁の父はムードに酔うばかり

シマ子

欣史子

弘直

アキ

能子

あずき

紫晃報

義良

政子

注湖

静恵

日出子

すみこ

茂美

小鹿

ちえこ

知恵子

主詩朗

与根一

房子

亮

浜丘

治代

ちかし

安幸子

俊一

たけし

おばさんが三人寄ればムードなし (多) 博子
春風のムードが熟女そそのかす 多賀子
ムードには遠い女の束ね髪 桂子
充電が出来てストレス吹っ飛んだ 邦代
充電がすぎれば理屈多くなる 澄子

充電をしよう明日元気になるために

一杯の酒で充電しています

充電をしろと朝から雨が降る

充電をして晩学の杖がさす

尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太報

胃が軋む約束ことが多すぎて
調子いい彼の約束信じない
リストラのように植木を剪定し
初曾孫元気で育て鯉のぼり
しかられて緑の下で深呼吸
気まぐれな風の芸術風紋美
打ち寄せる波と戯れ濡れる足
ボシエットに私の気まぐれ持ち歩く
いい時代過ぎて今なお追いつけ
ストレスを溜めて両手に花を買
父と子に約束なのであるのか
気まぐれをその気にさせた古本屋
緑の木陰定年過ぎた椅子がある
ぐい呑みの底に渦巻きた女舞
再会を約す一会の花見酒
不況風吸って泳ぐぬ鯉のぼり
味噌汁の匂いで起す妻の朝
音ほどは走れていない救急車

昭二 螢 邦代 桂子 多賀子 鹿太 幸子 江美 よし子 玉枝 カズ子 秋子 信子 まさ 耕治 龜子 昭三 孝一 正治 満寿蔵 十四郎 求芽

生きている証か今日も腹が立つ
妻とする約束だからすぐ忘れ
約束が重なるほどの忙しさ

川柳塔おとし

原 みさを報

人間も猫もルーズになってきた
幸せを探しルーズになってゆく
扇風機ストープ鎮座狭い部屋
針のない時計が欲しくなるルーズ
男好きルーズな癖は親譲り
ひとり居のルーズを責める速い暮れ
三食にひる寝でついたルーズ癖
聞き流す便利な耳を持つている
人様の特技にみとれ揺れてみる
頼まれたシャッター足が切れました
ごめんなさい大きなあくび出してしまう
真ん中をこめんと行って渡り切る
手渡してゴメンの気持届けた
ごめんねと言えはああるく済んだのに
ごめんとは言わず爛注いであくれ
集団のいじめごめんですまされぬ
証言に天下御免の嘘もある
角が出る前にごめんで丸くなる
ごめんねがいつでも言える口を持つ
ひとことのごめんが言えて晴れてくる
暇ななあもつたないが昼寝する
父さんと暇がきたら温泉へ
暇なしに動ける体ありがたい
母の日へ暇をたっぷりプレゼント

風花 螢 和子 雄々 大鯨 登美 庸二 宏章 道子 せつ子 由多香 真一 雅通 佳子 照光 小生 幸次郎 富貴子 孝子 邦昭 紀子 仁子 清子 艶子

寸暇でも充電しよう楽しもう
欲しかった暇も続くど持てあます
煩惱が暇をみつめて動きだし
子育てが終りパートで若返り
暇人が噂の種を提げてくる
日曜は少し下帯ゆるめよう

川柳塔打吹

米田

幸子報

兵隊のままだいいのでサボつて
兵隊で逝つた兄貴はまだ二十歳
腹八分口も八分で熟女生き
熟れる頃女も柿も虫がつく
脇見せぬ歩兵の駒が先手とる
ダメージのあとにそよ風待つて
クロスワード解くと兵隊走り出す
芝居では一人も死なぬ兵士さん
兵に告ぐ我が社只今火の車
台風でダメージ受けた梨畑
妖艶の熟女の誘い惑わされ
熟女たち男を頭で使つて
貫禄が出来て熟女の仲間入り
ダメージを受けたはずだがあの元氣
ダメージの顔顔顔の展示会
かき捨てて熟女天国露天風呂
熟女には下手にさわると火傷する
兵隊も静かに休む玩具箱
戦死した兵はバンザイなど言わぬ
老兵は右向け右でついて行く
兵役を終えて嬉しや母の乳

義弘 芙美 一弘 舍人 彰雄 みさを 玲坊 善江 たけ代 勝見 禎元 和子 忠良 紀美恵 泰山 晴光 和竿 美美子 幸香 孝恵 龍枝 博丈 睦子 かつみ 重忠 清

縄つきの箱で帰った強い兵
死んでくるなど神にも折る兵の母
わが家では先ずお茶よりもビール出す
熟女でも泣きます弥陀の前だけは
兵隊は裏切ることをまだ知らぬ
サイパンの海は兵士の涙かも
花の無い墓ンベリアで兵眠る
茶柱が立った茶を飲み火傷した
父ちゃんは一兵卒のたたき上げ

はたる川柳同好会

田辺正三郎報

ドアホン・屋根の不安を売りに来る
姿見に不安な影が付きまとう
俺の娘に惚れた男の目の高さ
一目惚れ何もかもが好きになり
惚れてはるらしい毎日見舞いに来
欲捨てて不安なさぞな仏顔
世の中のゆく世真つ暗不安です
正直に生きて手の風身にしみる
うすい髪濃いアゴヒゲと思索顔
危機感のうすさを見せた領事館
一目惚れたぐりよせたい赤い糸
起されるまで目が覚めぬの不安
秘密書類家に残して入院し
惚れはれと見とれてしまふ化粧映え
ゼロ歳児保育所預け出勤す
あれこれの不安したがえ四季めぐる
次の世を背負う茶髪に見る不安
帰る時決つてうすいお茶が出る

和歌子 季芳 よしえ きみ子 螢 節子 雄々 芳光 幸子
実 ヤギエ よしろう 長一 直次 勝 禄骨 黒兎 信男 久子 正三郎 柳童 見清 雪子 千里志 契子 祥風 いさむ

花持ちの良いの惚れて菊ばかり
惚れている事よう言わず五十年
信頼と不安混じった手術台

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

介護にもランクがあつて闇のなか
追いかけた運がソッポを向いてゆき
深入りをしてはならぬと神の声
金運に少し遠のく回り道
もう一度青いりんごにもどりたい
せつかくの夢も哀しや落椿
深々と頭を下げて立候補
友が逝くこの世がだんだんせまくなり
金運はないがどうやら生きている
超特急にも先端と最後尾

川柳高知

川竹

松風報

おばさんと言われ中年自覚する
中年の脂肪ぶとりの万歩計
中年が指一本で打つメール
中年のよろめき震度七にゆれ
一つ知り一つ忘れて日々楽し
いつの間にか私の物忘れ
憧れた中年の師を思い出す
リストラの矢が中年に向きたがる
広告が話しかける田舎道
友求む当方さびしがり屋です
本家対元祖どちらもピーアール
広告費出せる会社が生き残る

まみ子 吉太郎 ただし はるみ かつ子 聖子 恵美子 好栄 民子 ちよえ 博利 清泉 白汀 松風報 孝雄 圭二 功 竹萌 悦子 幸 圭風 京香 和江 佳風 暖

広告へ龍馬の力借りる土佐
さすが土佐広告塔も酒ビール
タレントの人氣を借りるコマーシャル
広告へたがみ立てる妻がいる
他人より小さい器に幸を盛り
中年の恋に打算のあるやなり

はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

振りむけばケイタイどうしぶつつか
ばけ防止ぶつぶつ言つて旅つづく
ぶつぶつと言う人会議では無言
家賃停滯ぶつぶつはやく管理人
人の好い父にぶつぶつはやく母
ぶつぶつとお迎え待つて医者通い
抜け目ない男が部下にひとり居る
社長は父部下は家族の町工場
定退を惜しんでくれる部下が居た
部下のせい私は何にも知りません
責任は部下に取らせるキャリア組
私を信ずる部下に助けられ
平同志気楽にくぐる縄のれん
大物の片鱗時に見せる部下
学歴もキャリアも部下に負けている
叱る目の奥に隠せぬ部下思い
正論の部下に何度も注いでやる
長い目であしたの部下に賭けてみる
叫んでる方がたいいてい負けている
引つたり呼べど叫べどもういない
阪神が勝つてファンがまた叫ぶ

京子 美々 てるみ 哲史 松風 快風 昭平 敦子 章司 さとみ 耕策 久仁子 洞庵 獏 查 柳宏子 フジ 敏 一壺 美代子 たけし 泰子 一知 ダン吉 扶代 六点 利武 真一

パレスチナの叫びアラーに届かない
ヤッホーと叫んですこし若がる
叫びたいことも我慢をしています
叫びたい時もあるうに仁王様
異議なしと叫んでくれと頼まれる
ブルドーザーみずの叫びききもらす
水門を開けと叫ぶムツゴロウ
改選へ叫ぶ路傍の正義感
叫んだら二人ぐらいは来てくれる

倉吉川柳会

竹信

昭彦報

鯉のぼり団地の窓で空を見た

鯉職立てて男を主張する

麦わらもおれも地べたが大好きだ

ペランダで精一杯の鯉職

宿賃してくれませんかと鳴くつばめ

連休に田舎で職呼んでいる

俺の里大山さんのへその下

自信ある鯿だけが里で鳴く

鏡の中で犬の遠吠え聞いている

大山を愛し頂上石一ツ

大山は岳父母となる日本海

麦わら帽国産品とラベルつけ

大山も歳をとったか背が縮み

ストローが生み出す宇宙シャボン玉

麦わらが燃えて弾ける麦の秋

原罪や春に麦わら焼きがある

見慣れてはいるが見飽きぬ伯耆富士

大漁の幟が眠る蔵の中

かつみ 重人 専平 絢子 志洋 みつこ 庸佑 吐来 りつえ

喜美子

秋草

石花菜

ひろこ

賀寿恵

重忠

芳光

節子

日出子

和枝

十三男

京子

悠子

よしえ

螢

玲坊

ゆり子

富士山が悲鳴とともに大噴火
幟をあげたムネオハウスも四面楚歌
伯耆富士借景にして花回廊
援農の麦わら帽子今いずこ
煩惱を忘れてしまふ伯耆富士
大嵐大山毅然壁となる
大山のマイナスイオンひとり占め
大山の景色もそえて便り出す
化粧落し麦わら平和なる老後
大山を拝むはとけの顔をして
お陽さんと麦わら帽子おともだち
鳴く時は鳥の顔して鳴くカラス

南大阪川柳会

吉川

寿美報

月収も定年もない青テント

月収が息子に負けた背がまるい

月収にあわせて探すマイホーム

月収が不安定です小商い

月収を妻のパートに助けられ

正直とは日に日に残り亡父の歳

生直に生きて何にも残らない

生真面目な葉さくら初夏へ背伸びする

窓ひらく壺は見事な艶を持つ

人生の花はなかつた叩かれた

生きていて良かった人の情にふれ

生きてゆく長い道ほど浮き沈み

生きている喜びを知る朝のお茶

拉致された生の地声がとどかない

泥舟を漕いでどっこい生きている

次男 季芳 泰輔 和子 康子 睦子 智子 瑛子 雄々 さまみ子 忠良 照彦

宏

重人

なきさ

志華子

叔子

たもつ

千里

柳弘

雅文

東雲

ひさ乃

章久

柳宏子

憲太郎

幸子

テスト満点内申書で落される
鉛筆に呪文をかけて行くテスト
テストテストああ気の毒なモルモット
熱弁へ首相ひと言だけこたえ
熱弁が続く金魚はよくねむる
熱弁を悔ゆる切の二日酔
へその緒カラカラ切つても切れぬ血の絆
クイズ狂ミロのピーナスにあつたへそ
月収が減つても大は尻尾ふり
ぬるま湯に浸り生気をかみしめる
滑らかな舌に火がつく一本気
晩春の長い熱弁子守うた
熱弁に見え隠れる二枚舌
わたくしの心生み出す一行詩

岩美川柳会

石谷美恵子報

金メダルとっさに噛んでみる若さ

外人客とっさに嫁の助け舟

浅学の老母から学ぶことばかり

冷汗の選者の器量試される

不器用なままで職人終りそう

安心したら不思議に浅い川だった

玉ネギもじゃが芋も笑む梅雨まじか

浅い鍋すぐがらがらと喋りだす

幸か不幸か咄嗟には解るまい

とっさでも尋ねて欲しいお友達

シンブルに食器が並ぶ朝の膳

以心伝心とっさに呼吸あう二人

米びつが浅くて茶碗欠けてくる

シマ子 道子 萬的 度 アキラ 初太郎 寿美 柳伸 千梢 蛙 珠美 日出子 敏幸 朝子

大漁

静生

雅女

孝男

かつみ

一夫

和歌子

よしえ

螢

きみ子

睦子

季芳

一瑤

— 122 —

勿体ない母のことばにある重み
習慣を破る未練をひきずって
仕事ばりばり大食漢で色好み
ばりばりと働かされて左遷され
ばりばりの腕スカウトの目が光る
バリバリの議員がはまる蟻地獄
ばりばりと九条破る音がする
ふくよかな手ふくよかな胸みな昔
風邪ひくとみな大事にしてくれる
代役をつまぐこなしてからの運

むらくも川柳会

毛利

京の旅みどりの中においてやす
初夏の風旅のプランを掲げてくる
さらさらの婚約指輪見えかくれ
さらさらの子の目世の中明るくし
入学児さらさら光るランドセル
新緑へふっと誘ったハイキング
新緑の桜の並木花恋し
旬のものの風の香りを持つてくる
行き交う看護の人も気忙しそう
新緑の薫りの風に酔っている
背のびせず不義理を通す年女
予定より早い桜に大慌て
難聴がどうも気になる老い迎え
級友は挨拶もなく世を去って
心ない風に散り行く桜花
政界のどこまで続く黒い霧
屈託のない笑い声老いの部屋

博 泉 弘 一 度 一 庸 佑 仁 清 たもつ ルイ子 一 風 幸 報 明 朗 定 子 仲 子 信 夫 安 男 早 苗 賢 吉 幸 夫 島 子 幸 子 昭 子 ます美 まさ子 美喜子 寿 節 江

耐え抜いた暮らしにやさし春の風
達者なほ口だけですと謙遜し

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

蒼天に抱かれ無色になつてゐる
花束を抱けばひたひた満ちる潮
山青しいことがある気配抱く
屋入杉を抱き年輪を問うてみる
父の影いまだに抱えている余生
口惜しさをいつまでも抱くあほらしさ
抱きしめたこともあつたなこの寝顔
罪抱いたシャワー見ていた昼の月
抱いているだけでは穂は弾まない
気がつくと思はいつきに海となる
新緑の中で私を取りもどす
さつき晴かがやく緑手をつなぎ
新築のカーテンゆれて風みどり
ふる里のみどりへとびたい竹トンボ
みどりが好きでみどりが足りぬクレヨン画
一隅を照らして生きた父のペン
隅ばかりついて意見がまとまらぬ
カラフルな風が欲しくて花晶
カラフルに飾って家計蟻地獄
あまりにもカラフルすぎて気がひける
カラフルな頭で三振ばかりする
野も街もカラフルになり新学期
カラフルな日傘クルクル逢いにゆく
カラフルなプリント夏を連れてくる
カラフルを脱ぐと人間らしくなる

惠美子 八重子 哲子報 いわゑ たす子 義子 奮水 松煙 文 美代子 諷云児 富喜子 千代 トミエ 房子 メ女 哲子 正坊 五月 みつ子 光久 春蘭 澄子 石舟 孝一 鹿太

カラフルな夕焼雲に明日をかけ
カラフルで七十歳が化けている
近道をおぼえてからの重い足
雑巾の雫ひとりを感ぜさせ
田も畑も学童疎開の頃がよし

川柳クラブわたの花

吉村

今更と酒で薄めている慕情
ペイオフの心配いらぬ預金帳
地団太を踏んで三歳自己主張
思春期がはんやりしてる気にかかる
中流の意識バーゲン値踏する
そつとしておいたころに気がつかず
ああ一年小泉ブーム下降線
親よりも正當なりと子も負けず
子から孫愛を綴っていく絆
はんやりを通して敵をつくらない
親の愚痴そつと聞いているお腹の子
プライドは次つぎ妻に刺きとられ
おとき話せがみ終りは夢の中
善人を装いおすおす歳をとり
散るさくらく短冊踊る裏表
駅前に磨きをかける町の顔
喜寿を過ぎブームに乗ってテレメル
ダイエツトそう身ブームねらいうち
場数だけ踏んだつもりがだまされる
はんやりと過ぐす時間も有難い
折った札のばしバチンコ玉を買う
飽き性を叱る我が家の物置き場

江 美 弘 求 芽 晴 美 哲 男 一 風 報 いつみ 春江 知佐子 美代子 民子 明 八寿子 増道子 宏 至 ミツ子 君 江 春 子 一 風 幸 枝 隆 盛 晴 美 俊 子 恭 一 奈良司 友 甫 正 純

職さがしブライドいつも邪魔をする 一道
ブライド捨ててやと来ました運い春 (本)たえこ
みずみずしサラダボールの春キヤベツ (淑)妙 子
師のペンを綴る文集本です ますみ
綴り方父母の喧嘩が書いてある トシエ
まさこ

城北川柳会

川久保睦子報

お金にも保険も無利息長寿国
この銀行昔の名前残してて
丸文字で書く始末書は懲りてない
リストラを告げる身聞く身つらすぎる
ふる里で殿様気分花見酒
出る癖がついて不埒な預金帳
愛すれば花も応える美しさ
あまりにも変りてはたる父の骨
曾孫来て朝夕笑ふことばかり
また汚職不況の中で国が病む
ストレスを持てきどころ花の下
ドラマよりドラマチックな国会だ
毒舌も吐くが根は極やさしくて
ささやかな暮し転ばぬ杖を買っ
ランランの気分に乗ったおぼろ月
巡る春去年と同じ花と酒
悟ったは色即是空老いの恋
みな寄つてたかつて長老祭り上げ
小さい背に夢が重たいランドセル
釣書には見合い馴れとは書いてない
播り鉢の底に女の嫉妬心

求 芽 東 雲 重 人 あい子 トヨ子 高 栄 柳 一 久留美 ひさ乃 綏 子 修 春 蘭 昭 子 とし子 順 三 史 風 柳 宏子 志 華子 柳 弘 典 子

蛇口から耐える女の朝が来る
春眠のうつらうつらへ甘い夢
ひと言の重さを語る落椿
貫禄の笑顔卒寿の鑒לט
奈良漬に酔うてた妻と縄のれん
意地捨てて子に順うて老いてゆく
無印になって悟った人の道
貫禄はないが部下には慕われる
万歩計古希の仕事の苦を数え

川柳さんだ

北野

哲男報

傘差した牡丹悠然通り雨
中止した旅行に空が静かすぎ
空々しい世辞でも今はうれしいわ
洗濯機フル回転の五月晴れ
和菓子屋の五月知らせのお菓子たち
捨てました五月の風にゆらぐ恋
わがままも五月五日は目を細め
青空が続くと油断してしまふ
かあちゃんの苦労の染みににぎりめし
食糧難銀のおにぎり夢見た日
祖母依母は三角妻は丸
おにぎりを半分くれる愛もある

川柳藤井寺

高田美代子報

花よりも人波に酔う通り抜け
通り抜けの路地に牡丹が彩を添え
たんざくがきらきら光る通り抜け
通り抜け髪に一ひら持ち帰る

はじめ 朝 子 千 歩 達 子 倫 子 あやめ 千 里 公 一 枝 藤 朗 敦 子 章 子 朋 月 開 子 ちあき 哲 男 千 代 サクラ 久 恵 正 行 忠 史 郎 栄 一 キミ子 桂 子

花のトンネルその一本に逢いに行く
フィナーレはなにわの春の通り抜け
通り抜けまぶたを閉じて家で見る
来年もきつときまつせ通り抜け
通り抜け花の色香にうずもれる
煩惱の洗濯にきた通り抜け
心太のように出される通り抜け
蘭蘭の毛並みを褒める通り抜け
苦勞など語らぬ人の背が光る
笑い声洩れて光が溢れてる
ピカピカの車ロインを積んでいる
光るものまだ日本にたんとある
七光電池が切れて消えていく
光線の加減か妻が美しい
醬油顔飾りボタンにして歩く
単身赴任上手になったボタン付け
ボタン付けぐらいと自立促され
不器用な男が付けている鈕
胸ボタンははずして若さはち切れる
窓ぎわの鈕の艶が消えている
夫婦ともボタンが飛んだつかみ合い
要領の悪いボタンがすぐとれる
失ったボタンひよっこりありました
結局は飾りボタンで終る旅
明日言おう言わなくて済むかも知れぬ
春宵やすこし悪女になるもよし

堺川柳会

河内

月子報

扶美代 悦 子 喜代子 志 洋 美智子 龍 一 終 一 半蔵門 絹 歌 アヤ子 みつこ 登志子 鐘 造 六 点 昭 子 惠 勇 利 武 一 人 重 筒 和 樹 春 蘭 花 梢 瑠美子 美代子 アキ

結婚後いやな部分が見えてきた

遊んでる時も仕事を忘れない

羊羹に脇目もふらずインシュリン

はけぬような遊びも仲間入り

酔って来て同じ説教始まった

殻ぬいで遊び仲間にしてもらう

装ったわてに隣の犬が吠え

よれよれのわたし励ます一張羅

いやな事忘れて一人新茶汲む

趣味たんとある根っからの遊び好き

芸のためなんてわたくしなら離婚

スカーフに私遊んでもろてます

遊びならしっかり足を地につける

いやと言えぬ嫁と仲よく暮らして

よく遊びよく働いて悔いはなし

傷口を広げるように言う皮肉

同居離婚しているらしい広い家

少子化に運動場が広すぎる

妖艶なわたしはんとは田舎もん

いやだとは言わせぬ顔で迫られる

手を遊ばせていやる事のない母だった

笑わせていやる空気を追い払う

遊びでも息を抜かないくそ真面目

時化の日は遊ぶしかないコップ酒

いやな事忘れさせてる土いじり

養生を忘れた足で居酒屋に

弱虫の私を試すいい機会

寄り道はワインが並ぶいいところ

ライバルの嫌味ジョークで投げ返す

富柳会

池

森子報

桜吹雪に絡まれ解けてゆく心

人情が絡むと鏡くもり出す

結婚が絡み薄れてきた魅力

絡むものばつさり切つて風になる

ふる里で土の匂いのする握手

ここのだけの話が飛び火して絡む

朝捨てた未練半分夜拾う

南無三宝カメラ忘れた花吹雪

絡みつく闇と遊んでいるわたし

正直な土だ春の陽と弾む

美人ナース葉のんでる花粉症

年頃だ娘消毒して置こう

はっきりと胸の半分春の闇

黄砂舞うその空間の花に酔い

贅肉が半分余る試着室

見栄を盛り義理に絡んだのし袋

まごころは介護で色る母の世話

正論も情が絡めば色が褪せ

くやしいが年には勝てぬ時があり

一坪の庭で見事に咲いた意地

賞味期限またすり替えた厚化粧

内緒話いつでも風にさらわれる

深夜だが脳の半分寝つかれず

着メロがブライベートの音で鳴る

言いたい事半分にする嫁の意地

末っ子の大型晩成サクラサク

春の野に足にやさしい土の道

海創る男の背なの太い線

割り勘の酒が温めている絆

落下したところで薬土薬かんか

細胞に朝一番の深呼吸吸

山登り青息吐息老いの坂

鼻息が荒くて旦那飛べされる

息つかない氣にして囲む一〇二歳

あいまない立場で序列からまれる

曖昧模倣過去も未来も霧の中

あいまない椅子が時々本音吐く

あいまない心と知って泳がせる

曖昧な大人の裏を子が見抜く

あいまない態度が生んだ離婚です

あいまないに笑って腹は決まってる

あいまない愛が氣になる花時計

坊やもう寝たわよと妻目でサイン

咳一つ合図で出ます銭湯で

甲板へ赤いテープを届かせる

コマーシャルついのせられて狭い部屋

夫々が肩書き落し丸くなり

スピーチを語んじぶらり花の道

葉桜になつてもさくら家族ずれ

連休に延びた予定にまた追われ

ママごとで母が真似られてる喜劇

あとわずか閻魔のテスト残すだけ

回転ずし待ち伏せをして狙い撃ち

仲間入りしたい氣もする青テント

吞舟

欣之

森子

真理子

舞夢

東雲

千梢

澄子

みつ子

蛙

日の出

蕉子

伽羅

志華子

さだを

会美

春

照子

恭昌

富子

絹子

さと美

正雄

叡子

石舟

尚士

柳界展望

第71回 大阪川柳の会

日時―8月2日(金) 17時開場 会場―サンケイビル本館3F322号室 題と選者―△あれは・三好聖水 △街・前川千津子 △仏・宮崎シマ子 △うれしい・磯野いさむ
各題2句 席題ナシ 会費―千円 18時締切

★うぶみ川柳会第10回記

念紙上投句川柳大会は2月28日214名の応募をもって締切られ、『みずうみ』誌

上で発表された。同大会の本社関係天位及び総合成績

による受賞者は次の通り。

〈天位〉

私のレシビに希望という

卵 古久保和子

水壘の疵を気遣いたく希 中原 諷人

一滴の水も零してなるものか 土橋 螢

八起きめに向かい合つてる正念場 白根 ふみ

〈新日本海新聞社賞〉

白根 ふみ

★第13回時の川柳交歓川柳大会は5月12日、兵庫県民

会館で開催された。当日の本社関係者天位及び受賞者は次の通り。

〈天位〉

紙兜迷彩色に塗るでない

池 森子

妻を脱ぎ母を脱ぎ静かな

る羽化 池 森子

〈兵庫県知事賞〉

池 森子

★第3回井笠川柳会笠岡大会は、5月25日ギヤラクシ

ーホールで事前投句461名、当日出席300名により開催された。当日の本社関係者天

位及び受賞者は次の通り。

〈天位〉句碑建立句

若葉キラキラこはまちが

いなくこの世 新家完司

悪がきがみんな揃つてい

る祭 河内 天笑

〈岡山県議会議長賞〉

藤解 静風

〈笠岡市議会議長賞〉

小島 蘭幸

〈笠岡市文化連盟会長賞〉

西出 楓葉

〈笠岡東ロータリークラブ

会長賞〉 小林由多香

〈優秀賞〉 河内 月子

▽出 版△

■黒川紫香相談役は、2月13日他界した奥山美智子さ

んの供養のため『音を失く

した子猫』を出版。(A5

判・28頁)

お知らせ

5月28日の常任理事会で、本年10月までの役割分担が次の通り決定しましたので、お知らせします。(太字は部長)

総務部	板尾 岳人	藤田 泰子
企画事業部	前 たもつ	坊農 柳弘
編集部	西出 楓葉	木本 朱夏
句会部	山本希久子	山本 義子
	西口いわゑ	大内 朝子
	河内 月子	長浜 澄子
同 人 部	長浜 澄子	中原比呂志
渉 外 部	大内 朝子	松原 寿子
会 計 部	寺川 弘一	高田美代子
発 送 部	米田 恭昌	

行した。

▽人事往来△

■薫風名誉主幹・天笑主幹 柳会笠岡大会へ出席のため

岡山県行。楓葉副理事長は

■薫風名誉主幹は選者として、6月9日の日川協沖繩大会に出席。天笑主幹・由多香相談役・みつ子副主幹ほか同行。(当日成績P167)

▽句碑建立△

★両川洋々氏(理事・鳥取市)の句碑が郡家町文芸公園の「文芸の小径」に、四年にわたる郡家川柳会講師としての功績により郡家町から、5月13日建立された。字はご尊父の筆による。



▽柳号変更△

■夏目健一氏(同人名簿P15)は一粋(いっすい)と改名

新同人紹介

山^{やま}岡^{おか}富美子^{ふみこ}

―薫風・岳人・由一・正子推薦

鳥^と羽直市^{はななおいち}

―岳人・由多香・雄々推薦

鳥^と羽玲子^{はなれいこ}

―岳人・由多香・雄々推薦

山^{やま}宮愛恵^{みやあいえ}

―岳人・由多香・雄々推薦

録^{ろく}沢風花^{さわふうか}

―岳人・由多香・雄々推薦

福^{ふく}島庸二^{しまようじ}

―岳人・由多香・雄々推薦

田^た中憧子^{なかつとちこ}

―岳人・由多香・雄々推薦

有^{あり}沢せつ子^{さわせつこ}

―岳人・由多香・雄々推薦

福^{ふく}永ひかり^{ながひかり}

―岳人・由多香・雄々推薦

西^{にし}冲彰雄^{おきあきお}

―岳人・由多香・雄々推薦

▼計報▲

■小林周信氏(理事・大阪市)は、5月19日肺癌のため逝去。北大阪祭典で行われた通夜・告別式には柳友多数が参列した。享年70歳。

▼訂正とお詫び▲

■5月号 P14下段4行目、ダンディ→ダンディー P30下段7行目、大和高田市→大和郡山市 P54上段1行目、素身朗→素身郎 P118中段9行目、求芽→雅文

■6月号 P89中段12行目、切片→切岸 P99上段17行目、政治化→政治家

P104中段16行目、陶冶→陶冶 P104中段26行目、静聴→清聴 P106下段7行目、山の旅→山の宿 P111下段20行目、楠見昭子

平井栄翁
―岳人・由多香・雄々推薦

田村邦昭
―岳人・由多香・雄々推薦

宮脇道子
―岳人・由多香・雄々推薦

大川桃花
―天笑・柳宏子・遠野推薦

村上直樹
―薫風・岳人・由一・正子推薦

渡辺さだを
―天笑・月子・恭昌推薦

上地登美代
―千秀・保州・朱夏推薦

武本碧
―千秀・保州・朱夏推薦

↓楠見章子 P129上段20行目、「納得して…」を本人申し出により削除

■臨時常任理事会 5月28日 出席者20名 ①900号記

念大会の反省―会計報告、同人総会、川柳大会、懇親

項等を検討

②第8回川柳塔まつりの選者、兼題を決定 ③退任、新任による常任理事会の役割分担再編成 ④二賞

選者の検討 ⑤同人名簿作成の件 ⑥新同人17名承認

当日投句の句数、記念品等の検討、各担当者人選は7

月常任理事会までに考えて

おく ②初歩教室について ③仲間づくりへの取組みを

検討 ④同人1名推薦

▽常任理事会 7月1日(月) 13時から

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔わかやま吟社

										顧問	川上	副主幹	牛尾	主幹
塩谷	澤田	坂部	坂口	小山	桑原	柿花	柏原	小倉	野村	太茂津	大輪	緑良		
佐代子	和重	紀久子	公子	太一	道夫	紀美女	優子	アサ						

中村	中島	中後	中井	堂上	富上	天満	寺田	垂井	玉井	谷口	谷和	田村	田中	杉山	芝
君枝	正博	清史	榮美子	泰子	光代	三千代	裕美	千寿子	豊太	信子	和	あき子	輝子	精子	あつむ

会員一同	和田	横垣	山田	宮本	宮園	宮口	松原	松尾	堀端	堀	細川	福本	福田	橋爪
	良一	忠翁	高夫	三喜夫	射月芳	克子	寿子	和香	三男	富美子	稚代	英子	和子	佐一

例会 毎月第2日曜日 近鉄カルチャーセンター

事務局および投句先

〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良 方

TEL 073-446-2855

暑中お見舞申し上げます

竹原川柳会

〒725-0022 広島県竹原市本町1丁目14-3

小 島 蘭 幸 方

会 監 会
計 査 長

山	三	古	藤	古	石	岡	森	岩	時	小
内	宅	田	解	谷	原	本	井	本	広	島
房	不	太	静	節	淑	清	菁	笑	一	蘭
子	朽	虚	風	夫	子	水	居	子	路	幸

ほか会員一同

暑中お見舞申し上げます

城北川柳会

会長 吐田 公一

喜多	岸野	川端	川久保	神夏磯	叶岡	鍛原	太田	大橋	大内	浦田	上田	石塚	安達
佐津乃	あやめ	一歩	睦子	典子	史風	千里	とし子	柳一	朝子	綏子	登美子	順三	はじめ

野村	中田	都倉	寺井	津村	高橋	高杉	鈴木	鈴木	坂上	小糸	小泉	小池	栗山
八重	あい子	求芽	東雲	志華子	一枝	千歩	政子	トヨ子	高栄	昭子	ひさ乃	しげお	チサ子

吐田	吉岡	森杉	丸岡	松本	松田	松岡	町田	本間	板東	長谷川	橋村	坊農	野村
公一	修	秀夫	静枝	ただし	澄子	久留美	達子	満津子	倫子	春蘭	容子	柳弘	美代子

暑中お見舞い申し上げます

会 柳 川 堺

河内 泉谷 稲川 榎本 榎本 太田 大谷 柿花 梶本 河内 河盛 神原 源田 小西 齋藤 志田
天笑 喜代子 惠勇 日の出 舞夢 扶美代 篤子 紀美女 哲平 月子 龍三 文 八千代 小雪 さくら 千代

高木 高田 津守 寺井 寺田 徳山 中井 中川 中崎 中澤 中野 中村 西内 西田 西村 長谷川
美代子 世紀子 なぎさ 東雲 甚一 みつこ アキ 深雪 伽羅 健吾 忠敬 朋月 柳宏子 りつえ 彰

長谷川 樋口 藤井 藤田 松尾 宮本 村上 村田 矢倉 八十田 矢野 山本 米澤 渡辺 和田
春蘭 冬虹 一二三 泰子 和香 かりん 玄也 巳代一 五庵 洞梓 半銭 俣子 さだを つづや

暑中お見舞い申し上げます

西宮北口川柳会

例会 毎月第2月曜日午後1時 西宮市立中央公民館
(阪急電鉄神戸線西宮北口下車南3分) プレラにしのみや4F

事務局および投句先

〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子

川島	亀岡	門谷	小倉	小熊	奥田	石原	井上	浅野	秋元	阿萬	正本	黒川
諷云	哲子	たず子	藍	江美	みつ子	靖巳	松煙	房子	てる	萬的	水客	紫香
都倉	坪井	田辺	田中	住谷	坂上	小池	黒田	久保田	木村	菊池	神原	北野
求芽	孝一	鹿太	正坊	石舟	高栄	しげお	能子	千代	貴代子	トミエ	文	哲男
山本	山崎	松下	牧渕	古川	藤村	春城	春城	長谷川	西田	西口	長浜	富山
義子	君子	比ろ志	富喜子	奮水	メ女	武庫坊	年代	春蘭	柳宏子	いわゑ	澄子	ルイ子

暑中お見舞申し上げます

いずも川柳会

会長 尼 れいじ

会 員 一 同

事務局 〒693-0052 出雲市松寄下町284

吉 岡 きみえ 方

TEL 0853-22-1068

暑中お見舞申し上げます

平成十四年 盛夏

香川県大川郡白鳥町白鳥

川柳塔おっぱこ吟社

会 長 木村 あきら

甚 古 正 雪

副会長 成 重 放 任

岩 倉 文 仙

会 計 川 崎 ひかり

向 山 治 延

同 人 工 藤 吟 笑

山 崎 はつ恵

池 内 かおり

松 村 輝 夫

堤 くに子

赤 沢 貞 月

神 保 坊 太 郎

中 塚 寿々女

滝 井 勝

原 賢

会 員 角 尾 いさむ

伊 勢 八重子

辻 上 よしみ

田 中 奴 風

暑中お見舞申しあげます

川柳ふうもん吟社

会長 両川 洋々

ほか 会員一同

事務局

鳥取市二階町三一〇二

植田 一京方

〒680-0033

月例会 毎月第四日曜日 十三時
J R 鳥取駅構内(シャミネ会議室)

暑中お見舞い申し上げます

NHK川柳教室

橘高 薫風 志田 千代 大崎 侑子

北畑 金治 野下 之男 野島庄三郎

藤井 正雄 井上 松煙 安達 忠央

黒田 能子 緒方美津子 岩屋 美明

指宿千枝子 井上 信子 福田 満州

海老池 洋 三木 愛子 南原 正和

三品 征子 谷 鈴子 山田 耕治

鴨谷瑠美子 古今堂 蕉子 莊司 弘之

前 たもつ 矢倉 五月 池上 清治

田中 節子 江見 見清 久保田 千代

暑中御見舞申し上げます
川柳塔唐津支部20周年記念句会

記

1. 日 時 平成14年11月2日(土) 開場 11:30
 ① 開会・投句締切 13:30
 ② お は な し 14:00
 川柳塔社名誉主幹 橋高薫風先生
 ③ 閉 会 16:00
 2. 会 場 唐津シティホテル (JR唐津駅南口 ☎0955-72-1100)
 3. 会 費 (句会) 1,000円
 4. 兼 題 各2句吐 (欠席投句拝辞)

めぐる	遊 ぶ	境	計 算	軽 い	雑 詠
-----	-----	---	-----	-----	-----

5. 連絡先 仁部四郎 〒847-0082 唐津市和多田天満町1-2-13
 ☎0955-73-2262

暑中お見舞い申し上げます
川柳塔きやらぼく

事務局 米子市花園町53
 林 瑞 枝
 TEL 0859-22-4213

暑中お見舞申し上げます

横浜あおば川柳会

秋元 和可	日下部美柳士	三村八重子
芦田 鈴美	後藤 早智	宮崎 二郎
生坂サト子	近藤 道子	保田 絹子
石川ただお	鈴江 純子	八田 敏
石原 三郎	平 達也	山下 省子
和泉あかり	平 のぶ子	山梨 雅子
伊藤 ふみ	田中 笑子	山本為佐子
巖田かず枝	土田今日子	吉田 裕峰
小野句多留	長島亜希子	荒井 広和
金森 徳三	福島かつ子	山廣あらた
川島 良子	福田由美子	清水 潮華
菊地 政勝	布山 嘉信	
北沢 街湖	松土十三子	

暑中お見舞い申し上げます

翠 洋 会

橘高 薫風	穴吹 尚士	石原 靖巳	居谷 真理子	井上 照子	梅田 宣司	榎本 日の出	榎本 舞夢	太田 昭	岡本 久峰	奥田 みつ子	黒田 真砂	古今堂 蕉子	児玉 蛙	(故) 小林 周信	清水 絹子	住谷 石舟	高杉 千歩
田中 正坊	谷口 義	津村 志華子	寺井 東雲	天正 千梢	中澤 伽羅	長浜 澄子	中村 叡子	西出 楓楽	長谷川 会美	藤井 正雄	安永 春	山本 希久子	米田 恭昌	渡辺 さだを	渡部 さと美	渡辺 富子	

暑中お見舞い

申し上げます

岸和田川柳会

岩佐	ダン吉	田口	穰一
島崎	富志子	寺田	甚一
小島	笑司	村垣	鹿太郎
井伊	東吉	仲谷	弘子
不破	仁緑	善野	盛之
長谷川	呂万	加藤	基
堂免	路子	宮野	みつ江
原	苑子	藪野	けい子
土橋	房枝	坂口	英雄
池田	岩夫	芳地	狸村
原	さよ子	他	一同

暑中御見舞申し上げます

川 柳 藤 井 寺

高	中	鴨	太	楠	川	福	吉	西	山	山	大	中	若	伊	增	俣
田	島	谷	田		端	田	田	村	本	本	橋	井	松	藤	井	野
美代子	志洋	瑠美子	扶美代	昭子	悦子	喜代子	栄一	恒雄	和樹	鐘造	アキ	雅枝	アヤ子	ヨシ枝	登志子	他一同

暑中お見舞申し上げます

西宮ローズ川柳会

橋	高	秋	飯	岩	奥	小	亀	菊	木	久	坪	那	長	西	春	春	山	山	吉
元	西	倉	倉	倉	田	倉	岡	池	村	保	井	賀	浜	口	城	城	崎	本	田
薫風	ミサヲ	キク子	みつ子	藍	哲子	トミエ	貴代子	まさお	孝一	雅子	澄子	いわゑ	武庫坊	年	君	子	義子	笑女	

暑中お見舞い申し上げます 大阪川柳人クラブ

会 長 磯 野 いさむ

副会長 橘 高 薫 風

幹事長 川 島 諷云児

会 計 安 井 英 華

暑中お見舞い申し上げます

平成14年 盛 夏

川柳塔おおとり

会 長 小 林 由多香

他 会 員 一 同

〒680-0805 鳥取市相生町1-110

暑中お見舞申し上げます

高槻川柳サークル卯の花 一同

月例会会は第三木曜日

暑中お見舞い申し上げます
鳥取県川柳作家連盟

会長 鈴木 公弘

会 員 一 同

事務局 〒680-0843 鳥取市南吉方3丁目364

安田方 春 木 圭 一 郎

TEL 0857-24-2834

暑中お見舞い申し上げます

ほたる川柳同好会

ほ 米 寺 江 唐 出 板 栗 池 松 田 藤 嵯 古 前 岡 富 月 湯 宮 高 田 井 橘
か 原 井 見 住 口 山 田 田 中 原 峨 川 田 本 永 原 浅 田 嶋 辺 上 高
会 雪 柳 見 セ ま 久 善 た 螢 桂 保 喜 昭 吉 太 敵 方 馬 禄 正 直 薫
員 子 童 清 実 子 子 子 守 し 柳 子 子 子 子 郎 子 郎 洗 骨 勝 郎 次 風
一 同

定例句会・毎月第2火曜日午後・豊中市蛍池公民館

暑中お見舞い申し上げます

もくせい川柳会

宮 三 松 藤 西 辻 玉 玉 田 住 小 黒 岸 河 粕 岡 江 阿 安 橘
田 宅 本 村 田 川 置 置 中 谷 池 川 田 井 屋 本 見 萬 藤 高
禄 つ た メ 柳 慶 英 重 正 石 し 紫 知 庸 都 吉 見 萬 寿 薫
骨 え だ 女 宏 子 子 人 坊 舟 げ 香 香 子 佐 代 太 清 的 美 子 風

毎月第3月曜日に定例句会を開いております

暑中お見舞申し上げます

川柳 ささやま

遠山可住

ほか 会員一同

暑中お見舞

申し上げます

川柳クラブ

わたの花

川崎 友甫	篠原いつふみ
服部 春子	井尻 民
平川 幸枝	砂田八寿子
松葉 君江	與田 明
田中トシエ	坂本奈良司
初山 隆盛	藤本 一道
生嶋ますみ	太田 恭一
吉村 一風	江波 正純
村上ミツ子	増田 道子
神原まさと	馬場 宏
中島 春江	杉本 晴美
山本 宏至	脇 俊子
八倉知佐子	本田たえこ
乾 美代子	赤木 妙子

暑中お見舞い申し上げます

サークル 檸檬

橘高 薫風	浅野 房子	石原 靖巳	奥田 みつ子	片岡 智恵子	小林 一夫	嵯峨根 保子	田中 正坊	鶴田 遠野	長浜 澄子	西口 いわゑ	西出 楓楽	西村 哲夫	前 たもつ	山本 希久子	山本 義子	吉田 あずき
-------	-------	-------	--------	--------	-------	--------	-------	-------	-------	--------	-------	-------	-------	--------	-------	--------

暑中御見舞

川柳塔まつえ吟社

同人一同

〒690-0056 松江市雑賀町1686 恒松町紅方

電話 0852-24-5450

暑中お見舞申し上げます

川柳大阪

会員一同

大阪市交通局互助組合文化部・川柳部

暑中お見舞い

申し上げます

はびきの市民川柳会

山森永三西仲徳塩清酒河榎安芸田
他本下田好村谷山満水井井本
一た一章専り真み利一庸吐泰
けつつこ敏武壺佑来子
同し知司平え一

暑中お見舞申し上げます

東大阪市川柳同好会

会 長 片 岡 湖 風

暑中お見舞い

申し上げます

熊 本 川 柳 会

高
野
宵
草

永
田
俊
子

岩
切
康
子

東大阪エイシスカルチャー

河内 生嶋 井尻 伊藤 内海 岡本 笠井 神原 吉川 國見 熊代 古手川 坂本 鈴木 飛永 中岡 西川 星野 堀井 松井 松永 安本 山宏
天笑 ますみ 民 仁 乃 勲 子 欣と まさ美 寿 菜 夏 子 トヨこ ふり紗 更紗 きらり 富重 秀夫 敏子 春至

暑中お見舞申し上げます

川 柳 ね や が わ

会 員 一 同

会 長 山 本 三 郎

事務局 高 田 博 泉

暑中お見舞申し上げます

川 柳 若 葉 の 会

久保田	中井	宮崎	吉田	山内	宮崎	宮本	古川	長谷川	辻川	黒田	橘高
千代	アキ	弘直	あずき	香住	シマ子	欣史子	喜美子	会美	慶子	能子	薫風

暑中お見舞申し上げます

八 尾 市 民 川 柳 会

会 員 一 同

季刊

A5判
一五二頁

川柳展望

年間誌代 ㍶四、九六〇（㍺共）

〒567-0009

大阪府茨木市サニータウン

陽和台第四住宅3-101

川柳展望社

TEL 〇七二六―四九―二三三四
FAX

暑中お見舞申し上げます

尼崎川柳協会加盟

尼崎
いくしま川柳会

例会 毎月第一金曜日午後一時

サンシビック尼崎三階
（阪神尼崎駅西南三分）

尼崎
尾浜川柳会

例会 毎月第二火曜日午後一時半

尼崎市尾浜二丁目五―八
尾浜公民館

（阪急武庫之荘北側③乗り場
市バス④尾浜二丁目下車）

両句会共各地句会案内に

掲載しています

暑中お見舞申し上げます

富	松	竹	藤	都	川	小	阿	西	黒	正
山	川	内	村	倉	島	池	萬	田	川	本
ル	芳	花	メ	求	諷	し	萬	柳	紫	水
イ	子	代	女	芽	云	げ	的	宏	香	客
子		子			児	お		子		

長柳会

河内長野市 千代田公民館
毎月第2・4金曜日
午後1時から

中谷ひろし	西山幸雄	浜野三和子	山原輝治	木虎良男	梶武男	綱木けい子	佐中もこ	松谷マサ	沢田和子	柏本靖子	水谷正子	大西文次	妹背尽呂久	木太久正一	板尾岳人
鈴木敬二	佐藤英美	落葉史	山本千太郎	村上直樹	石堂潤子	小川芳野	針生和代	山岡富美子	大垣輝子	網俊郎	西浦一慧	岸本たけし	前原正美	加島由一	

暑中お見舞い申し上げます

川 柳 塔 な ら

宮口笛生	中原比呂志	米田恭昌	坊農柳弘	大内朝子	吉川寿美	宮西弥生	清水絹子	居谷真理子	渡辺富子	會員一同
------	-------	------	------	------	------	------	------	-------	------	------

暑中お見舞申し上げます

三幸川柳教室一同

事務局 〒640-0112 和歌山市西ノ庄239-23

桜井千秀

暑中お見舞い申し上げます

くろぼこ川柳会

平成14年 盛 夏

会長 鈴木 公 弘

会 員 一 同

暑中お見舞申し上げます

川柳塔みちのく

主 幹	副主幹	相談役	顧問	理事	監 事	会 計
齊藤 晶	小寺 花峯	工藤 甲吉	森中恵美子	波多野五楽庵	岩渕 黙人	櫻庭 順風
			富士 慕情	佐治千加子	浅田 隆樹	肥後和香子
			田中 叶	相馬 銀波	小枝ふさゑ	相馬 一花
						ほか同人一同

南 大 阪 川 柳 会

会 員 一 同

暑中お見舞申し上げます

打 吹 川 柳 会

会 長 牧 野 芳 光 ・ 会 員 一 同

事務局 〒682-0924 倉吉市川原町1879

高 多 博 丈 方

電話 0858-22-6128

暑中お見舞い申し上げます

岩 美 川 柳 会

会 員 一 同

〒689-0003 鳥取県岩美郡岩美町浦富1504

TEL 0857-72-1388

暑中お見舞申し上げます

京 都 塔 の 会

会 員 一 同

暑中お見舞い申し上げます

川 柳 塔 社

名譽主幹	主 幹	理 事 長	副 主 幹	副 理 事 長	常 任 理 事
------	-----	-------	-------	---------	---------

橘 高 薫 風	河 内 天 笑	板 尾 岳 人	奥 田 みつ子	波多野 五楽庵	小 島 蘭 幸	前 たもつ	大 内 朝 子	木 本 朱 夏	寺 川 弘 一	長 浜 澄 子	藤 田 泰 子	松 原 寿 子	山 本 義 子
---------	---------	---------	---------	---------	---------	-------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------

仁 部 四 郎	西 出 楓 楽	河 内 月 子	高 田 美 代 子	中 原 比 呂 志	西 口 いわゑ	坊 農 柳 弘	山 本 希 久 子	米 田 恭 昌
---------	---------	---------	-----------	-----------	---------	---------	-----------	---------

川柳塔社常任理事会

第八回全日本川柳誌上大会特選句

第8回全日本川柳誌上大会は、2037名の参加を得て、社団法人・全日本川柳協会の主催、文化庁、日本放送協会の後援により実施され、全入選作品が『平成柳多留』第8集に発表された。このうち特選句（10句）は次のとおりで、6月9日の日川協沖繩大会で表彰された。

平成柳多留賞

情報はどうあれ春は種子を蒔く

川柳大賞

母さんと叫んだらろか自爆テロ

NHK会長賞

最後には許すつもり鬼になる

日本青少年育成協会会長賞

空爆に丸い地球を削られる

全日本川柳協会会長賞

トップの座渡す日不発弾が泣く

全日本川柳誌上大会賞

泣かされた事は時効に墓洗う

テロリストあなたの恋は凄かろう

近況を嫁とメールで語り合う

踏ん張った形で父の背が丸い

神の手も借りたトップの椅子である

三重本多和子

全日本川柳二〇〇二年沖繩大会

第26回全日本川柳二〇〇二年沖繩大会は、6月9日糸満市摩文仁の平和祈念堂で開催された。事前投句一三七四名、当日出席者五五七名。大会各賞は事前投句、当日出句、特別宿題のうちから次の通り選ばれた。（太字は同人）

文部科学大臣奨励賞

南国の味覚よそして火の酒よ

参議院議長賞

王様に会いに童話の森へ行く

川柳大賞

いくさのない海の中心まで泳ぐ

大会賞

バラの花褪せても王座譲れない

残照の丘へ長恨歌を埋める

丘萌えてプラス思考のスニーカー

九十九折りカープミラーに母がいる

南風と約束がある花の種子

丸い背なみかんひとつを慰霊塔

鉄塔で雲が時々昼寝する

祈願しに一番高い山に行く

炊きたての白い飯から逃げられぬ

兵庫 梶原サナエ

祈りから今日が始まる飯茶碗

野苺の味覚に集うわらべ唄

祖国復帰三十周年記念特別賞

沖繩県知事賞

三十年いまだ奥歯を噛むいしじ

那覇市長賞

三十年語り部の皺濃く深く

糸満市長賞

真珠婚桐の筆筒に艶が出る

(財)沖繩協会会長賞

三十年タンスに眠るバスボート

(社)全日本川柳協会会長賞

三十年の苦節チュラさん抱く

ジュニア部門

見たせは塔の多さに胸いたむ

まぶにの丘未来平和の発しん地

新垣千明

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
もくせい 川 柳 会	15日(月)午後1時から コンビニ・のろい・迷路 自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯 の 花	18日(木)正午から 人相・ぐらぐら・袖 絵手紙・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
城 北 川 柳 会	20日(土)午後1時から 柱・迷う・ムード・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
川 柳 会 梨 花	20日(土)午後1時から 今度・買う・害・プール 自由吟	鳥取市勤労者総合福祉センター1F会議室(鳥取駅南) 〒680-0841 鳥取市吉方温泉4-268-205 宮本方 坂田和歌子
岸 和 田 川 柳 会	20日(土)午後1時半から 突く・適当・道楽・名残	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川 柳 ねやがわ	21日(日)正午から 矛盾・注ぐ・広告・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	21日(日)午後1時半から 強がり・流れる・無駄 自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川 柳 塔 みぞくち	22日(月)午後8時から 浴衣・行水・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
南 大 阪 川 柳 会	24日(水)午後6時から 読切り・紹・アーケード・外観	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳クラブ わたの花	26日(金)午前10時から チャンス・湧く・はかない 比較	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川 柳 同 好 会	27日(土)午後6時から 情け・パネ・少年・奥	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 川 柳 会	28日(日)午後1時から 性格・移る・ニュース 「はっきり」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	28日(日)午後1時から 無・じれったい・レベル	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京 都 塔 の 会	29日(月)午後1時から 脈・まだら・余暇	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

7 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	4 日(木)午後 1 時から 仕掛け・穴・事件	船橋フロムワン (船橋商店街内) 近鉄奈良駅西へ 7 分・JR奈良駅北歩 5 分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
尼 崎 いくしま	5 日(金)午後 1 時から 愛想・文・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川 柳 塔 唐津支部	5 日(金)午後 1 時半から 小説・ライン・この頃	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
富 柳 会	6 日(土)午後 1 時から 内緒・小さい・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉 吉 川 柳 会	7 日(日)午後 1 時から ラジオ・紙・取る	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
西宮北口 川 柳 会	8 日(月)午後 1 時から 常連・守る・ころり・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩 3 分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほ たる 川 柳 同 好 会	9 日(火)午後 1 時から 曲線・流す・じりじり	豊中市立養池公民館 阪急・モノレール養池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	9 日(火)午後 1 時半から 海・バランス・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス⑨番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
堺川柳会	11日(木)午後 1 時から 利口(共選)・フルーツ ひくり(折り句)	堺総合福祉会館 2 F 南海高野線堺東駅役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川 柳 塔 打 吹	13日(土)午後 1 時から ミステーク・貯まる・醒める	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川 柳 塔 ま つ え	13日(土)午後 1 時半から 行灯・地藏・夜空	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島崙丘
川 柳 塔 みちのく	13日(土)午後 4 時から 敵・残る・まんじゅう	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
八尾市民 川 柳 会	14日(日)午後 1 時から ライバル・押す・さまよう 痛切	山本コミュニティセンター内3F学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 わかやま	14日(日)午後 1 時から 七・接点・解く・腕試し	近鉄カルチャーセンター 2 F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良

編集後記

☆表紙裏でご覧いただいたように、今年は二賞の応募締切日が8月10日と少し早くなった。13年9月号以降の川柳塔・水煙抄欄から各自で選んで前準備しておいてもらって、8月号到着次第折込みの用紙で、出来るだけ早く応募して下さい。うお願いしたい。

☆選考方法が変わって今年で四年目になる。

	路郎賞	川柳塔賞
平成11年	255名	123名
平成12年	245名	139名
平成13年	225名	138名

このように何故か同人の応募者数が減ってきている。受賞の機会はみんな均等にるので、どうぞあつて応募して下さい。

☆「私の健康法」を募集し

たところ、7名の方に応じていただき全て掲載した。一年中で最も過しにくい時期を乗り切るために、この特集が一助になればうれしく思う。

☆またまたひと様の句を拝借。「校正の目をすりぬけてゆく誤植 高島啓子」二人で校正したが気付かない須郷井蛙。こちら編集部でも心をついにし、目を皿にして校正に取組む。しかし、本が出てから誤植がわかると「何でこんなところを見過したんや!」と、地団駄を踏みたいような初歩的なミスがほとんどで、情けなくなる事が多い。

☆同人・誌友の皆さんの大切な作品や名前に、間違いがあつては本当に申し訳ない。気付かれた場合は遠慮なく指摘して欲しい。編集部からお願い——字は楷書ではつきりと。(ふ)

ひとこと

女が廃る?

時計台ビル川柳がビリオドを打ちました。全国の皆様のご支援に感謝あるのみです。実力も経験もない事務局、まして生来のチャランポランには相当きつい仕事でしたが、途中で投げ出せば女が廃る?。心優しい先輩や柳友のご協力で何とかゴールまでこぎつけたのが実情です。都合十回の募集に毎回数千の集句。出来る事ならば

全ての方に「時計台」を味わって頂きたかったのですが…。

募集広告掲載を柳誌の他に公募ガイド誌、懸賞雑誌にもお願いした結果、大学生や二十代、三十代の所謂川柳人以外の方々の葉書がどんどん届き、フレッシュな感性の句と、個性豊かなコメントのオンパレードに、川柳の明るい未来を見つけました。

(播本 充子)

★電車内風景が変わった。「混雑した車内では携帯電話の電源をお切り下さい」のアナウンスをよそに、着メロはあちこちで鳴り、メールの操作で指は忙しい。

朝七時、電車通学している私立中二年生の孫を見送る。家を出て5米も歩かぬうちにポケットから何やら取り出した様子。もう始まったメール交換。あつて危ない。後から車が、帰って行くのは子供の私の役目、

確かにケイタイは利便性、必要性和い超スグレモノであるには違いない。

★私が孫の歳頃だった頃は各家庭に電話はなく、呼び出し電話であった。呼びに行くのは子供の私の役目、安になった次第。

その代り近所との親密度は現在と比べるべくもない。

★ケイタイばかりではない。あらゆる面で世の中どんどん変わりゆく。これまでSFの世界だった出来事が現実となつてゆく。

★世の中の進歩に取り残されそうな僻みから言うのではないが、進歩もピークに達すると減びに通じてしまふのではないかと、ふと不安になった次第。

(希)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（9月号）」

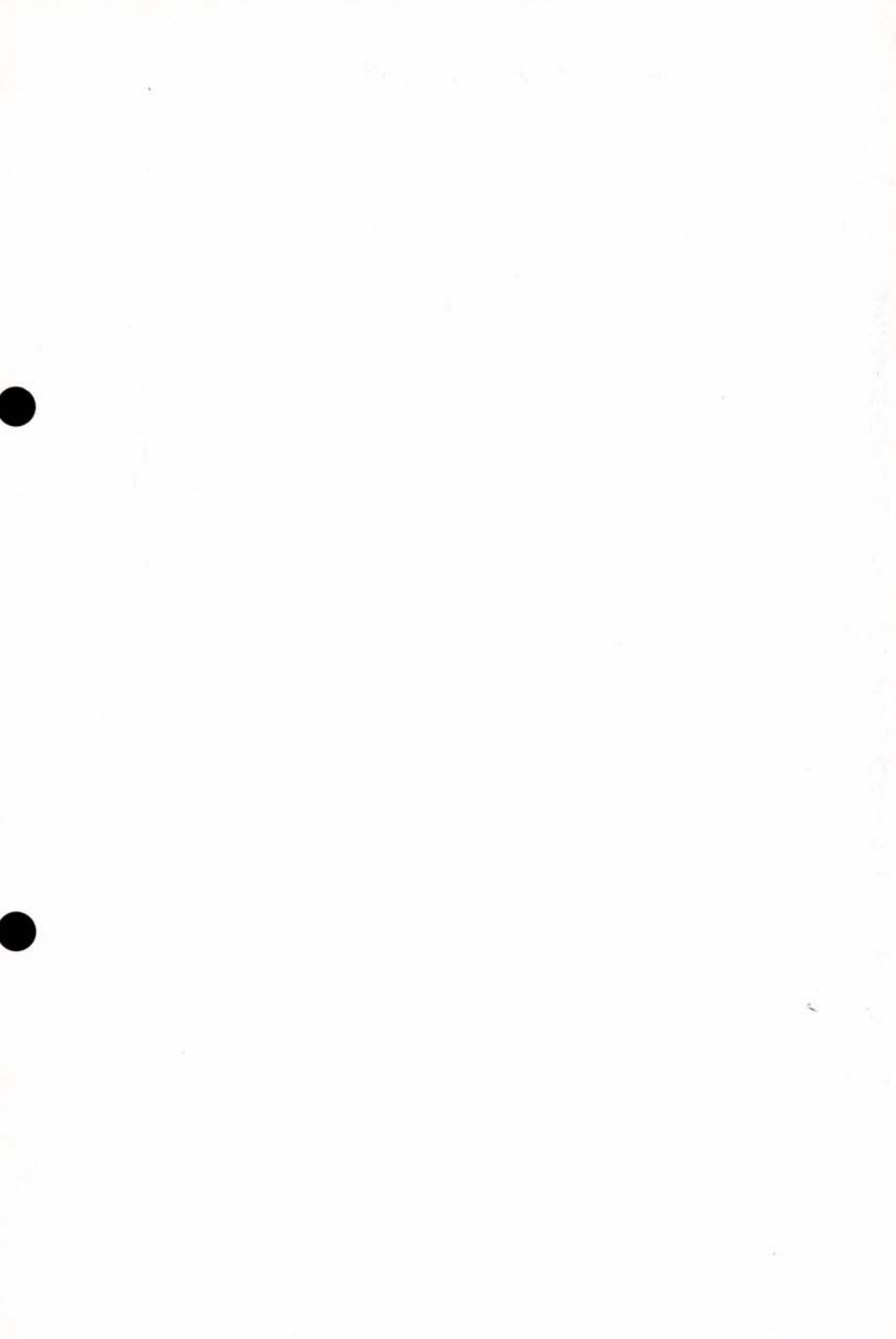
地名

姓・雅号

きりとらせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

9月号発表(7月15日締切)

川柳塔(8句)	河内天笑 選
水煙抄(8句)	奥田みつ子 選
愛染帖(3句)	波多野五楽庵 選
茴香の花(3句)	政岡日枝子 選
吟課題「小説」	井伊東吉 選
「ライオン」	山根めぐみ 選
「この頃」	小澤幸泉 選
初歩教室「ベットの(3句)」	吐田公一担当

10月号
課題吟「積む」「家西」「初歩教室「黒」」

路郎忌 本社7月句会

とき 7月8日(月) 午後5時半・6時半締切
ところ アイーナ大坂 4階
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分

兼題 「のびる」 津守柳伸 選
「友」 宮西弥生 選
「だます」 田中正坊 選
「凡人」 住田英比古 選
「弟子」 河内天笑 選

席題 1題 当日発表(各題2句以内)
会費 1000円 投句料 500円

本社8月句会 8月7日(水)

兼題 「リズム」「本物」「祈る」
「冗談」「包む」

夜市川柳募集

第2回「岸」 岸桂子選
ハガキに3句 7月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・茴香の花欄・一路集(課題吟)および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円(送料92円)

半年分 五千円(送料共)
一年分 九千八百円(同)

二〇二二年(平成三十四年)七月一日発行

編集兼 発行人 河内権治

印刷所 美研アート

〒545-0005 大阪市阿倍野区三好町二〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)691-1691 四番
振替 〇〇九八〇一五 三三六八番

紀州梅干



おいしさ、田舎づくり
Sankō 三幸農園

〒640-8412 和歌山市狐島508

TEL 073-455-8899 FAX 073-455-8773

地方発送承ります。

商品パンフレット差し上げます。

ご注文は ☎0120-04-8899

●インターネットでも、ご覧頂けます。

<http://www.naxnet.or.jp/~sanko>

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。

あなたの思いをかたちにします

美 研 ア ー ト

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178